

325-4861



1200501382318



始



臨機應變

釋宗演著

大京堂藏版



序

古來禪門は黙に宜しと云ふ、何ぞ言の囚はれたるや、果して然らば露柱燈籠みな禪を會す、今時禪門は説に宜しと言ふ、何ぞ言の泥なるや、果して然らば鴉鳴鵲噪亦みな禪を會す。

禪は説にもあらず、又黙にもあらず、是猶珠は青黄赤紫にあらざるが如し。而も其の體や透徹精明なるが故に、其の來るに應じて能く青黄赤紫と成つて其の光を發するが如し。若し夫れ眞箇這裡の靈機を悟得する底は、説の時黙、黙の時説、語黙動靜、體安然たらんのみ。

不可往道人識

近比予が紙衣寮の瞎龍子、予が粥前茶後、人に對して縱談放言せしものを筆録して『臨機應變』と題し來つて點檢を得んと乞ふ。乃ち咄して曰く、世に羊頭を掲げて狗肉を賣るものあり、其情寧ろ慙むべし、贗緇あり佛を販いて口を餉す、其意大に惡むべし、汝無慚愧の漢、亦山僧を沽つて醜を外に揚げんとするか、速退々々と、瞎龍子赧然顔を掩うて出て去る、是亦『臨機應變』の方便にあらざるなきか。

臨機應變 目次

平常の覺悟……………	一	修養の根本義……………	一五
人生の一大要道……………	一	修養の方法に就て……………	一五
絶對無二の力……………	二	寛仁宏量の王……………	一六
佛教の本旨……………	四	ピクトリヤと佛國の少女……………	一九
大動亂と孫子の教……………	四	缺乏せる日本人の宗教心……………	二〇
恐るべき大敵……………	六	宗教の眞意義……………	二三
瞬間の油斷を許さず……………	七	心は常に光風霽月……………	二三
須臾も離るべからず……………	八	自己の安心を得る……………	二三
君子の著眼點……………	九	人の心が直ちに佛の心……………	二四
活佛教の往來……………	二	宿かさぬ人の情……………	二五
僧侶三人無言の行……………	三	佛者に敵なし……………	二七

吾這裡生死なし……………二六

人生の一大難關……………二六

吾這裡生死なし……………三三

佛光國師の行履……………三三

予が爐端に投じ來れ……………三三

無寒暑の處……………三三

參禪は避難所……………三三

楞伽の家風……………三三

宗教の意義を知れ……………三三

禪とは何ぞや……………三三

弾力性を養へ……………三三

須らく修養せよ……………三三

煩惱即菩提……………三三

心を制すべし……………三三

心は主なり慾は従なり……………四〇

菩提の靈光……………四〇

日々是好日……………四〇

只一面の明鏡……………四〇

顔面問答……………四〇

自己の本務……………四〇

佛作佛行……………四〇

解脱の精神……………四〇

禪宗の本旨……………四〇

修中の疑難……………四〇

大悟の消息……………四〇

行者の顛倒……………四〇

解脱と修行……………四〇

大智慧の人たれ……………四〇

大智慧の活用……………三三

大智慧の光明と眼識……………三三

知解即解脱……………三三

寂滅の美……………三三

解脱の趣味……………三三

千古の名言……………三三

大解脱底の人……………三三

婦人の修養……………三三

近來の婦人問題……………三三

婦人と男子との關係……………三三

佛教より見たる婦人……………三三

婦人の三障及十惡……………三三

女人成佛の語……………三三

妻に對する夫の心得……………三三

東西洋の婦人關……………三七

精神美を修せ……………三七

教に順ずる心……………三七

文明の生む悲惨事……………三七

四苦八苦の解……………三七

命數の順路……………三七

何が一番めでたいか……………三七

悲しむべき形骸……………三七

我とは何ぞや……………三七

即身成佛の義……………三七

宗教的安心……………三七

精神界の領分……………三七

文化に伴ふ要求……………三七

生死問題(上)……………三七

言ひ易く行ひ難し……………一九

生死の意義……………二〇三

死は一大魔物……………二〇四

活動の本源……………二〇六

生死一如の端的……………二〇七

生死問題(下)……………二〇九

 瀉山警策……………二〇九

 進退維れ谷るの時……………二二

 五慾制仰の譬喩……………二二五

 私闘の誡め……………二二七

 老人の教……………二二八

 無常の殺鬼……………二三〇

 心は巧畫師の如し……………二三三

 道は邇きにあり……………二三五

 智と情と意と……………二三五

 實行的の修養……………二三六

 瑞巖の彦禪師……………二三七

 社會改善の方法……………二三八

 人々脚下を照願せよ……………二三九

宗教的修養……………二三三

 應病與藥……………二三三

 運命と自覺……………二三三

 六度滿行……………二三六

 極樂淨土……………二三七

 悟りと生活……………二三九

 心の鏡……………二四二

 誠實の力……………二四三

 人生の意義……………二四四

利益幸福以外……………二四一

人間の本分……………二四七

精進努力の信念……………二四八

生存の意義……………二五〇

伽陀陀の話……………二五一

拔苦與樂……………二五三

 煩悶の心理……………二五三

 家庭に於ける煩悶……………二五四

 努力上の煩悶……………二五五

 内賊外賊……………二五五

 神佛を頼る心……………二五七

 一道の光明……………二五八

 良心と獸性との戦ひ……………二五九

 修養の必要……………二六〇

 自己の立脚地……………二六一

 法を聽かんとする者……………二六一

 器に應じての說法……………二六三

 宗教心の發路……………二六五

 傳大士と道儒佛……………二六六

 道とは何ぞや……………二六八

 如何が満足せん……………二六九

 智的欲求……………二七一

 精神上の立脚地……………二七三

 利慾と生存慾……………二七四

 永劫の伴侶……………二七五

 煩悶は何れより起るか……………二七七

 新らしき女……………二七九

 衝動は主義に非ず……………二七九

美女其の敵を煨く……………一八
 菩提心を發せよ……………一八
 拔苦與樂なれ……………一九
 信仰を異にする夫婦……………一九
 佛教の根本思想……………一九
 信仰上の排他主義……………一九
 祖先崇拜に一致する國體……………一九
人生と宗教……………一九
 樂觀と悲觀……………一九
 當人の通有性……………一九
 八苦の世界……………一九
 神に祈れ佛を念ぜよ……………一九
 臨終の稱名……………一九
 死して亡びざる信念……………一九

安心立命せよ……………二〇
精神的な生活……………二〇
 人間の價値……………二〇
 精神的生活……………二〇
 吾人の生命……………二〇
 漸源と道吾……………二〇
 冷暖自知せよ……………二〇
 手枕一睡の夢……………二〇
自性徹見の妙味……………二〇
 此性如何が徹見せん……………二〇
 到底即禪道三昧……………二〇
 聖徳太子の見地……………二〇
 和魂を發揮せよ……………二〇
 山崎闇齋の活眼……………二〇

修行の階梯……………二二
 儒教と佛道……………二二
 百尺竿頭進一步……………二二
 禪は不言の説法……………二二
 名刀の銘……………二二
實相を看破せよ……………二二
 悪魔と人間……………二二
 心は奇々妙々……………二二
 人は暗示に罹り易い……………二二
 佛と悪魔……………二二
 幽霊の正體……………二二
 亡妻の幽霊……………二二
 心滅すれば法滅す……………二二
誰か是れ主人公……………二二

僧侶の本分……………二二
 隨所に主となれ……………二二
 貪著する勿れ……………二二
 生活に超然せよ……………二二
 我儘は禁物……………二二
 見思の惑を脱せよ……………二二
一念子を看守せよ……………二二
 光輝大千に滿つ……………二二
 人間の時節……………二二
 前者の本分……………二二
至極の大道……………二二
 豈に舌頭を弄せんや……………二二
 衆生本來佛なり……………二二
 ありの儘の脱落……………二二

天地一枚萬物同根……………二五九
 文明の悲哀……………二六〇
 大學の道……………二六一
 僧肇法師の遺偈……………二六四
 異性調和の美……………二六六
 禪の本領……………二六八
 欺かざるは信なり……………二六九
 欺かざる心……………二六九
 人を鏡とせよ……………二七一
 生死は猶晝夜の如し……………二七三
 信用が第一……………二七五
 宗教と産業……………二七六
 宗教心の發露……………二七七
 眞個の大信念……………二七九

報恩の精神……………二八一
 中といふ意義……………二八一
 佛教も中の一字……………二八二
 たゞ忠の一字……………二八三
 忠孝一致……………二八五
 報恩の精神……………二八六
 人としての修養……………二八七
 修養の意義……………二八七
 日曜は宗教日……………二八八
 天職に興味を持って……………二八九
 治生産業佛法と違背せず……………二九一
 精神上に錦を飾れ……………二九三
 努力が修養……………二九四
 向上の一路……………二九六

艱難……………二九七
 悔悟……………三〇〇
 信仰……………三〇二
 博愛……………三〇四
 感謝……………三〇七
 希望……………三〇九
 力用の意義……………三一一
 修養の第一歩……………三一一
 力とは何ぞや……………三三二
 與奪縦横の機略……………三三三
 精神の力……………三三五
 本末を顛倒する勿れ……………三三六
 死生の境……………三三八
 病氣になりきる……………三三八

實は死にともない……………三三九
 御恩報じの時……………三三〇
 病中所感……………三三二
 先賢の臨終……………三三三
 新陳代謝……………三三四
 眞理の大寶藏……………三三六
 人生の眞相……………三三六
 眞理を求めて……………三三七
 古池や蛙飛び込む水の音……………三三九
 解つたやうで解らぬ……………三三二
 漱石氏と禪……………三三三
 弱き女の爲めに……………三三八
 天人と夜叉の所在……………三三八
 寸善尺塵……………三三九

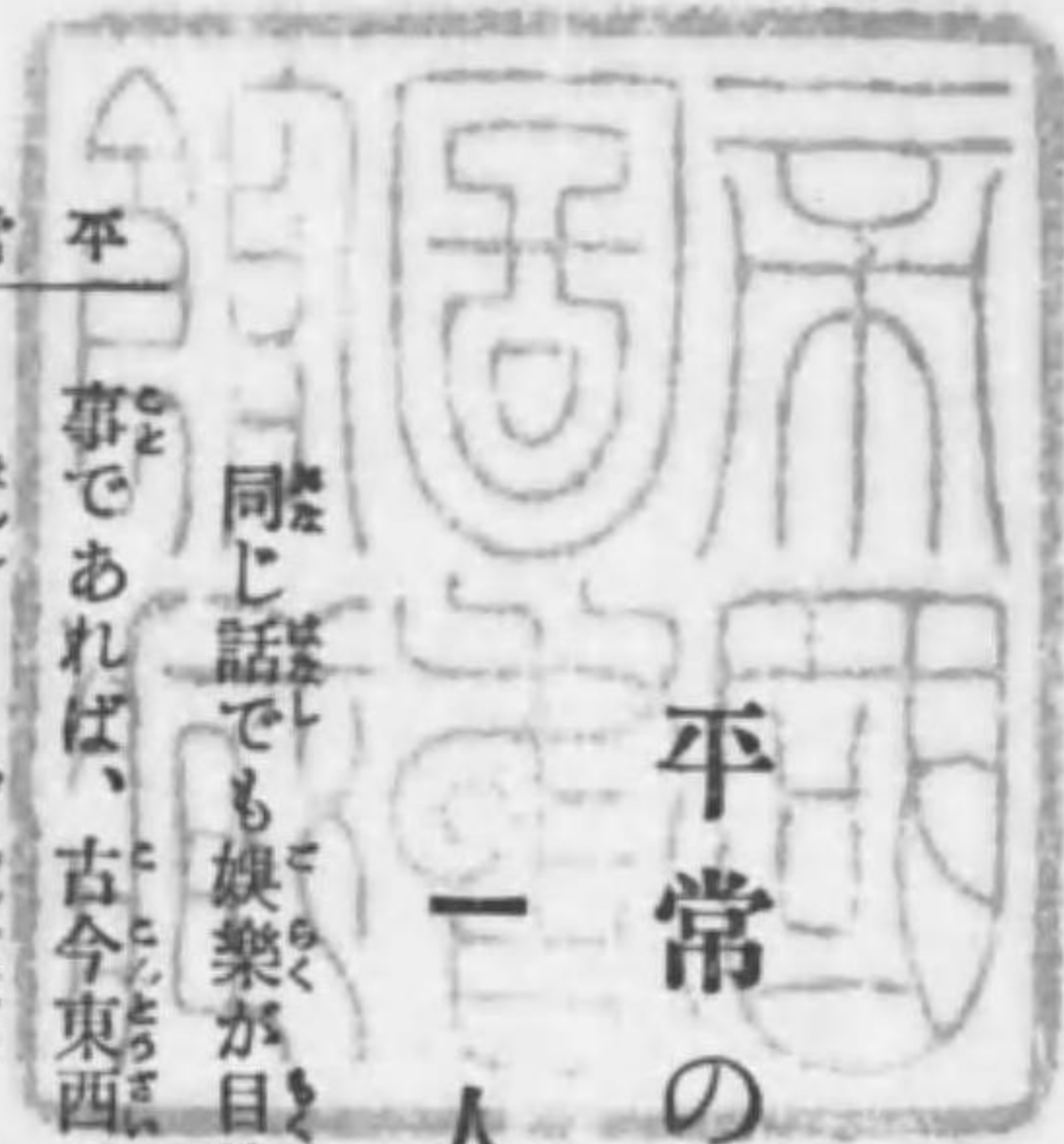
執念剛神とは何ぞ	三〇
千代能の遺文	三三
強き女となれ	三四
觀世音の當體	三六
勇氣と慈悲	三七
水火も長るゝに足らず	三九
橘姫の義氣	三九
ゴタイヴァ夫人	三五
無上の歡喜	三五
あやしきは人心	三五
心の落着	三六
安心の道如何	三九
トルストイの懺悔	六一
英雄の心地	六三

楠公決死の前日	三六
眞の安心	三五
盲目同志の出會	三六
隻眼を開け	三七
宗教的情操	三九
迦旃延就尊者	三七

目次終

臨機應變

釋宗演著



平常の覺悟

一 人生の一大要道

平常の覺悟 平常の時に於て深く信念を養ひ、安心決定の出來て居る人は浮世の荒波洪渺に遭遇するも

事であるば、古今東西の例を挙げ來りてお話するのが當然である。然るに衲の今述べんとす

る本旨は、無論以上の事も必要ではあるけれども、大體は各自の安心立命、これが少なくて

も精神修養に資する人生の一大要道と信するのである。

平常の時に於て深く信念を養ひ、安心決定の出來て居る人は浮世の荒波洪渺に遭遇するも

國家の一大事變に處するも確固として不動着、自己の運命は自己に於て開拓する事が出来るのである。然るに世の多くの人々は非常の時、即ち一家内に何事か起つたとか、又は國家の難局と云ふが如き場合、俄かに足元から鳥の立つた如くに感じて騒ぐが、平生は安心とか、立命とか、乃至神とか佛とか云ふ事は、全く人の事の様に思つて居る。

併し、人生は多く意の如くなるものではない、當にした事は外れ勝、時々刻々轉變機りなのが常である。既にこの身體すら元是れ地水火風の假の固と云うて異分子の結合によつて出来て居る、これが具合よく調うてゆかねばならぬ筈のものであるが、時々不調となつて病氣を起したり、順境にある者が一朝にして逆境に陥り、樂が苦みとなり、永生する筈のが存外短命に了り、健康體の積りのが病氣でもすると、人間は今更の如くに狼狽て、神や佛の力に頼らねばならぬと思ふのが、遅時ながら湧き出づる人の情である。

二 絶對無二の力

吾人は日常眞の我力になるものは何なりやと深く攻究し、思考せねばならぬ。學問の力は是非曲直の理窟か。成程、學問でも随分解釋の出来ぬ事はなからう。理窟でもある程度迄は辨別が出来れば、ある程度迄であつて、それ以上になると、どうしても人間以上の何物かに依つて安心するところがなくてはならぬ、一物相對の見解より一步を進めて絶對無伴、如何なるものと雖も相抗する事の出来ぬ、最上の權威と力のあるものがあることを知らねばならぬのである。これ神とも云ひ、佛とも云ふ、この絶對無二の力に依つて吾人は安心の道を得ることが出来るのである。

元より法の上に二義の差別はない、けれども人根に利鈍の別あり、佛陀は其根氣に隨つて或は自力と説き或は他力と教へられた、併し自力を離れて他力なく、他力を離れて自力なし、自他は單に安心の堂奥に達する入口の門である、然るにこの門口に於て是非の論據を逞うし、清酒たる奥座敷のある事を知らぬと云ふのが現今我邦に於ける宗派の状態である。

三 佛教の本旨

佛と云へば凡夫と全然懸け離れたる如く考へ、極樂と云へば娑婆と交通の斷絶したる別天地なるかの如く思ひ、宗教と云へば實社會と遠ざかつてあるものゝ如く感ずるのが抑もの間違ひである。

この血汐の迸る生々しい身體のまゝに佛陀と感應し、この有爲轉變の娑婆が直ちに極樂世界と交通の出来るものでなくては眞の佛法とは謂はれぬのである。現世は假りの住家、何うでも關はぬ、死して西方十萬億土に樂隱居をしたいと云が如きは大なる誤りである、極樂は西にもあれば東にも、北にもあれば南にもある。一種の僻見に拘へられて眞の佛教を知らぬやうでは、却つて安心の邪魔になる事であらう。

四 大動亂と孫子の教

借て此平常と非常とに就いて、今日は申す迄もなく世界の動亂、國家の非常時である、此時に方り思ひ出さるゝ名句がある。そは

其來らざるを頼むこと勿れ、自ら待ちあることを頼めよ、其攻めざるを頼むこと勿れ、我に以て攻むべからざるあることを頼めよ。

佛陀所説の經典中にも此意味の事はあるが、此句は彼の有名な孫子の中の言葉である。孫子と云へば時代は古い、乍併、其兵法、戰略、軍事に處する精神に至つては今日直ちに須ひて以て、大いに資する所ある事を某將軍は余に語られた。「其來らざるを頼む事勿れ」と單に云うたのみでは一寸分り悪いが、冒頭に敵の一字を加へれば其意はよく通ずる事と思ふ、即ち、幸にして目今我國には敵の攻め來るものがない、けれどもこれは頼みにならぬ、安心は出來ぬ、然らば安心の道如何と云ふに「待ちあることを頼めよ」何時如何なる不意打があつても我には之に對する充分の覺悟は平常に於て出來て居る、一向差支はない、何處からでも攻めて御座れと云ふ一大信念こそ眞の頼みになると云ふものである。こは單に戰爭の一時の

みではない、吾人日用光中の往來、一舉手一投足の上に於ても些の油斷を許さぬ、精神修養の眼目を述べられたのであつて、この意味は經典の中にも多くある。

五 恐るべき大敵

次に「其攻めざるを頼むこと勿れ、我に以て攻むべからざるあることを頼めよ」と、これも前句と同様、我に攻め来るものがないと云うて安心は出来ぬ、我には我より以上の如何なるものが攻め来るとも、敢て動かすべからざる強い力を頼みとするでなくては甚だ心細い譯である。

此一事を心頭に刻み込んで、日々夜々一身の進退にも一國の安危にも瞬間も忘却せざるの修養が必要である。有形上の敵はある程度迄は畏れねばならぬ、けれども左程のものではない、然るに無形——即ち精神上の敵たるや、寸毫の油斷をしても直ちに敵の乗する所となり、無慘の最後を遂げねばならぬ。故に我の精神を維持する事恰も戦事に於ける要塞の如くせよ。

我精神を維持する事恰も、敵の襲來を防ぐ水雷の如く、地雷火の如く心得て居らねばならぬのである。

六 瞬間の油斷を許さず

佛陀は四十二章經の中に説いてある「恰も鎧を着けて陣に入るが如し」と、信念の薄弱なるものは我家の門を出でても半途にして退いて了ふ、稍強固なるものになると敵陣に入り交戦幾回、終に彼我共に倒るゝ迄戦闘を續ける、これも勇ましい、乍併、眞の勇者は難なく敵を破つて凱歌を奏するに至るのである。

佛陀は決して戦闘を好む譯ではないが、例を擧げて精神修養の忽諾にすべからざる要道を示し、同時に我この精神を持するに寸分の隙間があつては、敵の乗する機會となる事を教へられたのである。納の經驗から考へても、修養は斯くしてこそ初めて眞の効果ある事を感じて居るのであるが、言葉と行爲とは兎角一致しない、そこで努力が必要である。

往昔、曹洞の祖師洞山和尚は綿密なる家風、嚴正なる修行を以て有名な人である、然るに其伽藍の一隅に祭られて居る鎮守の神が、一回洞山和尚の顔を見たいと始終つけ覘つて居たが正念持久不斷相續、十年一日の如く少しの間隙だもない。偶々飯頭の一僧誤つて信施米を庫下にこぼした、これを見た洞山和尚我知らず叱られたが、此瞬間に多年つけ覘つた鎮守の神は和尚の顔を見たと云ふ事である。孫、子の説と云ひ、洞山和尚の行持と云ひ、共に修養の好資料である。

七 須臾も離るべからず

自己内心の賊は常に付け覘つて居る、瞬時も油断をすれば敵は直に其間に乘じて跋扈するのである。されば易にも「危を知り而して常に備を設く」と言はれた、我々は兎角咽喉元過ぐれば熱さを忘るゝの癖があつて、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの大和魂も、兎もすれば平素は暖衣飽食の徒と成り易い、故に「常に備を設く」で小心翼翼々として平常に於て大事に

處するの覺悟を益つて居らねばならぬ。軍隊でも一朝事あれば豫備後備は勿論、國民軍迄も召集せぬとも限らぬのであるが、併し平常には立派に訓練された常備軍と云ふものが必ずある如く、從軍至夜、寸時も身を離れぬ所の實際活社會に處する修養がなくてはならぬ。故に中庸の一章に、道は須臾も離るべからざることを説いて、

道也者不可須臾離也、可離不道是故君子戒慎乎其所不覩、恐懼乎其所不聞、莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。

とある。實に吾人の坐作進退、常に身心に體して離るべからざるもの、之を指して道と云ふので、若し離るべきものであれば道と云ふべからざるものである。されば凡そ道を體得したる君子は、人の観ぬ所人の聞かぬ場所にも、常に戒慎し恐懼するのである、道體には表裏なく隠顯なく、愈々不離心である、暫時も油断をすれば、直に敵の乘ずる機會となる。

八 君子の着眼點

古語には「君子對青天而懼、聞雷電而不驚、履平地而恐、涉風波而不疑」とある。遠い旅程に於て急に雷電に逢ひ或は風波激浪に遭遇する様な事があつても、それは敢て懼るゝには及ばぬ、却つて平地を行き、青海原を渉る時に凡人は間違が生じ易いのである。百萬の大軍を叱咤する猛將軍も一匹の蠅や蚊には驚く事なき能はざるの道理、衲等も人に生れ透脱の大事を説いて居り乍ら、剃り立ての頭に蚊の一匹も來ると、夫を苦にせずには居られない。一宵千金を惜しげもなく飛散する者も、一寸茶碗の一つも割ると大騒ぎをやるのである。

凡そ物體上に就いて言へば、隱あり顯あり、龐あり細あり、大あり小ありであるけれども、その精神上 即ち道體の上には、隱顯微見大小長短はない。是を以て微として顯ならざるなく、隱として見はれざるはないのである。そこで「故に君子は其獨りを慎しむ」と云はれた。この獨がまことに大切な處で、大道に體達せる君子は行ひに表裏なく、隱微なく龐細なく、自もなく他もなく、人我以上の唯我獨尊にして即ち絶對無我の境界である。

九 活佛教の往來

元來宗教とか、佛教とか云うても、直に其儘取つて以て現世に應用の出來る様になつて居る、即ち吾々が自ら思ひ、自ら成し、自ら行つて居る事は決して永久に消ゆる筈のものではない。佛陀はこの道理を發見して教とせられたのである。故に佛教の安心は、この千變萬化有爲轉變窮りなき世の中に在り乍ら、進み進みて自己の運命を開拓する、其間の到處々々に於て活佛教の往來となり、安心立命の本家郷となつてゆくのである。

吾人は誰しも赤裸々にして此世に生れ出た、即ち親から貰うた畑はお互に立派に出來て居る、これを草切り耕して最後の收穫を得る様にしなければならぬ。其處に宗教の必用があるのである。

宗教は道德の基礎である。世間法と佛法とは決して二つある譯のものではない。佛陀はこれを「治生産業直ちに實相の法門也」と説いてある。故に昔の人は佛法とは如何といふ間に

對して、直に答へた。

佛法は障子の引手峯の松

火打袋にうぐひすの聲

手の舞ひ足の踏む所、坐臥進退、これが直に佛法である。今日なら一寸一吹煙草を吸ふにもマツチと云ふ便利なものがあるけれども、住昔の人は火打袋と云ふものを持參して居つた。その腰に下げた火打袋の中に佛法は生々して居る。決して遠方に尋ね探るには及ばない、春來れば南窓一枝頭の梅花、鶯が來て法華經と啼く、そこに佛法はある。何も火打袋と鶯にのみ限つた譯ではない、吾人が朝から晩まで日用光中の一舉手一投足が悉く佛法上の往來で、商人が十露盤を手にするも、學生が學校に通ふのも、來客があつて之に應接するのも凡て活佛法の現成である。

然るに其間寸分の心に隙があれば五欲六塵の妄想分別が威を逞うして、終には悔いても及ばぬ事になる。

十 僧侶三人無言の行

是に就いて思ひ起さるゝ落語の如な事がある、これは恐らく事實ではあるまいけれど、無住國師の「沙石集」の中に出て居る話である。

或る山寺に三人の僧と一人の小僧とが居つた。ある日の事三人の僧が互に誓約をして一週の間無言をしようではないかと云ふ事になつた。一寸此位の事は何でない事の様にも思はれるが、事實容易に實行の難い事である。そこで一週間と云へば一寸長い、三人は其間の用事を何吳となく小僧に言ひ付けた、小僧は平常叱られ通しであるから、せめて此間だけでもその埋合をする考で大に喜んで、外面は快く承知したのである。

いよ／＼三人はこれから本堂に赴いて坐禪を初めたのであるが、フト見ると本尊前の常燈明が今や消えんとして明亦滅、それを見て居た一人の僧が我れ知らず「これ小僧―燈明が消えるではないか、あれ程よく言付けて置いたのに何をして居る」と怒鳴つた。これが所謂一

種の心理作用で、其聲を聞くと他の一人の僧が「八釜しい、無言の行をやつて居るのに今の
大音聲は……」と、これも我を忘れて注意の發言をしてうたのである。すると、これ迄黙
黙として端坐せる残りの一僧が、如何にも慨嘆に堪へぬ如く「あゝ情ない事をして呉れた、
折角の無言の行もとう／＼駄目になつて了うたではないか」と言うたとの事である。
斯の如く一點心内に油斷が出ると、忽ちの間に願行も消え失せる。この精神の準備が最
も難いのである。

今日世界の大動亂に處して考ふるに、戦場の慘澹たる光景は實に想像だも及ばない事であ
らうと思ふ。けれども翻つて考ふるに外部より來る敵は人間一生を通じて左程迄に懼るべき
ものではない、懼るべきは自己心内の敵である。

口は如何に平和主義を唱へ人道を説き、四海同胞と叫んでも、事實その言ふ所、説く所と
矛盾して居る様では何にもならぬ。宗教の眞諦は至誠實行にあるのである。而して、道は須
臾も離るべからずと前にも述べし如く、人間としてはこの宗教や道には一日たりとも離れて

生活する事は出來ないのである。故に苟も修養に志す者は先づ第一に自己心内の賊、精神上
の敵を滅す事に努力せられんことを希望する次第である。

修養の根本義

一 修養の方法に就いて

修養に就いても種々な仕方がある。身體から修養するのも一つ、又心から修養するのも一
つ。大別すれば此の身體の修養と、精神の修養との二つに歸するのである。併しこれは假り
に分けたのであつて、大體吾々の身體とか心とかは引分けやうもないのである。聲と響、夫
を引分けようとしたところで出來ない。形と影とを引分けようとしたところで、引分けらる
るものでないと同じく、密接なる關係どころではない、殆んど裏と表といふやうな最も親し
い間柄である。故に身體の修養とか、心の修養とか云ふのは假りに便宜上分けて謂ふのであ

る。此身體と心、物質と精神とは夫程親しい關係のものであるけれども、私共の立場から考へて見ると心は主にして身體は客と云つても宜からうと思ふ。乍併、これは學問と宗旨との立場に依つて異なるので、彼の唯心論者から謂へば、心が何處迄も主であつて、唯物論者から謂へば、物が何處迄も主となるのである。然し主と客とは地を易へれば同じものであるが、先づ少年少女時代には形の上から修養して、漸次心を謹直にすることが肝要である。

さて又心から修養すると云ふ事は、吾々の理想通りに見て行かねばならぬ。そは何であるかと云ふに、先づ眞とか、善とか、美とか、斯ういふやうなものが理想である。眞なり、善なり、美なりを實現して活かして行かうと云ふのが理想である。教育の目的も進めて行けば此點に来る、吾宗教も亦其の通り、戒、定、慧と云ふものを修して、理、智、用の完全を期するのである。

二 寛仁宏量の王

理窟は如何に立派でも、此を實行せねば宗教の本旨には契はぬ。日々是好日と云ふ心持になつて感謝の念に充たされ、深遠なる教理を取つて卑近なる行持に現成するにある。併し云ふ事は易くして行ふ事は中々困難なものである。今私が胸に浮んだまゝ二三の例話を擧げて修養の忽諾にすべからざる事をお互に心掛けようと思ふ。

往昔、楚の國の楚王が或時群臣百官を數多宮廷に招いで宴を賜うた。夜は次第に更け渡り酒醉漸く闌なる頃、當時の例として王は無禮講を宣した。こは我朝徳川時代に於てもよくあつた事である。乃ちこの無禮講に依つて上下の心の疎通を計り、君臣の情の圓融を企てたものであらう。時恰も盛夏の頃とて四方は開け放しになつて居る。折悪しくも一陣の風颯と吹き來つて、御殿の燭光は悉く消えて了ひ忽ち四方暗黒となつたのである。然るに宴に連り居る群臣の一人が、綺羅を装へる皇后の袖を惹いた、皇后は驚愕と共に直ちに其の者の冠を抑へて紐を切り取り「誰ぞある、早々燭を持って！」と絶叫した。これには王も聊か驚かぬではないが、元來寛仁大度の君、特に無禮講の席上罪人を出すも本意ならずと思召されてか

「暫時燭に點火する事を止めよ、卿等先づ冠の紐を断て」と命じた。座に居る數百人の群臣悉く王の命令に依つて冠の緒を断つたので、皇后は折角證據物件を握つて居りながら、眞の犯人は分らぬで其場は無事に治まつた。

聽て年數を経過して後、楚の國が他國と交戦すべく餘儀なくせられた事がある、然るに戦ひは何時もありあらず、王は敗軍を督して大いに奮戦せられたるも、却つて身は危地に陥るばかり、今や死を決して諸軍を指揮せんとするの時、敵の大軍俄かに押寄せた、間一髪を容れず、王の前に立塞つて、謂はゞ王の身替りとなつて惡戦苦闘の結果敵の刃にかゝつた男がある、王は其健氣なる勇氣を賞し「誰ぢや」と仰せられた、件の男は斷末魔に及び王に言はるるには「私は過る夏の夕、無禮講に際して畏れ多くも皇后宮の御袖を惹きしに、王の忝なき慈慮により其罪發覺せられず、今日迄餘命を保ち居りし者、只今の奮戦は些か御恩の萬一に酬ひ奉りしのみ」と謂ひ終つて戦死し、ために王は一身を満足せられ、再び仁政を布かれたと云ふ事が古い歴史に書き残されてある。

佛教に攝受と云ふ事がある、何でも受け攝める事、乃ち王は常に能く群臣の心を我心として受け攝められた徳によつて一念誤つた行爲をした臣下も、一朝事あるに及び斯の如き健氣の報恩を全うするに至つたものである。

三 ビクトリアと佛國の少女

又斯る例を西洋に求むれば數多くあるが、彼の有名なる英國のビクトリア帝の如き、尤も慈慮に富ませられたる賢君として種々なる逸話が傳へられて居る。其の一例とも見るべきは王の齡漸く五六歳の頃、或時市中を逍遙された。尤も外國では非公式の場合、帝王と雖も極めて簡單なものである。そこでビクトリアは或る玩具店の前を通ると、其處には小兒の好きさうな誠に珍らしいおもちゃがあつた、其價を問ふと三圓であると云ふが、折悪くポケットには三圓の持合せがなかつたので、急いで御住居に歸り、其丈の金を持つて件のおもちゃを買取つた。子供心に嬉しくて堪らぬ位、頬摺して歸る途中に憐れなる乞食が路傍に立つて

居た。これを目見たビクトリアはそとろ同情の念押へ難く、再び前の店に立戻つて「折角買求めたが、暫時都合があるから、金を返して下さい、おもちやは更に金を持つて買ひに來ます」と云ふて三圓を受取り、悉く乞食に與へて了うたと云ふ事がある。些細の同情心が聽て世界的の仁君と稱せらるゝに至りしも、要するに宗教的感化が其素因となつたのである。又佛蘭西の巴里に美しき心を持つた三人の少女があつて、或日連れ立つて散歩をして居ると、乞食が居つたので一人は十錢を與へ、他の一人は二十錢を與へたが、最後の一人は折悪しく一錢の持合せもなかつた、併し溢るゝ同情心は其儘行き過る事が出來ない、依つて乞食の汚れたる頬に、紅薇膏の如き唇より熱き接吻を與へて過ぎ去つたと云ふことである。

四 缺乏せる日本人の宗教心

斯様な美はしき心を自然に養成し、修養せんとするには單に小、中學の教育のみでは不可ぬ。修身倫理素より結構であるが、更に智育をのみ主とする學校よりも、一般の家庭に於て

宗教的感化をば、其の兩親自身が温く美しき信仰的生活より溢れ出でたる實行を主として、子弟に蒞まねばならぬ。

然るに我日本に於ては、斯る家庭は不幸にしてあまり多くない、随つて智育體育以外、美しき信仰心より發露する徳育の修養と云ふものが缺けて居る。如何に文部省で年々八釜しい訓令を發布したからとて、左程の効果を認め得るに至らぬのはそれが爲めである。

西洋の人は「日本には年寄の子供が多く、西洋には子供の老人が居る」と言ふが、成程宗教的信仰の薄い日本人は自他を欺かぬ行爲をする者は老人になつても至つて鮮いやうに思はれる。内に燃ゆるが如き信仰心のあるものは、恰も室内に沈香を薫すれば、自ら衣袖香しき如く、自を利し他を利し國家社會を利するに至るのである。人間同志であれば欺かれもし欺きもするが、佛や神に對しては虚偽を許さぬ。此點に至ると宗教の力でなくてはならぬ。

世には煩悶懊惱、不平不満に目を送つて居る人は随分ある。罪あれば之を罰するに法律を以てすることが出来るが、之等の人々には教育もよい、道徳もよいけれども更に進んで宗教

的信念に依らずんば、眞善美の理想郷に到達する事は出来ぬのである。

宗教の眞意義

一 心は常に光風霽月

「嫉風怒雨、禽鳥も寂々たり。華日光風、草木も欣々たり。天地一日も和氣なかるべからず。人間一日も喜心なかるべからず。」

凡そ、國民の心得とすべき修養訓は多々ありと雖も、今突嗟に想ひ浮べし以上の句、これは御經の言葉には非されど、吾人日常の好教訓である。之に就て順次宗教の眞意義を述べん。第一句「嫉風怒雨、禽鳥も寂々たり」成程自然界の現象を見るに、爛漫と咲き亂れたる百花の園に、禽鳥は左轉右轉樂しげに轉り暮して居る矢先、一朝暴風雨の襲來せんか、花に心ありせば嫉みの風、怒りの雨とも見える、斯る日になると鳥禽の果に至る迄、恰も憂を合む

かの如く聞えるのである。然るに之に反して「華日光風には草木も欣々たり」で、風柔かにして日暖かなりと云ふが如き時には、心なき草木に至る迄、何となく欣々然たるが如くに見える。故に「天地一日も和氣無かるべからず」である。自然界をして大天地と謂ふならば、人間の身體は即ち小天地である、依つて「人間一日も喜心なかるべからず」と結ばれた。以上の句は確か菜根譚の中にあつたと記憶して居るが、其意は自然界の景色を藉りて、吾人日常の修養を説いたものである。光風霽月と云ふが如く、お互に春の長閑な心を持つて居ねばならぬのである。

二 自己の安心を得よ

然るに人間の心は秋の空の如くに、日常兎角轉變を免るゝ能はず、朝に晴天なるも夕には嫉風となり怒雨となる、或は浅間しくも汚れ果て、或は悶え苦しむ事もある。されば苟も精神修養に志す者は、先づ第一に心の力を養成せねばならぬ。只外界より轉ぜられ、或は外物

に支配さるゝ結果、恰も走狗の土塊を追ふが如く、脚跟下未穩在ならんか、何ものに依つて修養すると雖も畢竟徒勞のみである。

故に自己の安心立命が先決問題である。由來佛教の安心に自他の二力あるも、他力本願によつて安心せんとする者は、一點の私心を押まず、絶對に自己の身心を擧げて他に任せて了ふのである。亦自力がよければ、天地間の萬物一切を餘さず自己に收めて了ふがよい。心が千々に亂れて居るやうでは百千の書を讀過して修養せんとしても、何の功果がないのみならず、精神の散亂は、日常の業務に従事しても、單に器械的に動くのみであつて、人生の意義に觸れない、甚だ無意味の生活と謂はねばならぬ。

三 人の心が直ちに佛の心

心眼頓に開け、自己の四周にある何物をも受け收めて、己の師範とし、教訓とする丈の修養が出来ねば、日々是好日の活境涯に到達することは不可能である。我見我慢は自ら、眼や

耳に蓋をする如きものであつて、一切を受入るゝことは出来ない、同時に精神の力は養成されぬのである。之に反して無我無心なれば、凡ての見聞覺知が直ちに自己の師となると共に之が修養によつて人と人との心、例へば父母、兄弟、夫婦、朋友、社會、國家の人心に至る迄、悉く通するのであるから、自己の心は直ちに佛の心に通じ、佛の心は直ちに自己に通ずるに至る、宗教の眞意義は即ち之である。

凡夫の心と佛心とを結びつくるには非ずして、自心と佛心と一枚になり。天地と自己と無差別の一團となるのである。佛典に「衆生心水清ければ菩提の影中に現す」とある、佛心を月とすれば、之を寫す法性水は吾人の心、水清うして月影を現すれば、月と水と自他一枚になる。

四 宿かさぬ人の情

若し世間の道德乃至法律を以て人心を支配せんとするにはそれはあまりに狭苦しい、或る一

定の範圍を限られた窮屈なものになつて了ふ、所謂束縛の生活である。然るに宗教は心の當體そのものである。活社會に通ずると共に佛心に通ずる。随つて蒼蠅い世界が直ちに樂しき人生となつて、別に苦樂の二面がない、道德法律等は人間同志の約束であるが、宗教に至つては古今に通じ、三世を貫いて居る。

故に最初に述べし萊根譚の一句たりとも、眞實に會得が出来れば、心は何時も清風明月を拂ふが如き感があるのである。たゞ人から制定されて、止むを得ず其繩墨の範圍を出でぬと云ふが如き窮屈なものではない。

されば一度この心を養はんか、如何に周圍の事物が我に迫り、敵となつて現はるゝも、誘惑となつて向つて來ても、之を受取るべき隙間がないのである。敵を迎へるに刃を以てすれば、結句血で血を洗ふの慘劇を生むのである。人間は單に權利義務のみを主張し居りては、五分五分の理窟のみで些の長閑な暖味がない、春風駘蕩の風光は藥にしたくも得難いのである。然るに一度宗教の眞實味に觸るゝに於ては、世間の出來事、如何なる場合に處しても善

意に世渡が出来る。近世の人、蓮月尼と記憶して居るが、其歌に

宿かさぬ人の辛さをなさけにて

臘月夜に花の下ぶし

例へば初めての旅に、人里遠き野道を辿り、行き暮したる彼方の森に幽に見ゆる火影を便り、一夜の宿を依頼せるも、つれなく断はられて了うた。衲も雲水時代に其經驗はある、誠に不満に堪へないものであるが、蓮月尼は却つてそれを喜び、光風霽月の快感、臘月夜の野宿は又一入の眺めである、これと云ふも畢竟宿かさぬ人の情であると、つれなかりし人を却つて有難く感ずると云ふ。これが修養の結果とは云へ、宗教の妙味は即ちこれである。

五 佛者に敵なし

「汝の敵を愛せよ」と基督は教へてあるが、已に敵と云ふ以上は憎いに相違ない、それを愛すと云うても無理がある、誰でも憎いものは憎い、然るに佛者の態度は、彼方より刃を向け

て來ても、それが他人でない自己である。佛陀は「三界は吾有なり、其中の衆生は悉く吾子なり」と仰しやつた。精神的で見ると、悪人でも盜賊でも悉く吾子である、善人のみが子であると言ふ譯ではない、富豪のみが知己であると云ふ意味では間違つて了ふ。世間の常相を見るに、兎角貧者愚者を卻ける傾向がある、而して極めて些々たる事、彼は蔭口をしたとか、憎いとか云ふ豆粒の如き考へを以て、世に處する者が多い。斯くては人生は誠に詰らぬものになつて了ふ。随つて上は君恩に報い、下は社會を改善して自己の本務を全うすることは不可能の事である。故に「天地一日も和氣なかるべからず、人間一日喜心無かるべからず」底の大修養が必要である。

吾這裡生死なし

一 人生の一大難關

古人は「變の大なること生死に過ぎたるはなし」と言はれてあるが、寔に生死は人生の一大難關であり、又一大問題である。されば此事を究明するのは參禪の極致と言つてもよい。

生死可憐雲變更、 迷途覺路夢中行、

唯餘一事醒猶記、 深草庵居夜雨聲、

是は之れ吾邦洞上高祖承陽大師の高偈である。只此の一偈以て古來百千の生死問題を解決するに足るであらうと思ふ。衲は常に深く此偈を愛誦した寤寐にも其の眞風を忘るゝこと能はぬのである。

蓋し萬象の生滅は宇宙の活動であつて、生死去來は天地の事實である。金鳥東海に出づれば頭々光を添へ、玉兎西山に没すれば物々色を失ふ。而も出づるもの初めにあらず、没するもの終りにあらず、晝夜幾回轉するも乾坤舊に依つて一物の増すなく、四時幾交代するも覆載依然として一塵の減するものがない。故に謂ふ、「天際日昇り月降り、檻前山深く水寒し」と、然るに世人之を呼んで時と云ひ、日と云ひ、月と云ひ、年と云ひ、世紀と云ひ、將た生

死と云ふ。咄、只落紅風の拂ひ盡すを見て庭樹綠蔭の生ずるを知らぬのである。

二 吾這裡生死なし

吾這裡元來生死なし。但之あるは偷心未だ死せず、靈臺未だ安からざるが爲である。若し人大死一番絶後に再蘇することを得ば、圓覺經に所謂「生死涅槃猶昨夢の如し」である。或人古徳に問ふ「如何なるか是れ涅槃の心」答へて曰く「生死の心を盡せ」又曰く「如何なるか是れ生死の心」曰く「涅槃を求むる是れ生死の心なり」又僧あり、妙心關山國師の室に到る、師問ふ「何が爲に來る」曰く「生死事大無常迅速なり、故に來つて決擇を求む」國師曰く「吾這裡生死なし」と云つて打つて趁ひ出す。

以上の如き因縁は傳燈錄中枚擧に違なき位である。眞に痛絶快絶の至りではないか。永嘉大師云はずや、

生死相關せざるを了知すれば行も亦禪、座も亦禪、語默動靜體安然たり。縱へ鋒刀に逢

ふも常に坦々、假へ毒藥も亦た閑々たり、我師燃燈佛に見ゆることを得て多劫曾つて忍辱仙となる、幾回か生じ、幾回か死す、生死悠々として定止なし。と、實に好訓戒である。

三 佛光國師の行履

されば吾が禪門に於ては一則の古則公案の中にも、此間の消息は悉く含まれて居るのである。假へば狗々佛性の話に就いて見ても、古來明眼の宗師は幾度か生死の門を透過してこの問題のために苦んだ。随つて其拈弄頌古、及び評唱等は浩々澗々として山の高く海の深きにも似て、一々枚擧するに暇なき位である。故に衲等も今更棒を掉して天上の月を敲き落す様な痴體を演ずるの餘地を持たぬ。只此の佛光國師即ち元无學祖翁の此話に關する一美事を擧げて初學者の參考に供することにせう。

抑も佛光國師は初め十四歳にして徑山の无準禪師に見え、十七歳にして狗子無佛性の話

に參得せられた。

「僧堂を出でざること五年、濛として入る所なし、吾れ出家の初志酬いず、道に於て未だ明かならず、茫々然として意を失するもの半歳、一夜四更首座寮前の板壁を聞いて、頓に已事を發明す」

と傳記に書いてある。是の如き痛快の入所は實に空前絶後であらう。其時の國師の投機の偈が、簣々として江湖に喧傳せられた。乃ち

一槌擊碎精靈窟。突出那吒鐵面皮。

雙耳如響、口如啞。等閑觸著火星飛。

四 予が爐竈に投じ來れ

古來の古則公案と云ひ、佛光國師の偈頌と云ひ、實に以て情識の昏闇を燭らすの惠炬である。見聞の翳膜を剔るの金篋である、生死の命根を斷するの利斧である。若しこれ利斧の切

れ味を知らんと欲する輩は乞ふ身命を惜しまず、赤誠を捧げて予が爐竈に投じ來れよ、納不敏なれども些の鉗鎚を惜まず、機に應じ變に處するの提撕を試みるであらう。

無寒暑の處

一 參禪は避難所

近來は禪學が流行するので、官吏や學生等が暑中休暇や、冬の休暇を利用して避暑避寒のつもりで鎌倉に來るものが尠くはない、中には熱心に參禪しようといふ求道者もあるが、間には時代思潮の流行に伴うて、浮いた心で素見し半分にあつて見よう位で來るものもある、或ひはツ紅塵萬丈の火宅にあつて年末の債鬼に責められ、年始の面倒なる交際が蒼蠅さに、一種の避難所として來るものも無いとは限らぬ。何れにしても五月蠅い世間を逃れて安樂な出世間的な禪堂生活をして見ようといふものが多いから、當然寒暑の避難所たると同時に娑

婆の苦界を避けようとする避難所たるの觀がある、之を要するに、有形無形の廣い意味に於ける經濟的打算より割出して、比較的有効と認めて其の上に或一種の好奇心が手傳つて來る連中も決して尠く無い。左様なのは此方では直ぐ解るけれども何れは避難所たるべき専門道場のことであるから、達磨大師が二祖慧可に斷臂をさせた様なことは致さぬ、又庭詰などの様な形式もとらんが、此れ等は今日の趨勢上やむを得ぬのである。

二 楞伽の家風

現代は其の形式あつて其の精神なく、小伶俐の者多くして大根機の者なく、凡てが容易簡單を欲する時代思潮は如何ともすることが出來ぬ、今日に於て庭詰だとか斷臂だとかの精神は夢にも見ることが出來ない、又それに峻嚴な形式を現代人に要求するのは無理である、故に何れの方面でも可い避難所と目して來た者には臨機應變な拔苦與樂を行ふのも佛陀の本懷であらうと思ふ。世間の批評は種々雑多であらう、而して老柄の考へでは縁なき衆生は度し

難のだが、折角避難所として求道の形式を踏み或る煩悶を堤げて來る者には應病與藥するのが佛祖の大慈悲心だと思ふ。夫れ故に今日は玉石混淆の雲水、居士をも收容して居るのである。そして病に應じて藥を説き機に應じて導く方針である、佛は大醫王なり、良藥は口に苦し、是を服すると服せざるとは醫の咎に非ず、吾は良醫の如く其病を知つて藥を與ふるのみである、之を信じ行はざるは導く者の咎には非ずと、佛も仰せられてある。

三 宗教の意義を知れ

老柄の家風は上來の如くである、それでも中には眞に避難して安樂な法を體得して歸る者もある、が大概は生嚼りが多い、けれども其割合に不治の禪病に陥る者は尠い、けれども參禪をしようとする者が、宗教の何物たるかを知らない者が多いには閉口する。宗教とは如何なるものか、佛教とは如何なるものか、禪とは如何なるものか、此れを極むるには一生を費して參究せねば解るまいが、少くとも其の概念だけ位は心得て置いて貰ひ度い、それで無い

と先づ初めに相見して、次に隻手音聲の公案を授けるのであるが、何の事かサツパリ解らんで、謎でも解くやうに思つて矢鱈に「悟り」を急いで、一週間や十日の間に頓然大悟が出来るかの様に思つて焦心する者がある、此れは大變な誤りであつて、悟りは一生のものである、古人は「大悟十八遍小悟其數を知らず」と云ふ程である。其の苦心せられた事はこれでも解る。夫れ故にアレでも不可、コレでも不可、却々公案が通らぬので、遂には怠懈を起したり禪はつまらぬものであるなどと云ふ愚痴を吐く様な者もあるが、禪は決して其廢もので無い禪は個人の爲めのもので無い、國家の爲め社會の爲め、吾人が苦心し參禪するのである、禪と世間、吾人の日常生活と禪との關係は密接なるもので、決して没交渉のものでも無い、長物でも無い、禪が徒らなるものとなれば宗教も人生には不必要のものとなるのである、決して誤解してはならぬ。

四 禪とは何ぞや

須らく參禪せんとする士女は、禪の何物たるか位は心得て居らねばならぬ。單に避難所に入つて安樂ならんと云ふ政策的行爲であつてはならぬ。勿論禪定は人生苦痛の避難所である。寒時は圍梨を寒殺し、熱時には圍梨を熱殺す底、これ禪の妙味である、そこで禪の妙味は眞個冷暖自知であつて、之を口に筆にするのは第二第三である。徳山の棒も言詮窮つての親切である。

妙の字は少き女の亂れ髪

いふにいはれず解くとかれず

であるが、少し哲學でもやつた者は、直に之を論じようとする、そして四料簡や五位はこれを主觀客觀と對照して怎うの斯うのと説いたり、有に非ず無に非ずと云ふ絶對不二は何んなものであるか、悟りとは何んなものであるか、禪と戒とどう見るか、種々な質問もあるが、要するに、それ等は禪の理論的發達であつて、夫れが禪の妙處では無い。妙味と云ふものは説明の出来るもので無い、悟りとは自覺のことである。だから大悟は未悟に等しく、悟

つたからとて奇言奇行のあるべきで無い、自覺すれば何んな活動でも出来る。報恩の念も、努力も、善意も、一度自己と云ふものを自覺し悟つたならば、無碍自在である。禪の目的は只この一路に外ならぬのである。

五 弾力性を養へ

人間と云ふものは弾力が必要である、世上の煩悶に於て自暴自棄となつたり、挫け込んで仕舞つては何にもならない。人生の艱難は汝を玉にするのである、寒時は鬮梨を寒殺し、熱時は鬮梨を熱殺する底の意氣と修養が無くてはならぬ、寒いからとて炬燵と情死する様では何事も成すことは出来ないのである。宮本武藏と云ふ人は、

憂き事のなほ此上に積れかし

限りある身の力ためさん

と詠うて、人が神佛に向つて幸福や安樂を祈るに反して、憂き事のなほ此上に積れかしと祈

つた、その弾力性に富んだる精神こそ、眞個古武士の面影が現はれるのである。五厘や一銭のお賽錢で家内安全、子孫長久など、祈つた處で、平生の業務を辣んじたり、安逸を歡迎する様な精神では、棚から牡丹餅は落ちて來ぬのである。如何なる煩悶、如何なる苦痛艱難に接しても、意志が堅固であり弾力性があつたならば、泣いたり自棄を起したりする様なことは無い筈である。

茲に於てか、意志の鍛練が必要である、弾力性を養はねばならぬ精神修養の必要は實に茲にあるのである。身心の修養上、最勝の方法は參禪である、近頃世間には靜坐法などがあり其他にも種々方法はある、佛は禪定を以て尤も優なるものと仰せられた。禪は安樂の法門である、無寒暑の處である、心頭を滅却すれば火も亦清涼である。

六 須らく修養せよ

昔時、或僧が心とは何う云ふものと問うた。吾々は心があるから取捨憎惡の念と申して

憎い可愛い欲しい惜しいの妄想が起るのである、四苦八苦も心から起るのである、煩悶も苦痛も心からである、五慾とか煩惱とかも心からである、然らば心は如何なるものかと云ふに求むるに不可得であつて性に善悪は無いのである。只だ妄執に覆はるゝが故である、然らば妄執は如何にして病除すべきか、これ修養の必要なる所以である。

喫茶喫飯是皆禪であつて、必ずしも坐るばかりが禪でない、行住坐臥の間に禪がある。隻手の聲を聞くばかりが禪で無い、兩手を打つて商賣をする處にも禪がある。此邊の消息は須らく修養せねば解らない、修養の方法は上述した如くである、只だこれが實踐修行せられんことを望む次第である。

煩惱即菩提

一 心を制すべし

大聖釋迦牟尼世尊が、堅説横説、四十九年間三百六十餘會の應病與藥を爲され、度す可き處の者は已に度し訖つて、娑羅雙樹の間に於て、將に涅槃に入り給はんとする時、末後末世の我々の爲めに説かれたのが佛遺教經である。今其の一節を拜讀致しますと、

此の五根は心を其の主と爲す、是故に汝等當に好く心を制すべし、心の畏るべきこと毒蛇、惡獸、怨賊よりも甚だし、大火の越逸なるも、未だ喻とするに足らず。

と、仰せられてある。此五根とは世間に云ふ五官のことで、眼耳鼻舌身の五つを謂ふ、根とは木の根と讀む、此五根の爲めに吾々は常に迷つて、財色食名睡といふやうな五欲に愛着しては、煩惱生死の迷界に彷徨うて居るのである、我が佛教の見地から云へば、欲と云うても決して一切の欲を制せよとは申さぬ。正義正道の欲、即ち分に應じたる潔白なる欲は是非とも採らねばならぬ、斯かる欲があればこそ、吾々は物質上にも精神上にも安心が出来るのである。然るに吾人は從晝至夜、私欲から割り出されたる自分の個性によりて貪欲を生じ五欲に轉倒せられ惡業を造り自分と自分に苦しみを受けて居るが、心も腐敗すれば身も枯れ朽ち

果て實に浅ましいものである。昔から意馬心猿と云うてあるが其の狂へる猿、荒れたる馬の如き心も吾が心、其の亂心を制御するも亦吾が心である、して見れば此の心が迷の本ともなり、又悟りの本ともなるのである。故に心を其の主となすと仰せられてある、又此の亂心狂意を制伏するには、一切の對境を忘絶して自己如何にと工夫して見なければならぬ、此の自性を徹見する修業は坐禪より外に捷徑はないのである、故に坐禪は却々むづかしきものであるが、又思うて止まざる精神さへあれば實に容易なのである。

往古の禪僧に瑞巖と云ふ偉い坊さんがあつた。常に方丈に坐り乍ら一人問答をして居られた。それはどうかと云ふに「主人公―主人公」と自ら喚び、暫らくして「諾」ハイと答へる。又「惺々着―惺々着」と喚ぶ、即ち眠つて居りやせんかといふのである。又「諾」ハイ起きて居ます。又曰く「他の瞞を受くる勿れ」ボンヤリして居て笑はれまいぞと、一人問答によつて自警せられたのである、吾々が参究する上にも、是れを取つて味つて見ると、寔に親切なお示しが解る。

實に此の心はコロコロと飛び出したがるが、一度主人公を吾が物にすれば、機に觸れ物に應じて隨處に主となる事が出来るのである、故に「汝等當に心を制すべし」と仰せられたのである。若し此主人公を失却すれば、如何なる災難を醸す事があるやも知れぬのである。眼にあつては見と云ひ、耳にあつては聞と云ひ、鼻にあつては香と云ひ、舌にあつては味と云ひ、身にあつては觸と云ふ。此の五根が五境に貪戀愛着して終に我物に非ざる區域以外に手が出るものである。されば佛は毒獸怨賊よりも甚だしと仰せられてあるが、世間の言葉に「地震、雷、火事、親爺」と云うてあるが夫よりも尙ほ恐ろしい。古歌に

心こそ心迷はす心なれ

心の駒に手綱ゆるすな

とある、然らば此心を如何に收得するか、八萬四千の病と云ひ、煩惱と云ふ。之れを根本的に療治するには、宗教的力用に據るより外に道がない。誰人か毒蛇惡獸怨賊大火を恐怖せぬものがありませう、誰か家庭不和の運命に泣き、何人か個性の充實を叫び、將又救世主とな

りて、人道鼓吹に信念を雪がさるものがありませう、諸人痛切に感じて、絶對無限宇宙の大道に通達して、永遠的力ある事業、力ある根底を造り、古來の因襲を打破して、汚泥にあつて汚泥に染まざる主人公を見得し、日々是好日と天與の職分を全うすべきではないか。

二 心は主なり慾は従なり

吾々人間は慾の容れ物であると云はれて居るが、慾とは元來如何なるものであらうか、慾と云へば何うも悪い事ばかりのやうに聞えるが、強ちそれに限つた譯でもあるまい。佛も「我慾あるが故に道を成ずることを得たり」と仰せられてある、して見れば慾には善惡の二つがある、ところで其等の慾は吾々の胸中に同居して居る別々の存在であらうか、否さうではない、元々同一のものが別々の方向に表はれる迄である。

例せば茲に一本の名刀ありとせんか、善人之れを用ふれば活人劍となり惡人之れを用ふれば殺人刀となる、然かし其刀たるに於ては少しも異りなきが如く、吾々本心は善でも惡でも

ない、故に之れを善用する事が肝心である。さて慾が表はれて來る種類は種々様々であるが、其根本となるものは財色食名睡の五慾である、其中でも食慾と色慾とが常に最も猛烈で、種なる新聞の種も多くは此の二つから出るやうである。古來衣食足つて禮節を知ると謂ふが窮すれば亂すで幾ら働いても病氣災難が次から次へと起つて來る、妻子眷屬は饑寒に泣く、悪い事とは知りながら終ひ善からぬ事を働くやうになるのは小人の常、この心を制するのが佛敎の誠めである。

次に異性に對する慾、元來異性は相愛するもので、之れに依つて萬物は生成する、實に造化の妙と云はねばならぬ。然し道に契はぬ愛は却つて人を害する、諺にも「罪惡の陰には女あり」と云はれて居るが、女から云へば「罪惡の陰には男あり」である。兎に角吾々が大きい制すべき事は色慾である、又これを制する事が容易でない、然らば何うしたならば是れを制する事が出來ようか。

人あり姪の止まざる事を患ひて、自ら陰を除かんと欲す、佛之れに謂つて曰く、若し其

陰を断たんより心を断つに如かず、心は主、主若し止めば従者すべて息む、邪心止まざれば陰を断つも何の益ぞ。

と四十二章經に出て居る。或人が姪慾猛烈、常に抑へんとして抑ふる事が出来ぬ、そこで考ふるに、男子たる表微の陰根、是れさへ無かつたならば、然り寧ろ此一物を打ち切つて了うたら、決して再び妄想が起る道理は無からうと、第三者から見れば何でもないやうであるが、當人が是迄の決心を爲すに至れる苦心は察するに餘りある事である。佛これを見て、それは間違つて居る、元來身と心とは、之れを譬へて見れば、心は役人見たやうなもので身は其家來である、若し主従二人道を歩いて居るとすれば、主人が止まれば其従者は必ず止まるに定つて居る。故に其主たる慾心さへ断てば従者たる陰根は自ら之に従ふのである。若し其慾心を断たずして、たゞ陰根だけ断つても、主人たる慾心は容易に之れを承知するものではない。必ずや他の方法を以て更に他の間違つた事をやらぬとも限らぬ。故に其陰根を断たんよりも寧ろ抑へんとして抑へ切れぬ其心を断つて了へと諷められた。今日は生理生殖とい

ふ問題がやかましい時代である、慾心を全く断つて了ふ事は什んなものであらうか、それは又別途の問題で茲に用はない。兎に角幼兒のやうに其害を知らずして無暗矢鱈に甘いものを食べる人が無いとも限らぬ。是れは大いに注意を要する事である。

三 菩提の靈光

之を要するに心は主で身は従である、故に佛教では先づ最初に心を修めてかゝれと教ふる。心を修むるには種々方法もあるが、神や佛を順ほに信する、それも結構である。然かし知識が進歩すれば何事も知識に訴へて批判しようとするもので、神や佛を順に信する事が出来ぬ者も出て来る。そこで聖道門では之を疑ひ之を考へさせることとして居る、畢竟智慧の光を以て妄想煩惱の迷ひの暗を照破するのである。乍併、迷ひの暗を取除いて別に智慧の光を持つて来るのではない、直指人心見性成佛で、此の迷へる心が直ちに悟の大佛心である、吾の心の中に迷と悟と二つのものが勝つか負くるか、角力を取つて土表の外に投げ出すやう

なものではない、迷の心を轉ずれば、それが直ちに悟である。之れを煩惱即菩提と云ふ。

盜人を捉へて見れば吾子なり

である。我を害せんとする、我物を掠めんとする、其煩惱妄想の本體本性は如何なるものであるかと思れば、是れ却つて我を助け我を救ひ、我に忠實なる菩提の靈光であつたのである。要するに邪な心、正しからざる心を、其儘正しく眞直になほす迄である、言ふ事は何でもないが、之を實行するには多年の修養を要するのである。

さて以上の話で、迷と悟、煩惱と菩提、それらの二つのものが初めからあるのではないと云ふ事は略分つたであらうが、今一例を擧げて見れば、昔六祖大師が大庾嶺で

不思議不思議の時那箇か是れ明上座父母未生以前本來の面目。

と示された一句に依つて、明上座は豁然として大悟したと云ふ事である。白隠禪師は生れぬ先の面魂を此處に持つて來いと云はれた、生れぬ先の面魂、何處に善があるか、何處に惡があるか、換言すれば吾々は常に相對差別の境に頭出頭没して、迷とか悟とか是とか非とかと

頭を二つに分けて居るから、惜しい欲しい憎い可愛い煩惱妄想が競ひ起るのである。一度絕對無差別の境に歸入せんか、自他平等一如となつて我他彼此の邪見は立どころに無くなつて仕舞ふ。之れは禪宗で云ふ所であるが、之れを他宗で云へば、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と一心に稱へる時、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と通身これは成り切つた時、其處に何の煩惱があるか妄想があるか。要するに聖道門と云ひ淨土門と云ふも玄關の違ひだけで、奥に遁入つて見れば皆同じ座敷に通るのである。唯だ淨土門は情を以て導くから平易に聞え、聖道門は智を以て導くからむづかしく聞ゆるまである。淨土門で云へば、

唱ふれば我も佛もなかりけり

南無阿彌陀佛の聲ばかりして

と云ふ迄立到らねばならぬ、禪宗で云へば通信徹心自他一如になり切らねばならぬ、幾ら理窟で煩惱は無いぞくと抑へ付けて居ても、下からくと頭を上げて來る、石で抑へてをる間はよいが、少し隙を見出すと忽ち雜草は生繁るものである、故に大徹大悟以て根こぎ引

拔かねばならぬ。

田の草を取りて踏込む肥しかな
今迄害を爲せし田の草も根こぎ引抜いて踏込めば却つて之れが肥料となる、此處に至るのが眞の修養である。禪の妙處である。

一般世間の人は五欲七情の外に心なく、而かも此五欲七情は別々の存在であると考へて居るが、元來これは心の影で忽ち現じ忽ち消ゆる、今彼奴は憎い奴だ憎い奴だとブリ／＼して居る處へ、可愛いものでも突然やつて来れば忽ちニコ／＼して、先の怒は何處へか無くなつて了ふ、五欲七情は小兒の喧嘩の如く、誠にたはいないものである、故に吾々は心の本體を徹見して迷の煩惱を轉じて、直ちに悟の菩提となすの心掛を暫らくも忘れてはならぬ。

日々是好日

一 只一面の明鏡

國家として觀ても、或は各方面の社會として觀ても、多數の人が、各自其職務を持して、夙夜活動して居る事は明である。然しながら其の現に活動しつゝある人々の精神裡を透見し得たならば、果して如何なる状況であらうか、明鏡は晃々として能く萬物を照し、而かも萬物の影を留めない。漢來るに隨つて漢を映じ、胡來るに隨つて胡を現じ、而かも其處に漢相も留めなければ、亦胡相も無い。斯の如き明鏡は、二面三面乃至幾百面相對するも、宛がら唯一鏡の存するが如く、鏡々相對して中に影像無しである。是等に於ても、高尚なる極大乘の、一即一切一切即一の眞理を把握する事が出来る。而して今人々相對する所、正に兩鏡相對するが如くならば、萬人對峙するも亦一面の鏡の如くである。固より國家とか、世界とか謂つても、人生の根本的立脚地より靜かに觀察すれば、天地一體、萬物同根、唯一面の鏡あるばかり。此一面の明鏡、妍醜其儘に映じ、柳綠花紅も亦其の儘に影を寫して、而かも些

の痕跡も留めない。若し其處に不平、不満、猜疑、嫉妬、傲慢、美望等のあらゆる疊りを生ずる時は、何物をも正しく映する事が出来ない。故に先づ鏡面の雲霧を掃却せん事を要す。假令世上に公益を施したる偉勳あるにもせよ、それを少しでも心頭に憶ひ留むる事あれば、早や鏡面に痕跡が瞭々として現れて来る。無用の用、如何に偉勳を立つるとも、其處に何等の痕跡をも留めざる所、之れ即ち無作の妙用である。

二 顔面問答

支那近代の碩學たる俞曲園先生の書中に載せてある小話がある。或時、口が鼻に向つて言ふ。

「御身は何程の事を爲て、斯くばかり傲然と高く構へて居らるゝか。我こそは此生命を繼ぐべき食事を日に攝取するのみならず、其上更に言語を發して諸用を辨ずるは、誠に御身に過ぎたる働きでは御座らぬか。而かも我は御身の下に居るに、御身は左程の働きも

なくして、高ぶりたる風をなさるは、抑々傲慢では御座らぬか」

鼻は口の不平を聞き流し、
「いや御尤の御言葉。去りながら我若し一度息を止めたならば、御身は如何なさるで御座らう。御身の働き得るも、畢竟我が絶えず空気を呼吸して止まざるが爲めで御座らうぞ」と言ひ、更に眼に對つて言ふ、

「只今御閉きでも御坐らうが、我こそ此の身の生命を保つ本となるばかりの大用を務めつつあるに、御身こそ爲す事も無くして、高見の見物をなさるは如何なる事で御座る」時に眼答へて言ふ、

「成程、御身等は何れも立派なる務を有つて御座る。去りながら、我とても好んで此處に見張をする譯では御座らぬ。これも我が役目にて、我れ若し此の見張を怠つたならば、御身等は明闇を辨ぜざるのみならず、御身に近づく危害をも知る事が出来ませぬ。御身等の能く難を避け得るは、全く我がこゝに見張をして居ればで御座らう」

是に於て口と鼻と眼とは、互に其職分を語り合ひ、兎も角も相互に大切なる役目を有つて居る事を理解した。乃で今度は、口と鼻と眼とが合議して、眉毛に向つて詰問を初めた。

「我等相互に大切なる役目を有つて居て、朝夕働いて居るにも拘らず、御身獨り最高位に御座るは近頃心得られぬ。何ぞ御身は役目を持つて御座るか」

時に眉毛は自己の役目に就いては、一言も語らないで、彼等の詰問に對して始んど反射的に、「諸君のお言葉の通り、自分ばかり大した仕事もしないで、高い處に居ては相濟まない。

早速何處ぞへ變るであらう」

と言ひ無抵抗と言ふよりも、寧ろ早や他の指揮を俟たうと云ふ眞實謙遜の様子が見える。眉毛は何等の役目なきに非ず、彼れは彼れ相當の役目を有つて居る。然しながら彼れは其の自己の功に誇らず、否な自己の功を知らざるが如き所に、我等の今日學ぶべき所が大いにあるであらう。

三 自己の本務

前の小話が教ふるが如く、此世の中は、凡て或る秩序によりて組織されて居る。一見する時は、甚だしく働くが如き者と、何等の働きをも爲さざるが如き者もある。然し之は種々異なつた役目の人々が相寄つて居るので、仔細に觀察すれば、一切の人は、皆な相當の役目を有つて居て、其の一つでも缺いてはならぬものである。然し一見無用の如く見ゆる者も、實は大用を有つて居るものである。座敷床柱も大切ではあるが、床下にあつて、建物全部を擧げて居る礎石の方が、より以上大切なのである。又谷間に於ける山百合は、誰一人之れを觀賞する者無くとも、萬緑叢中に咲き出で、其の役目を守つて、天真なる姿を現はして居る。此等を思へば、山川原野到る處に法身佛の説法あつて、光明遍照十方世界である。人の社會に在つて活動するは、敢て報酬を得んが爲めでは無く、自己の修養として、又自己の役目として遠大なる目的に對する原因、若しくは経路として之れを行ふのであつて、又之れが其

儘善根功德となる事を思はねばならぬ。故に吾等は平素其の職とする所を眞摯に務むるは、又吾等の福德を積累させて貰ふ事で、寧ろ感謝すべき事である。陰徳あれば、必ず陽報あり陰行あれば必ず昭名あり、古人我を欺かず、要は自己の職務を執つて無用底に働き、自己の守るべき道を嚴守して、益々其の福德を聚むべきである。

四 佛作佛行

善根功德を積聚すると云ふ事は、六度の修行の如く、菩薩行として客觀的に取扱つたのも昨日の事、今や無用の用を以て自己の職務を勉勵する所に於て、直ちに之が菩薩行となるのである。佛陀は三界の覺者、一言一行大慈大悲の發露と遠く崇拜して居たが奚んぞ知らん、吾れ自ら佛陀と同座して、佛行を行ずるとは。吾等は精神裡を明鏡の如くにして社會に對し又國家に對する時、其の行ひは自ら菩薩行に一致し佛行と契合する。是れ佛教信仰者にして、初めて自覺する所にして、無信仰者は、此念に往する事が出来ない。既に日々佛行を行すれ

ば、隨處皆此れ道場にして、此處に何等の苦惱もなく、念々光明裡に在つて、歩々即ち淨遊戯である。寒時寒の儘が是、熱時又暑熱の儘可。寒暑の中に在つて寒暑の苦惱なく、日々是れ好日たるを得るは、又佛陀と同座したる上の大功德に依るに外ならぬのである。

解脫の精神

一 禪宗の本旨

衲は毎月行脚に身を委ねて居る、而して行つた先で法話、或は提唱をする、爲に某博士は禪宗の本旨は仙人の如く、枯木死灰の状態に入らしむると云うてあるが、宗演禪師は饒舌三昧である、禪宗坊主に似ないと云うたが、是れ誠に大なる誤解だ。禪宗は完全なる人をつくるにある、完全なる人とは妄念の起るなく、飯に遇うては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫する日常無碍自在の妙用を得て、活潑々地の活動の出来る人を云ふのである、茲が即ち信仰の

表現である、信仰が表現すれば、其人は必ず真理を悟り得る、妄念があつては真理を悟り得ない、よく禪宗の根本旨趣を體得して貰ひたい。

二 修中の疑難

大慧普覺禪師の御書きになつた大慧書中に富樫密官蛋蔵に季申が與へた手紙が載せられてある、初めに「示論蛋蔵ニ知信ニ向此道、晩年爲ニ知解ニ所障、未レ有ニ一悟入處、欲レ知ニ日夕體道方便、既荷ニ至誠、不ニ敢自外」と、これは「蛋蔵あなたは幼よりして、佛道を信仰すれども晩年に至る迄知碍の爲に障へられ、何の悟入する處もない、如何にせば禪意を體得し得るか、其方便を承りたいと申さるゝ其の至誠の言、山僧是を聞いて默過するを得ない、感心な事である」と云ふ意味である。さて天下の諸人、參禪辨道中此の疑ひが起りし事ありはせんか。

三 大悟の消息

人の常として悟と云へば、何か一物を手にするのだと思ふ、是れ大なる間違だ。悟了れば未悟に同じ、何物も得ない、たゞ天然自性身が露現された迄の事、揆言せば煩惱の病が取れたのである、茲に至りて森羅万象悉く眞如法性の姿に見せしめる、是れ大悟の消息である。然るに蛋蔵流石の學者なれども、惜むらくは悟病に落ち、自己以外に何物かを得んとして居る、季申是を憐むの餘り、前文に續いて御示しになる、「據レ欸結ノ案葛藤少許、只遮求悟入底、便是障道知解了也、更別有ニ甚麼知解、爲レ公作障、畢竟喚ニ甚麼一作ニ知解、知解從レ何而至、被障者復是阿誰、」さア自己何物知解何物ぞと徹見せよ、さらば大悟の消息も容易に伺はれよう」といふ意味である。

四 行者の顛倒

悟道の方便を知らんとするに三種の顛倒がある、大慧書に「自言爲ニ知解ノ所レ障是一」、人個々本來本法性天然自性身であるのに、わざ／＼知解の爲に障へられ居る、繩なき繩に縛られて居るのである。「自言未レ悟甘作ニ迷人一是一」、吾人本來悟の人である、然るに未悟と思ひ、自ら迷人を以て甘んずるは、是實に下劣の漢である、人格を傷けるものである。「更在ニ迷中一將レ心待レ悟是一」、迷悟を相待に見て、迷中にありながら悟を得んとするは、知解を以てする事で、木に據りて魚を求むるが如く不可能の事である、參禪の諸氏この心病に罹らぬ様用心されたし。

五 解脱と修行

三種の顛倒に續いて、「只這三顛倒、便是生死根本、直須ニ一念不生顛倒心絶、方知無ニ迷可破、無ニ悟可待、無ニ知解可障、如ニ人飲レ水冷暖自知、久久自然、不レ作ニ道般見解一也」とある、此三顛倒は生死煩惱の根本、悟道の敵である。抑も顛倒心の起るは迷悟は悟道の方便の

假名なるを知らずして是に固執するからである。須らく迷悟を脱却して父母未生以前に立歸り、一念不生の本體を體得しなければならぬ、されば迷として破すべきなく、悟として待つべきものがない、知解も亦妨げにならぬ。此境界に至るには多くの勞力を要する、勞力とは坐禪である。即ち七尺單前に坐り精神を鍛練し自己如何と徹見するのである、行も坐禪坐も亦坐禪、語黙動靜皆坐禪なれども、こは修行の結果である。然るに坐禪工夫せずして悟れりとするは、是外道禪である、正道禪は修行の結果である。正道體得の處心金鐵の如く、言語を尋ね經卷に遇ふも、毫も動ぜぬ、不動心の妙こゝに露現するに至るのである。

六 大智慧の人たれ

次に「但就三能知ニ知解底心、上看ニ還障碍一也、無能知ニ知解底心上、還有ニ如許多般一也無」とある、智慧は世の中で大なる働きをなす、然れども智慧は眞如に遠きこと數萬里、須らく一念不生の本體に溯り見よ、智慧あるも無きが如く、少しも邪魔にならぬ、又何等の束縛も

ない、是を大智慧といふのである。禪門の祖師悉く大智慧の人である、大智慧の人となつて佛祖の面目を呈するのである、參禪の諸氏、奮つて此の境界に到達せられたい。

七 大智慧の活用

次には何とあるか、「從上大智慧之士、莫不皆以知解爲僂侶、以知解爲方便、於知解上行平等慈、於知解上作諸佛事」と、多くの人は知解に使はれて居るが、從上の大智慧の人は高尚なる見識を有するのである、即ち知解を雇人として使ふ、知解を以て事を處する方便として居る、而して知解以上に出でて平等慈を行ふ、即ち總ての境に對して褊頗がない、又諸の佛事を作す、吾人日常の生活に取捨憎愛の見を起さぬ、是れ誠に高尚なる境界、大智慧の人でなければ、行ふ事が出来ないのである。

八 大智慧の光明と眼識

大智慧の光明たるや、次に形容して「如龍得水、似虎靠山」と仰せられた、實に何物に出會ふとも動ぜぬ、却つて是を支配する力を有す、誠に震天動地の勢ひを爲し、光明赫然として、發揮するのである。此境界は何人も望む處なるが、知解に使はれて居るうちは駄目である。故に致々として頭燃を救ふが如く參究し、知解以上に出でなければならぬ。また大智慧の人となれば、必ず大智の眼識を有するのである、即ち自己の精神を洞觀するの明がある。此の大智慧の人の眼識を「終不以爲惱、只爲了悟識得知解起處」と仰せられた、大智慧の人は知解を自己の手中に入れ、毫も惱みとせざる故、知解の起處を識得す、即ち知解を求むるに不可得を徹見して居る、是れ精神上の千里眼である。無明の雲に覆はるゝ凡夫にては、とても此の千里眼を具ふる事は出来ぬ、此の千里眼、實に大智慧の人の特有である。

九 知解即解脱

前文に續いて「既識得起處、此見解、便是解脱之場、便是出生死處」と仰せられた、既に

知解の起處を識得せば、知解其儘が解脱の場、生死出離の處、一念不生の當體である、何となれば知解を離れて解脱はない、知解が解脱の妙相とあらはるゝからである、故に知解即解脱と知るがよい。然るに學者の弊として、知解即解脱と聞けば、何等の修行も爲さずして、解脱して居ると思ふ、是外道の見解である。かゝる見解の起る理由は、知解其物の解釋を間違へて居るからである。解脱せる知解とは凡夫の知解に非ずして、知不知を絶して是を超越し支配する處のものである、解脱するには是まで參究しなければならぬ。

一〇 寂滅の美

斯く蚤歲に懇切に示されて来て、次に「既解脱之場、出生死處則知底解底當體寂滅、知底解底既寂滅、能知知解者不可不寂滅、菩提涅槃真如佛性不可不寂滅、更有何物可障、更向何處求悟入」と佛法の極致を御説きになられた。師家の學人に對する親切斯くの如くである。既に解脱の場生死出離の處は、恰も皎々たる十五夜の月の如く圓かで無缺無

餘、知底解底共に寂滅真如佛性菩提涅槃も悉く寂滅するのである。されば是を障へるものなく、又悟入する處もない。實に萬象之中獨露身とあらはれ、俯仰天地に恥ぢざる境界となる茲に於てか人の眞價が顯現するのである。

一一 解脱の趣味

凡そ人と生れて来ては、此世に何か大なる仕事をせんければならぬ。爲に學生は大臣を欲し、商業家は第二の「カーネギー」たらんとし、學者は博士を希望して居るのである。されど煩惱の犬に追はれ、心常に不安なれば、如何に學才たけくとも、其希望を達する事は出来ない。成功の要素として學才の外に解脱の精神がなくてはならぬ。此解脱の精神が人間の眞價を露現するのである。而して是が大臣と顯はれ、第二の「カーネギー」及び博士と顯はるのである。而して全世界の人が解脱の精神を有する様になれば、娑婆が即寂光淨土である。換言すれば世が平和となるのである。此の清淨なる世界を造らんが爲に多くの祖師方が

懇々と御説きになられたのである、此の大慧書も亦之を説いて居るのである、要するに佛教は消極的教訓に非ずして積極的教訓である、どうか眞面目に修養して貰ひたいのである。

一二 千古の名言

今日世間を見るに、何でもかまはず、一足飛びにしよう、グヅ／＼して居るのは文明の民でないと言つたやうに、事を急速にせんとのみ考へて、綿密眞面目と云ふ事を度外視して居りはせんかと思はれる。殊に禪にでも志のある人と聞いて之に接して見ると、禪の眞意は御存じなしで、禪のホンの表面ばかりを一寸見て得々たるものが多い。禪がそんなに容易いものならば、何を好んで達磨大師は九年の長い間壁打坐をなされたか、二祖は何故臂を斷たれたか、其他歴代の祖師の辛酸苦修は畢竟何の爲めであつたらうか。思うて茲に至れば、覺えず冷汗の背に徹するものがあるのである。至誠はよく天地を動かし人を動かすと云ふことを忘れてはならぬ、何にも急ぐ事はない、アセルには當らぬ。急げば事が粗漏になり易く

アセルと却つて事を仕損ずる道理、急がば廻れとは蓋し千古の名言である。

一三 大解脱底の那人

高きに登らんと欲せば必らず低きよりすべし、遠きに達せんには必らず近きよりせねばならぬ。斯く物事には凡て秩序を立て、順次に修行して行きさへすれば、必らず思ふ目的地へ達するを得るは、少しも疑ふべき餘地がない。然るに悲しいかな人は目前の利慾にのみ奔り、一攫千金を夢み、一擧に萬利を得んことを希うて、得られざるを歎き、達せざるを悲しみ、煩悶憂慮、遂に自己の一身が自己の自由にならず、揚句の果ては死ぬとか生きるとか、實に厄介千萬の事ではないか。希くは今日修養に志さるゝ諸君、宜しく大事をなさんと欲せば、到るの遠きを歎くこと勿れ、今日暮るれば明日あり、事の成し難きを煩悶すること勿れ、古語にも大器は晩成なりと云ふ、一物一事、念にも念を入れて、至誠を以て修行せば、一步は一步より漸次成功の域に進む、之を稱して大解脱底の那人と云ふべきである。

婦人の修養

一 近來の婦人問題

近來婦人問題が大分やかましくなつて來たやうである。婦人の教育はどうとか、女性とは何かといふ様な事が、堂々と論ぜらるゝやうになつた。これに對して、東洋固有の婦人の教といふ事は極つては居るが、同時に亦西洋諸國から入つて來た婦人の教もある。これが一般の婦人界に影響を及ぼして、思想上の問題となるのである。元來あつたものと、新に入つて來たものが調和することもあり、又甚だしい衝突を來すこともある、要するに現今我國の婦人問題は此の過渡期であると云ふことを免れぬのである。

随つて婦人の修養が一定して居らぬ、其結果婦人道德にまでも及ぼして、一種の變形と云うても、形の上の事ではないが、妙な不具じみた考へを抱くものも鮮くはない様である。覺

醒せる婦人とか、新しい女とか云ふ事をやかましく云ふ様であるが、これは輕々しく論斷すべからざる事と思ふ。私の希望する所は、一般の婦人は矢張り日本の婦人、敢て殊更に良妻賢母と云はずとも、日本婦人として教を守り身に行つたならば、先づ危険の場合が少いであらうと思ふのである。

二 婦人と男子との關係

これに就いては婦人の教、即ち其の心得方を述ぶる前に、一言男子との關係を申さねばならぬ。此社會は大きく折半して見れば、一部分は男子から成立ち、一部分は婦人から出來上つて居ると云ふことは勿論である。然るを殊更に男女同權とか、權利平等とか云ふ事を主張するものがあるとの事である。これは誤つた考へと謂はねばならぬ。何となれば男は剛に女は柔に、上に天あり下に地あり、陰と陽と相待つて初めて宇宙間の萬物が生育する如く、殊更に同權同等と謂はなくとも柔いは柔いなり、剛いは剛いなりに、相調和する所に於て、天然

自然の妙が現はれて來るのである。多くの人がこの男女の關係に於て、動もすれば人格と云ふことゝ人倫と云ふことゝを取違へて居るやうである。人格と云へばむづかしい様であるが人間一人として見れば男も女も同等であつて、寸分の譲るべき所はない。男女あつて初めて家庭が出來、社會が出來るので……。此關係から人倫といふ一の道の上に於て、同じ婦人であつても或は娘として、人の妻として、人の母として、又は寡婦として、各々其守るべき道が確然として出來て居る。即ち人倫の道よりすれば男女の差別あるのみならず、同じ婦人の身の上に於ても同等に論ずる事は出來ぬ。況して男が外に出るから女も出る、男のする事は何でも眞似ると云ふが如きは一種の變體と稱すべきものであつて、決して完全なるものとは申されぬのである。

三 佛教より見たる婦人

我が佛教に於ては、此の家庭とか夫婦とかの間柄に就て、如何様に教へられてあるかと云

へば、彼の玉耶女經の中に、釋尊が玉耶女に向つて御説きになつた言葉がある、今其の大意を摘記すれば、佛陀在世の頃、舍衛國に給孤獨と云ふ長者があつた。我子の爲めに豪貴長者の家の娘玉耶女を嫁に迎へ受けたが、什麼も傲慢で他人を侮り、良人を良人とも思はず、舅姑を舅姑とも思はぬので、給孤獨はこれが教化を佛陀に御頼みした。この玉耶は其名の如き天成の美人であつた所から、兎角驕慢に流れ、敬虔の念を缺くに至つたのである。自分が美人であると云ふ自負心が根本となつて居るので、人を眼下に見、夫に對する従順もなく、従つて舅姑に對する心得も辨へて居なかつた。そこで佛陀は長者の頼みによつて、此玉耶女の爲めに説法せられたのが玉耶女經となつて居るのである。

女人の法は方に姿容の直く正しきによりて驕り侮る心を生ずべからず。すがた形の直く正しきを直く正しき人となすにはあらず、たゞ心と行ひとの直く正しきものゝみに人に慈しみ敬はる。是れぞ直く正しき人となす。己がみめ容貌のなほく正しきにたよりて驕り侮り、自ら専恣にすることを得ず。後に賤しきものに生れて人のために召使はれん

と誠められた。即ち美人と云ふものは、顔容の外形の美しいのを云ふのではなく、其心術の美しいのを眞の美人と云ふのである。人の顔容は如何に美しくとも、花の盛りの長からぬやうに、如何に明眸皓齒、玉の如き婦人であつても、老病死の苦に襲はれては終にあはれ果敢なき野邊一片の煙と化し去るのである。然るに心の美に至つては、玉の磨けば磨く程光りを増すが如く、年を重ねるに随つて愈々益々其の美しさを増すのである。故に其形は左程に美ならずとも、心の美なる人は一生を平和に幸福に送る事が出来る。この精神美が人を感化すると、お説きになつたのである。古歌に

目はかすみ耳に蟬なき齒は落ちて

かしらにつもる老の白雪

と云ふが如く、たとへ楊貴妃とか小野小町のやうな美人でも、百年千年の美を保ちゆく事は出来ぬのである。

四 婦人の三障及十惡

更に又、玉耶女經の中には三障と云ふ事が説いてある。曰く、

「幼にして父母に障へらる、嫁しては夫に障へらる、老いては吾子に障へらる」

又、十惡と云ふことも説いてある、惡と云へば大層嚴しい文字ではあるが、茲にいふ惡の字には左程に重い意味はない。

- 一、其の生るゝや父母之を喜ばず、
- 二、生れ終りて之を養育するに味なし、
- 三、成長するや常に嫁するを憂ふ、
- 四、到る所として常に人を畏る、
- 五、終に嫁して父母に離れざるを得ず、
- 六、生家を去りて他の門戸に倚る、

- 七、懷妊の惱みあり、
- 八、出産の儼みあり、
- 九、常に主夫を畏る、
- 十、席に自在あらず、

これが佛法の教であつて、斯く算へたて、一々批判を加ふれば、随分面倒な事になるのであるが、要するに教といふものは其の弱點缺點を擧げて訓へ導くのである。無論婦人にも優れた點が澤山あるに相違ない。けれども人間は妙なもので、人から褒められたり、追従を言はれたりすると、身の爲めにならぬ事であつても、之を悦ぶのが人情である。良薬は口に苦しのたとへ、氣に入らぬ事でもあつても、其時は快くないが、後には利目が分つて來る。元來婦人は情に脆いものであるから、其の弱點を擧げて訓へて呉れた所に、教の眼目があるのである。

五 女人成佛の話

以上は概して婦人の弱點のみを指摘したやうであるが、然らば吾々佛弟子が婦人方に對して如何なる考へを以て應接するかと云ふに、それは我より年老けたる婦人に對しては我母の如く思へよ、我より少し年長けたる婦人に對しては我姉の如く思へよ、我より年少の婦人に對しては我妹の如く思へよ、極く幼きものに對しては我娘の如く思へよと、斯様に佛陀は説いてある。私は常に此心持を以て婦人の方に對するのであるが、精神上極く親しく感ずるのである。

又「外面如菩薩、内心如夜叉」杯と謂うて居るのは、兎角男子は婦人の愛情に溺れ罪を造り易きを誡めたのであつて、佛敎の立脚地から婦人を見れば、別に男子と差別を設けぬのである。されば法華經の中には、天龍の娘の八歳の龍女が佛に摩尼寶珠を捧げた、佛は直ちに「善哉汝は已に成佛せり」と仰せられた。「一切衆生皆是吾子」は佛の本懷である、況して貴



ぶべき人身を受けたる以上、男女の差別に依つて、貴賤上下の区分を設くるやうな事は絶対にないのである。心地観經及び六方禮經等には親の恩を説くに方つて、父の恩よりも寧ろ母の恩を主として説いてあるほどである。

六 妻に對する夫の心得

男女は本來同等同一なものには相違ないが、夫としては夫の役目があり、妻となつては妻たる役目がある。夫が外に出て働けば内に在つて之を助ける、仕事の上、人倫の上には男女の差別があつても、佛敎の本旨より見れば同等同一である、故に經典の中にも、

若し佛性を知らざるものあれば、吾之を解いて女人となし、若しよく佛性ある事を知る女人あれば、吾之を解いて大丈夫となす。

とあつて、罪業深ければ男女に關せず成佛が出来ぬ、自己に佛性あることを認得すれば共に成佛するのである。

猶一夫一婦の人倫の道に於ても、佛敎に於ては尤もやかましい、婦人が他の男子に對して淫らなる考へを抱いてならぬ如く、男子も又自分の定まれる妻の外に妾を蓄へるとか他の婦人に關係するとか云ふ事は絶対に禁じられて居る、それを尤も適切に説いたのが六方禮經である。其中に妻に對する夫の心得と云ふ事がある。

第一、出入常に婦を敬す、

第二、飲食時を以てし、また衣服を與ふ、

第三、常に金錢珠璣を給與す、

第四、家中所有の多少悉く用ひ之に付す、

といふ風に其他いろ／＼簡條を以て示されてある。随つて又妻の夫に對する條件もある。

一、夫外より來らば、まさに起つて之を迎ふべし、

一、夫出で、在らざる時は、まさに掃除して之を待つべし、

一、常に夫の敎訓を用ひよ、

- 一、あらゆる什物は藏匿することを得ず、
 - 一、夫休息する時は善藏して乃ち臥すことを得、
- といふ風に種々なる心得方を説いてある。

七 東西洋の婦人觀

婦人の修養に關する教訓は、以上佛教のみならず、基督教に於ても儒教に於ても、今茲に委しく述べる時間はないが、大體に於て相一致して居る。世間多くは儒道や佛教では、男より女を卑く見るやうに思ひ、東洋では大層婦人を卑んで居るかのやうに云ひ、西洋では如何にも婦人を尊んで居るかのやうに云ふ者がある。事實に於ては多少其の傾向はあるかも知れぬが、教に於ても又常識を土臺にして見れば、婦人觀は略一致して居るやうに見える。

彼のマホメットが婦人に覆面の禮を強ひて、素顔のまゝで外出しては相成らぬと教へ、現にマホメット教の行はるゝ土耳其の婦人が眼の外は總て皆な顔を覆ひ隠して外出する習慣を

守り、又耶穌教でも使徒ポロが女が被物なくして天目を見てはならぬと教へ、天主教會では、女が寺院に參詣する際には必ず白い布片を懷中から出して被る習慣の存して、現に今尙ほ實行されて居るのである。

これは要するに婦人には兎角誘惑が多かつたり、又誘惑したりする場合が多いと云ふ懸念から來たものである。要するに婦人に對する東西の觀察は略一致して居る。

八 精神美を修せ

昔から美人には誘惑が多いとしてあるが、又、男子を誘惑する場合も多いとせられて居る。然し誘惑は心外に在つて惑はすものでもなければ、又美人そのものが男子を誘惑すると極つたものでもない。所謂、美人には兎角、自らの肉體を誇つて、此の肉體美を以てすれば、男がどんな具合に引つ懸つて來るであらうとか、或は又これだけの肉體美があるから之を棄て置くのも勿體ない故、一つ男にチャホヤせられて見たいものだとか云ふやうな浮いた氣分

が有り勝なので、誘惑したりせられたり、又は前に述べた玉耶女の如く嬌慢な心になりたがるのである。けれども自心が確固不拔の信念に住して居れば、左様な事は決してあり得べき筈がないのである。

玉耶女も一旦大聖佛陀の御教を聞き、翻然として一念懺悔して過ちを悔い、深く佛の御法を信じてよりは、全く別人の如く立派な婦人となつた。而して玉耶が佛を讚して歌ふ其聲は十方に響きとほり、見るもの聞くもの隨喜して、みたまやに額づいたと録されてある。されば佛陀も「玉耶女經」の中に、

若きものも必ず衰ふるものなりと觀じて、容姿形貌を頼むこと勿れ、まさに勤めて精進し、世の弊を捨て棄つべし。

と説かれたのである。

精神が鍛へられて美しくなれば、随つて其の婦人の肉體をも美化し、其の一進一退一舉手一投足の上をも美化し、その周圍を美化し得るものである。精神美なくして美人は決して世

にあり得べき筈がないのである。既に精神美を修養し得れば、其の顔容が正しくなつて、嫁しては夫を美化するのみならず、延いては一家を圓滿ならしめ、其美德はやがて社會を感化し得るに至るのである。而して其精神を修養するには宗教が尤も必要である。

寶曆の頃、京都の島原に大橋と云ふ遊女があつたが、白隠禪師に相見して禪を修した。後縁ありて當時の奇男子栗原一素に嫁したが、終に出家して名を惠林と改め行ひ堅固に世を果てた。葬送の日、導師の東嶺和尚が、其宅に往つて見ると觀音の像が壇上に在るのみで、惠林尼の位牌がない。和尚怪んで一素に問へば、一素は斯う答へた。

「惠林は、所謂婦女の身を以て得度すべきものには、即ち婦女の身を現じて説法する觀音の應現である。今茲に觀音の像を安置する以上は位牌には及びますまい」と、如何にも一素の言の如く、精神美を以て他を美化する婦人は、即ち觀世音菩薩の化身である。

教に順ずる心

一 文明の生む悲惨事

世が文明に進めば進むほど、益々生活難を訴へるものが多くある。それは一面には人のして居る仕事を器械の方が奪つて仕舞ふ、人が發明した器械、其の器械が人間の職業を奪つて仕舞ふ、前には十人掛つてして居た事を器械一つでやる、百人掛つてして居た事を器械一つで出来るやうな工合になつて来る。食物には限りがあるが人間は段々殖えて行く、而して其領分が急に擴まる譯ではないのであるから、所謂生活難なるものが日々夜々に殖えつゝある。我邦の如きは未だ甚だしきに至らないのであるが、もう外國あたりに行くつと、段々さういふものを救ふ機關が出来て居る、さういふ者を職業に就けてやり、さういふ者の不平が溢れぬやうにする機關が出来て居る。私共外國を少しばかり旅行して見て、倫敦ならイース

トエンドと云ふやうな貧民窟——貧民窟と云つても日本とは大分状態が違ふのであるが——如何に倫敦の如き世界的の富める大都會でも、イーストエンドあたりに行くと、子供でも何でも汚い風をして居るし、誠に憐れ千萬な生活をして居る人が澤山ある。かう云ふやうな有様になつては、知識欲だの名利欲だの、生存欲などに苦しんで居るの、或は惱んで居ると云ふはまだ贅澤なのである。國民の是非受けねばならぬ初等の教育すらも受くる能はざる人が多數を占めて居る。

二 四苦八苦の解

勿論是は總てをいうて居るのではない、社會の一面をいうて居る、又人類としての其一面をいうて居るのであるが、斯様な方面ばかり見た時に、佛様は四苦八苦といふ事を仰しやる。四苦八苦といふ事を詳しく云ふと長くなるから、文字の上だけに止めて置くが、四苦とは生老病死、病とは病み付くこと、死は死することである。八苦はそれにモウ四つを加へるので、

一は愛別離苦、ごく親しい親戚などは、始終一緒に居りたいが離れ勝ちのもの。二は怨憎會苦、あれは気が合はないから一緒になりともないと云ふ者には、つひ會はなければならぬ。仲の善い親類には別れるやうな事が出来たり、仲が悪いとまで行かぬでも、気が揃はぬと云ふやうな人とは一緒に仕事をせなければならぬ、それが愛別離苦、怨憎會苦。次に求不得苦といふは求むる事を得ざる苦、あれも欲しい此れも欲しい、欲しい物だらけだが、それが決して得られない。それから憂悲惱苦、憂ひ悲み惱む苦み。こんな事は又後日ゆつくり述ぶることとするが、兎に角人間は富んで居つても貧しく暮して居つても、貴きも賤しきも、老人と若い者とを問はず皆苦がある。今いふ四苦の如きは是れである。此人には年寄らぬやうに時間を與へてやらう、充分休息する時間を與へてやらうと云つても、向ふから與へて呉れない。誰にも彼にも皆公平無私、生れたと云つて嬉しがつて居る中に、はや墓場が近くなつて居る、漸々成人して行き居ると思ふ中に年が寄つて行く。達者だとウカ／＼して居る中に――つひ此程の事、赤十字社病院に人を尋ねたが、彼處へ行つて見ると斯うも病人が大勢居る

ものかと思ふ。又人の葬式に出會うたり、或は時々谷中あたりの共同墓地を通つても、今更の如くさう思ふ、かうも人が死ぬものか、初めはよそ事に思つて居る、他人視して居るけれども、一人親戚の内できういふ者が出ると、之を火事に喩へるならば大分近火になつて来たやうなもの、最も親しい親戚中にさういふ者が出来ると、是は漸々類焼せんとするやうな有様、今迄はよそ事の如く、うか／＼見て居つたが、遂には傍らまで来た、共に焼かれて仕舞と云ふやうな事、自分の頭に火が附いて来た。達者であつた、はや病氣した。若い／＼と思ふ中に老人になつた。私も矢張り五十を少し出た今日でも、偶々人から、御老體などといふ挨拶を受けると何だか面白くない、まだ自分では老人の積りぢやないから面白くないけれども、併し五十を踏えて仕舞へば老人の初め、子供から見れば大變な老人に違ひない、是だけは決して後戻りしない、行きつきりだ。

三 命數の順路

今は人間が餘程慾張つて來て居るから、俺は百まで生きる、百二十五まで生きる——昔の人はあまり遠慮して言うて居る、七十古來稀——今では學問的理窟から言つても、生熟期を二十五歳として、其の五層倍位生きるのが當前だと勝手の好い方に考へた、さうすれば百二十五歳まで生きると云ふ事になる。縱令百二十五歳まで生きて見たところが僅かのもの、昔も百歳以上の人は澤山あつた、唐土には彭祖といふ人、八百歳の壽を保つたと云ふ。衲の生國は若狭であるが、若狭の國には八百比丘尼と云ふのがあつて、その比丘尼は八百歳も生きたと傳られて居る、或は鶴の齡とか龜の齡とか言つて見た所が、もつと大きい壽命を有つて居る、無量壽佛と云つてもよい大なる天地とか宇宙とか、此の無限無窮の生命から比べて見ると八百歳生きても千歳生きても、實はハタ／＼と瞬きする位の間と云つてもよい。唯これが新陳代謝が按排よう行はれて行くならば、そこに面白い事がある、恰かも四時の循環するが如く、晝夜の交替するが如くに、陳びたる物は先へ往き、新しい物は後から進む、又その新らしいものは又々後から進んで行く、老人は天然の壽命を終へて先へ罷り死ぬならば、悲

しい事は人情であるけれども寧ろ御目出度い、若い者が其跡を繼いで、其人の志を紹ぎ其の事業を繼ぎ、さうして其人と同じやうに又働いて行くならば、順に行つて居るのであるから御目出度い。それが順に行かずして逆に行くと、是は甚だ御目出度からぬ所の現象である。

四 何が一番めでたいか

さういふ時に私は何時も想ひ起すのですが、仙崖和尚が面白い事を言はれた。これは百五十年前、博多の聖福寺というて、寺も名高い寺で繪畫などでも御覽であらうが、其處の和尚が大變面白い御方で、黒田侯の歸依を受けて居られた。或時黒田家に結婚式であつたか出産であつたか、何か慶事があつて、皆書とか詩とか畫とか、色々な物を祝つて持つて行つた時に、殿様があの仙崖和尚にも何か書いて貰ひたいから、ごく目出度いものを書いて貰つて來い。命を承けて家來が和尚の處へ行きますと、是は又酒々落々たる和尚其人の言行を書いた物がありますが、ちよつとも滞りの無い人。使者が行つて口上を述べると、宜しい書いて

上げようと云つて、直ちに筆を執つて書かれたのが「親死ね子死ね孫死ね」と書いてある。是は何うも目出度からぬ事で、別してさう云ふ慶事でも行はれた時には、人が大變いやがる事、使に行つた者も大に失望したけれども、仕方がないから持つて歸つて見せた所が、果して矢張り分らなかつた。苟且にも目出度い事となるのに、親死ね子死ね孫死ねとは何うしたもの、禪師は随分惡戯を云ふけれども、あまり今日のは甚だしい、此裏をもう一遍書いて貰つて来いと再び家來に命じた。それから其人が復た再び行つて、私にも分らぬと思つたが殿にも分りませぬ。どうぞ此裏を書いて呉れと云ふ事を依頼した。裏を書いて呉れといふなら書かぬ事もない、それも無雜作の話だ、強ての願ひならば書きませうと云つて今度其裏を書いたのが「孫死ね子死ね親死ね」これで宜いから持つておいで、何方も死ぬに違ひないけれども、所謂天地の大法と云ふか、天則に従つて按排よう死んで行き、按排よう新陳代謝して行く所に大變な面白い事がある、御目出度いことがある。所が逆行した逆さま事が世の中に多い、身の上に始終逆さま事が來るとすると、是は大いに御目出度くない事になる。例へば

親の頼みとして居る所は子にある、其子は又孫を頼みとして居る、家庭に於ても社會に於ても、之が誠に御目出度い事なので、それが順々に其の事業を継ぎ、其の志を紹いで行く、人の身體は幾度か替るけれども、先祖の志は子々孫々に傳へられて、先祖は今に此處に現存して居ると云つても宜しい位である。

五 悲しむべき形骸

吾々宗教家でもその通り、お釋迦様は約三千年前に亡くなつたのであるけれども佛の志を承繼いで、聊なりとも道を傳へると云ふならば、其處に釋迦牟尼如來は現存して居る、それでこそ御目出度い。所が後から出て來る者が先へくと死んで、其實先へ行くのが當然である老人が、たつた一人後へ残つたと云ふならば大變な不幸。今いうた百二十五歳にして、夫も百二十五歳、妻も百二十五歳、頼みにして居る子供も皆達者であるならば、これは御目出度いに違ひないけれどもさうは行かぬ。縱令自分は百まで生き百二十五歳まで生きて

も、其の生きて居ると云ふは唯我一人、頼みにして居つた人は總て先へ亡びて仕舞うた。丁度物淋しい秋風が吹いて來ると、桐の一葉がホロリと落ち、次第々々に樹々の木の葉が落ちて仕舞うて、誠に秋風荒涼の、廣い寂しい原野へ我一人立つたやうな有様で、周圍の我を取巻いて居つた者は皆亡び去つてしまつて、我一人長生しても何も目出度い事はない。能く老人から聽く、私が代りに死んでやれば宜かつた、私のやうな老人は何時死んでも構はぬに、あの生先の長い者が先に死んだと云ふ。是は人生の悲惨事である。皆死んで我一人長生して居つたら寧ろ不幸である。さうして如何に長生しても、此の世の中に何の遺す所もなく、大勢の人を利益する事もなく、世の爲にもならず人の爲にもならず、唯だ食うては寝、覺めては食ひ、色々の排泄物ばかりを製造して居る一種の器械か何かのやうな有様で、一人ながらへて居つた所が、誠に無用の長物と云つても宜い。斯う云ふ點から言ふと、此世の中では、多く物質とか肉體とか云ふ事ばかりに安んじて居つて羨慕な事である。

六 我とは何ぞや

此點に至ると生活の程度、社會の進歩の程度から申して、歐米各國と日本とはまだ到底比較にならぬ所がある。却つて向ふの人は肉體的物質的以上に、精神的に何者かの樂みを得よう、永久不變なる所のものを求めようとして居る。それは言ふ迄もなく學問なり道徳なりであるが、其上にもう一步進んで宗教。宗教なるものゝ價値は何處にあると云つたら、何れの宗教でもさうであるが、宗教の生命は永久不變なる處にある。何方かと云へば年代が経てば經つ程、愈々益々光を放つて來ると云つて宜い。佛様が或場合に於て、世の中は苦みの海である、涙の谷であると仰しやつたのはあまりに世の中の人が此の物質や、肉體に目をくれて居つて、それ以上に或物ありと云ふ事を信じ得ないのが氣の毒さに仰しやつた。佛教はさういふ悲觀的のものでもなく厭世的のものでもないが、一度厭世的の考へも起して見、世の中を悲觀しても見る位の人であつたならば、更に進んで此の社會なり、此の世界なりに活動し

得る力が出来て来る。一遍は今のやうにズツと感じさして置いて、其の脆い命、誠に不完全な此體、此缺陷の多い社會、一日も斯う云ふ處に住んで居る程の價値もないと思ふのであるが、偕て我は何か、我は何ぞや、かう心機一轉して靜に考へ直して見ると、僅か小さな五尺の體であるけれども、此體を一人此の世の中から取去つたならば、それだけ宇宙と云ふものに缺陷が出来る。否五尺の體どころでない。蚤一疋でも此から外へ取除いて仕舞つたなら、夫丈宇宙に缺陷が出来る。誠に小さな憐れなものであるけれども、我が此心、我が此體は何處から生れ出たか、「我」を姑く小天地と見るならば、此小さな天地は何處から來たかといふと、大なる宇宙から來た、大なる天地から來た、大なる天地から來たと云ふよりは寧ろ其の片割である。天地とか宇宙とか言ふと、言葉が少し喧しくなるが、外の教では罪の子だと云ひ、或は佛敎の方では凡夫と云ふ、如何に我は凡夫でもあり、罪の子であつても、此罪の子は何處から生れた、矢張り佛や神の片割ではないか。それは併し宗教に依つては、人間と神とを全然別にして居る、人間と神とを一緒にしたら天罰が當るやうに言うて居るものもある

がそれは自から議論が別である。

七 卽身成佛の義

佛敎の立場から言ふと、佛も昔は凡夫なり、凡夫も終には佛なりと、佛御前が語うた如く、此の不完全の體、此の小さい體でも、矢張り佛の光明赫灼たる體の片割で、膿血の出る此體が取も直さず光明赫灼たる佛の體である。此の土地社會、之が卽ち彼の極樂世界である。是が大乗的佛敎の立場、決して悲觀するどころでない。體は物種である、此の迷があればこそ悟りが開ける、此肉身があればこそ法身を得る事が出来る、此社會があればこそ茲に極樂淨土を打立つる事が出来る。成程或る一部の根機の人には、西方十萬億土まで行かねば極樂が無いと云ふが、吾々の方の立場からいふと、態々其處へも行けませうけれども、行かぬ先にも黒土の上が直ちに極樂淨土。それは見やうである。其處まで心を練り上げて行かなければならぬ。其處まで心を向上せしめた上から見ると、此黒土の上が取も直さず極樂淨土であ

る、此の肉身が直ちに光明赫灼たる佛の體である。

八 宗教的安心

斯う眺めて來ると、大いに世の中を樂觀する事が出来る、體は物種、此の世の中は實に活舞臺。斯うなつて來ると、もう希望の心感謝の念が、實に春の海の如く續々湧いて來る、ちよつとも物に草臥れたり、物を厭うたり、人を憎んだり、引込思案を起したりするやうな事はなくなる。故に昔の人は、戰ひの中でも此心から働いて居る、どう云ふ困難に出遭うても此心を鼓舞して行くが爲に、困難を困難ともせず、苦痛を苦痛とも感ぜず、寧ろ苦痛を以て快樂とし、困難に出遭うたら更に一段の勇氣を増して來る。彼の家康公は千軍萬馬の中に於ても日々に幾萬遍かの念佛を唱へ、加藤清正は南無妙法蓮華經の旗印、今なら聯隊旗を翳して戰場に進み、北條時宗は禪に依つて得たる心を以て彼の日本を一吞にせうとして來た忽必烈に對して、一喝を以て之に酬ゆると云ふやうな事が歴史にある。歴史家は多くは表面だけ

しか書いて居らないが、其裏面に就いて考へて見ると、半平とて抜くべからざる宗教的安心立命が籠つて居る。此の宗教的安心の上から出て行く者でなければ本當の勇氣でない、彼の瞬間主義とか目前主義とか現實主義とかでは逆も眞似も出來ない。泰西の學者が精神生活と云ふのも、簡易生活と云ふのも、皆この宗教的安心立命から來た事である。若しも此が單に現實の爲めか、肉體的だけの仕事ならば、實に淺近短薄であるといはねばならぬ。

九 精神界の領分

此物質界に生息して精神界の生活を爲し、現實的俗なる生活の中に於て極めて神聖なる生活をして行かなければならぬと云ふ事は、皆宗教的に割出して來た事である。それゆゑ昔の英雄なり豪傑なり、賢人聖人、言ふ迄もなく佛や神は、皆其中から生れて其中に住して居られたのである。斯うなつて來ると世の中を悲觀するどころの騒ぎでない。此の世の中があつてこそ吾々が働き得られるのである。此體があつてこそ仕事が出来るのである。更に一步進

むと、他の體を以て我體と認むる事が出来、他の苦痛を以て我が苦痛としてそれに代りたいと云ふ精神までも出て来る。則ち博愛の働き、正義の働き、至誠の働き、佛教の言葉でいふと大慈大悲の働きとなつて現はれて来る。此眼を以て世界を眺められるから、佛様は何時でも此の世界は我精神的に於ての領分であると仰せられてある。此に至つては人間に色別などはない、彼は黄色人、此は白色人などと、さういふ狭苦しいものではない。大悲の眼を以て之を洞觀する時に於ては、此の世界は皆わが精神世界の領分、同時にありとあらゆる生きとし生ける一切衆生は、悉く我精神的に生み落されたる赤兒である。三界は我有なり、其中の衆生は悉く我子なりと言はれてある。之が佛様の御思召であつて、口でこそ申せ、吾々は未だ却々さう云ふ譯には行きかぬるが、併し理想とする所は其處にある。かういふ公明正大なる精神の力に依つて、初めて世界の平和を喚び起すことが出来る、宗教の本領は平和である、世界の平和、人類の平和、それを小さく約めて言ふならば國家である。もつと約めて言ふならば家庭である。此の家庭に於ても國家に於ても、あらゆる社會に於ても、陰に裏面に在つ

て差別界の繋ぎとなるものは何かと云ふと、即ち此の宗教心に外ならぬのである。

十 文化に伴ふ要求

初に述べし如く衲の主意は、是非とも佛教と云ふ事でもなく、是非とも儒教と云ふ事でもない。それは謂ゆる歴史的宗教、衲が此に言ふのは、我本來持ち來つてある其の宗教的精神是が無くしてはならぬ。是からは人が賢くなり、總て知識も平均せられ、何も彼も平均せられて、昔ならば一種の東洋固有の道徳があつて、主従の關係、親子の關係、子は絶對的に親に従はなければならぬもの、妻は絶對的に夫に従ふものと定りがあつて、それも至つて大切な事ではあつたけれども、併し今は總てが社會的になつて、世界的に領分が擴まつて來たのであるから、昔の如く唯人と人との關係に於て絶對に服従し、若くは絶對に壓へ付けると云ふ事は出来得られないのである。其の代りには今いふ宗教的博愛の心、慈悲の心、此心を以て進むならば、子は親に對しても其心が働いて孝行となり、親が子に對つては其心が何よりの

愛の力となり、夫婦の關係に於ても、それが誠に精神的の結びつけとなる。此心無くして唯だ理窟と理窟、智慧と智慧、學問と學問となつたら、衝突の起るは當前、親子でも喧嘩、夫婦でも理窟を言はなければならぬ。理窟で出来た事は又理窟で破られる事となる。とてもとても是からの人間を、理窟や學問や法律や規則位の、小さい狭い範圍に於て治めて行かうと云ふ事は、事實上容易に出来得られない。絶對的に出来ぬとは申さないが、或る程度までしか出来得ない。唯だ茲に一つ、銘々持つて居る宗教の心を互に明かにする時には、言はず語らざる間に其處に一脈の春風駘蕩として、百花爛漫と咲き亂れるやうな有様に温い或物が生じて来る。此に於て家庭も圓滿になり、平和に繁昌する事となる。斯う云ふ意味に於て世の中が開ければ開ける程、我本來持ち來つて居る所の宗教的精神——又は既に成立つて居る所の歴史的宗教でも宜しい——が何うしても役立つて行かなければならぬと思ふのである。其の樂觀すると云ふ點に就ては、更に項を改めて述ぶる事にする。

生死問題 (上)

一言ひ易く行ひ難し

「生死事大無常迅速、時人を待たず、人身受難し今既に受く、佛法聞き難し今既に聞く、此身今生に度せずんば、更に何れの所に向つてか此身を度せん」
 これより述べんとする事柄は、上記の金文通り「生死事大無常迅速」と云ふ事であるが、其前に當つて、一言申したいのは道に志さるゝ諸子は、既に多年の間諸名士方、又は高僧方の種々尊い説を屢々耳にし、又目には其の著書等も見居るであらうが、さて夫れを實行すると云ふ事になると餘程むづかしいものである。何事も心で考へ口で言ふ事は、謂はゞ易いとしても、情之を實行しようとなると中々むづかしい。今更言ふ迄もない事であるが、唯其耳が肥えたと云ふ計りでは之は餘り裨益になつて居らないと思ふ。耳が肥えた目が肥えたと

云ふ計りで肝腎の腹が出来なくては、未だ修養の目的を達して居らんのである。昔の莊子であつたか老子であつたか、「其腹を虚しうして其の行を實にす」と云ふ言葉があつたと思ふ。之は甚だ面白い、何人でも腹の中は空虚にして置かねばならぬ。何も無くして置くと云ふ意味は、何んでも容れると云ふ意味である、我腹の中に種々のものが詰つて居つては、外から善いものを容れようとしても這入らぬ。それで何時でも我腹は何でもござれで、擯げて置かねばならぬ。況して吾々は少し位の學問智慧、夫れは宜いとして、其外の我慢執着種々のものが、腹一杯つまつて居つては到底外から善きものを詰め込まうとしても出来ないから「腹を虚しうする」と云ふ言葉は甚だ面白い。私は此言葉をさういふ意味に解釋した。昔の註釋を見たら何う云ふ解釋がしてあるか知らぬが、其腹を虚しうして其の行ひを實にする、腹が空虚だけでは不可ぬから、其腹に詰め込んだ力を實行の上に現はして往く、行ひを何處迄も充實して往く事が肝要であると自分は思ふ。今も其通りでお互が多年の間、善き話を聞き、善き事を覺えたら、其の覺えたと同時に着々之を實行して往きたいと云ふのが、お互の希望

であらうと思ふ。
我佛教では「聞思修より三摩地に入る」と云ふ事がある。何時も佛教の言葉は吳音で、判り難いが、之は楞嚴經と云ふ御經に在つたと記憶する。即ち聞思修とは、聞は聞くこと、思は思想などと云ふ思ふこと、修は修業杯と云ふ事で、三摩地に入ると云ふは、聞いただけでは——耳に入れただけでは何にもならぬ、善きことを聞いたら深く考へる。考へただけでは未だ足りないから、更に進んで實修して往く——實地に修めて行くことで、一言にして平たく云へば、さういふ事である。三摩地に入ると云ふのは直接あまり必要な言葉ではないが、ある意味に於ては至極入用の言葉である。三摩地とは云ふ迄もない佛教の原語、即ち梵語である。一言にして云ふと三昧と云ふこと、一心不乱になることで、尙此外種々の解釋もあるが、本書は講義的解釋が目的でないから成るべく俗に通ずるやうに述べる。詰り其の三つが一致になることである。唯だ聞くとか考へるとかでは未だ不可ぬ。聞く思ふ行ふ、其の三つが親しく精神の上にも行動の上にも並び行はれて來た所が即ち今の三摩地に入ると云ふ、斯

う云ふ言葉にしてある。さういふやうな有様であつて、之は其の生死事大と云ふ話に這入つて行く前に一寸心に浮んだだけのことを、改めて前提と云ふ程の事では無いが少し申上げて置くのである。それで是れから本題に這入る。

一 生死の意義

生死事大無常迅速、これは吾々の口癖のやうに棒讀にしてゐる言葉であるが、其れを「生死は事大なり、無常は迅速なり」と假名を振つて讀めば誰にも分り易からうと思ふ。さて言葉は分り易いけれども、其の意味を再び考へ三度考へ、更に深く考へて見ると、なか／＼之は人生の一大事であると思ふ。吾々は平生周囲の境遇上種々のことに追ひ廻されて居るが爲めに、一生涯の中、冷静に此事を考へる暇が多くないのが残念であるが、一度考へて此處に至ると、一日も安閑として居る事の出来ない程の大事である。

生死と云ふ事は、無論生れると云ふことと死ぬると云ふことで、成程、世の中に大事々々

と云ふことは平生御互が口にして居る、種々大事のことがあるが、煎じ詰めれば所謂生死の問題である。昔かういふことを深く考へた人が孔子の所へ往つて「死ぬと云ふことは全體何う云ふことで御坐る」と尋ねたら、孔子の答へに曰く「未だ生を知らず、曷んぞ死を知らん」と。涪石に孔子の言葉は其の温潤玉の如き有様で、餘り截斷的解釋を下したり、理窟的に夫れを述べたりせぬけれど、簡單なる此の一言半句の中に於て、味へば味ふ程オンモリとした意味が、よく其中に含まれて居るやうに思ふ。全體此生と云ふことが大變な大問題である。マア擴げて云へば、近頃は人生問題、宇宙問題と云ふことを直ぐに口にすることが、誰々は斯う云うた、彼はあゝ云うた、此學説は斯うであるなど云ふのではない。實地胸に手を當てて考へて見ると、生きて居ると云ふ事がやかましい問題である。其の生と云ふことの意義すらも却々人間には判らない、況んや死と云ふことは容易ならざる事であると、唯斯う仰つた。斯う仰つただけでは死の解釋はついて居らぬやうであるが、其處が矢張り孔子教の特色である。考へさせる餘地が存してある。成程考へ來るといふと、吾々の生、生れる、何處から出て來

たかと云ふことになることやかましい問題で、哲學上大切の問題である。生れて何處から来て今此處に有して居る奴は何物である。而して此處を去つて何處に到るか云ふ事は、哲學上の大問題であつて、更に進んでは宗教上の大問題である。

三 死は一大魔物

由來哲學の研究する處も宗教の悟入する處も、詰り要するに生と死の問題と云ふに外ならぬ。理窟は暫く措いて之を實際に考へる時、吾々は死ぬことは必ず死ぬ。それで死と云ふ一字を眼の前に持ち出して來た、其死と自分と相對した時に何んな考へが起るか。禪宗で云ふと死の一字を公案にした人もある、死の一字と首ツ引になつて、さうして大いに骨折つた人もある位容易ならぬ事である。大抵世の中を眺めて見ると、如何に其身が富貴であるとも、どう云ふ權力を有して居るとも、どれ位學問があるとも、知識があると云うても、又どんな技能を有つて居ると云うても、どんな膂力を備へて居るとしても、一度其死に遭へば皆其力を失つて了ふ。吾人は事實に於て之を見て居る。平生力強いというて他に誇つて居る人が一朝病に臥した時はどんな状態であるか。實に猿が樹から落ちたやうな有様ではなからうか。俺は政治家である實業家である……あるに違ひない。唯だ政治だけが人生の眞意義の完きを盡したのではない、實業だけが人生の眞意義の完きを了へたものではない。實業なり政治なり、總て活動して行く中に於て、其中に潜んで居る不可解なること、大不思議なることがある。それは何んなものであると言つたら、「死」の一字と云うても宜しい。此死の一字の前に出會うては、如何なる勇者も勇を失ひ、智者も智を失うて了ふ程死は力あるものである。世間の人は死は寂しい力の無い穴の中へでも陥込んで了ふものゝやうに思ふが、衲共の考へた所では、死と云ふものはさう云ふ物寂しい力の無いものではない。死は宇宙の一大威力である。少くとも人間の前には一大權威を備へて居る……大なるオーソリーチーを有つて居るもので、爵祿でも富貴でも、如何なるものでも、死の一字に出會うては、其の威力を失うて了ふ程の力を有つて居る。夫であるから西洋人でも、ポーブなどは斯う云うて居る「時と

を失つて了ふ。吾人は事實に於て之を見て居る。平生力強いというて他に誇つて居る人が一朝病に臥した時はどんな状態であるか。實に猿が樹から落ちたやうな有様ではなからうか。俺は政治家である實業家である……あるに違ひない。唯だ政治だけが人生の眞意義の完きを盡したのではない、實業だけが人生の眞意義の完きを了へたものではない。實業なり政治なり、總て活動して行く中に於て、其中に潜んで居る不可解なること、大不思議なることがある。それは何んなものであると言つたら、「死」の一字と云うても宜しい。此死の一字の前に出會うては、如何なる勇者も勇を失ひ、智者も智を失うて了ふ程死は力あるものである。世間の人は死は寂しい力の無い穴の中へでも陥込んで了ふものゝやうに思ふが、衲共の考へた所では、死と云ふものはさう云ふ物寂しい力の無いものではない。死は宇宙の一大威力である。少くとも人間の前には一大權威を備へて居る……大なるオーソリーチーを有つて居るもので、爵祿でも富貴でも、如何なるものでも、死の一字に出會うては、其の威力を失うて了ふ程の力を有つて居る。夫であるから西洋人でも、ポーブなどは斯う云うて居る「時と

云ふものは朝から晩まで吾々から何物かを奪ひ去つて了ふ、終りには我總てのものを持ち去つて了ふ」と云つて居る。斯う云ふ力を有つて居る一大魔物である。

四 活動の本源

それで吾々が修養したか、まだせんかと云ふ分界は何處にあるかと云ふと、死を向ふに眺めて之を恐るゝか、死と云ふものを我に體して以て活動するか、これだけである。多くの弱者の聲は死と云ふものを恐るゝ野干鳴である。又強者の叫びと云ふものは死と云ふものを我に體して活動する獅子吼である。昔の武士道を研究して見ると、其の眞意義は他に非ず、常に死の一字を心頭に騎して居る。丁度吾々が眞額に帽子を冠つた如く、死の一字を額頭に帖在して居る。私が曾て御世話になつた山岡鐵舟居士などが、死と云ふ一字を心に騎して出れば世の中に何物として恐ろしいものは無いと、斯う云ふやうな考へで劍道にも達した人であつたと同時に禪道にも頗る力を得た人で、常に死の一字を以て……此力を以て君側に奉侍

し國家に盡瘁し、而して明治維新の大業を成就せられた其一人である。

五 生死一如の端的

さて生と死とは形の上から見ると實に異なつたもので、生きると云ふ事と死ぬと云ふ事は氷炭相容れざるかの如く見ゆるものである。其故に生きるると云へば人は喜び、死ぬると云へば人は悲しむ。即ち死は悲觀を生み出し、生は樂觀を引き起す。其形の上から觀ると、氷炭相容れざる所のものである如くであるが、併しながら相互に修養し、更に進んで宗教的安心立命を得た所から眺めて見ると、「生死一如」と云ふ所に達する。生は死の如く死は生の如し、而して如と云ふ字は、ありと云ふ極めた言葉で無く、無いと極めた言葉でもない、彼と極めた言葉でなく、此と極めた言葉でもない、有るが如く無きが如く、存するが如く亡すが如く、生けるが如く死ぬるが如く、定まらないやうな言葉である。實は一方に定むる事を得ない、「如不動」の當體である。佛教で如来等と説く言葉はそれである。今言ふ生死一如と云ふは、

由來吾々は常に物を二様に観る癖がある。生と死と二つに見る、順と云ひ逆と云ひ、動と云ひ靜と云ひ、何の上に持つて行つても、總て物を二様に觀て往く。成程、形の上から觀たなら、さう見えざるを得ないであらうけれど、眞個一旦豁念貫通の境界に徹底した目から見れば、畢竟して生死一如、換言すれば不二と云はなければならぬ。茲に於て吾々は、元來死と云ふものは恐ろしいものゝやうに客觀して居つたが、今度は死を捕へて、吾々元來死の活現したものであると觀てかゝる。即ち直ちに之を我にする。偕て今云ふやうな意味になると甚だむづかしくなつて往くかも知れぬが、實はむづかしいといへば此上もなくむづかしいが、むづかしくないと云へば、一寸もむづかしくない、唯むづかしいと云ふことは、其人が未だ徹底して居らぬだけで、徹底した以上、何もむづかしくない。併しさう云ひ掛けて見たけれども、又もう一邊後を振り返つて見なければならぬ。

生死問題(下)

一 「瀉山警策」

私が「瀉山警策」の中から抜いた事を、一寸此處へ持出して見ようが、此の鈔出の意味を述べるに大分紙葉を費すから、たゞ之を記載するだけに止める、それだけでも何かになると思ふ。乃ちそれは、

夫業發受身、未免形累、稟父母之遺體、假衆緣而共成、雖乃四大扶持、常相違背、無常老病、不與人期、朝存夕亡、刹那異世、譬如春霜曉露、倏忽即無、岸樹井藤、豈能長久、念々迅速一刹那間、轉息即是來生、何乃安然空過、

かういふ警告である。吾々が世の中に生活して居るに當り、年寄れば死ぬ、病氣をしたらば死ぬだらう、今は死なぬと云ふはそれは迂濶の考へである。既に無常迅速であつて……

無常の殺鬼と云ふものは朝から晩迄、吾々の足下を附け狙うて居て、常に吾々を何れの處へか掠め去らうとして居るのであるから、世の中は年寄が先へ往く、若い者が後へ残ると云ふ確然たる法則は無い。縦令王侯相將英雄豪傑でも、此殺鬼の御迎へが来ると何時でも容赦はない、其迅速なる事は到底喻へやうがない。所謂疾きことは風の如く、侵略する事は火の如しである。然るに凡人は常に此無常迅速を外事に見過して、知らぬ顔をして居る、眞に憐むべきである。例へば道を歩いて居つて葬式を見たら何と観ずるか、其時の考へはたゞ何處かの葬式が通る位に考へて、謂はゞ度外視して居る、世の浮薄な人情はそんなものである。ところが其葬式は他人でなく自分の親戚の中のものでもあつたら、今更の如く哀情が深くなる。若し又不幸にして兄弟の中の一人が急に缺けたとなると更に痛切に感じて来る。兄弟どころで無い、若し最愛の親子の間に於て其孰れかが亡くなつたと云ふ時の親の心子の心は、更に一層痛切に感ずるであらう。若し又夫婦の間柄で二世も三世も契つて居つても、一朝にして生別死別の不幸に出逢つたならば、其斷腸の情は實に悲痛極るものであらうと思ふ。

喻へば遠方の火事が次第に類焼して来て、遂に隣家まで来た、隣家所でなく最早や自分の家に火が移つて来た。かういふやうなもので他人なれば左程にないが、最も親しい所の骨肉の者が亡くなつたら、今更の如く驚き悲しみ、その作す處を知らぬのであらう。更に其火が燃え移つて来て、今度は自分の頭の上に燃えついたら何うする。今迄恃んで居つた富貴功名も何も彼も、此場合如何ともする事が出来ない、佛の所謂「妻子珍寶及王位臨命終時不隨者」である。古歌に、

咲くと見し花はいつしか散り果て、

果敢なく春の暮れにけるかな

とある。實に怪しきものは死の手である。何時でも何處でも、何物をも皆掠め去つて仕舞ふのである。

二 進退維れ谷るの時

斯う云ふやうなものであるから、昔の人は前に讀んだやうな警告をして居るのである。其言葉の中にある「岸樹井藤」と云ふのは「岸樹」は河の岸の上に生えて居る樹の事「井藤」と云ふのは井戸の上……井の藤と云ふ字で、岸樹井藤は其生死事大にして無常迅速なる所の有様を譬へたのである。其事は經文の中に「賓頭盧尊者爲烏陀憍王說法經」と云ふのに出て居る、賓頭盧尊者と云へば誰でも知つて居る、淺草の觀音堂でも地方の寺院にも大抵ある、其木像の頭又は腰等を自分の手で撫で、さうして自分の頭が痛ければ頭、腰が痛ければ腰を其手で撫でると、其痛む所が治ると云ふので、之は一寸面白い事であるが、それは外の事であるから茲に云ふ必要はない。其賓頭盧尊者が烏陀憍王と云ふ國王の爲めに說法せられた御經の中に精しく書いてある。

先年亡くなつた彼の露西亞の有名なるトルストイ、此人は哲學者と云うても宜い、又文學者と云うても宜い、一面又政治學者としても有名で、兎に角、露西亞などには稀なる偉い思想をもつた人で、このトルストイが懺悔録を書いた中にも、此事を引いて書いてあるさうであ

る。其れは茲に或一人の人が廣茫たる野原を歩いて居る。吾々も年中旅行をするが、文明の御蔭で便利な旅をして居るけれども、若い雲水時代には、斯う云ふことに似寄つた事にも出會うた事がある。日本では大きな原野と云へば武蔵野などを聯想するが、本文の曠野は到底武蔵野ぐらゐではなく、印度大陸、加奈陀平原、又はゴビ沙漠とか云ふ様な、廣々漠々たる野原をトボ／＼と一人で歩いて居つた。さうするとサア大變な出來事が起つた。一疋の象が我を目懸けて飛んで來た「狂象」と經文にはある……其猛り狂うた大象が、我を追つ懸けて來た、さて大變であると云ふので、何處へ遁れたが宜いかと思つたが、附近には助けて呉れる人も隠れる家も無い、周章狼狽の結果、ふと目に著いたのは一つの井戸である、それを經文の言葉には「丘井」と書いてある、何う云ふ掘方にしてあるか、兎に角井戸である、其の井戸を見付けた、是れ幸ひとして其中に飛込んで、其の狂へる象の害を避けようとした。それから經文に「樹根」としてあるが、其の樹の根に掴まつて、井戸の中へ這入るは這入つたが、這入つて見ると經文に「黑白の二鼠」と書いてある。白と黒との鼠二疋、我がブラ下

つて居る樹の根を、ガリ／＼と噛つて居る、漸々危険が迫つて来た。象の害は避けたが、今度は斯う云ふ苦しみに出逢うた。そのみならず「四蛇」と書いてあつて、四隅を眺めて見ると四つの毒蛇あり、其の毒蛇は井戸の隅々に陣取つて居る。仰いで見るとさう云ふ有様。俯して見ると、下には「三毒龍」ありと書いてある、三つの毒の龍が、恐ろしい赤い口を開けて下に降りて来たならば取つて喰はんと云ふ勢ひで待つて居る。上に攀ち登る事も出来ず又下に降りる事も出来ぬ。そのみならず未だある。其のブラ下つて居る樹を動かしたところろが、其樹から甘い蜜がポト／＼と落ちて来た。それで腹が減つて居るから口を出して其蜜を舐らうとして更に攀ちんとする。その拍子に其の上に巢をくつて居つた蜂の巢を落したからサアたまらぬ、蜂起と云ふ字があるが、蜂が驚いて一時に群がり起つた、さうして我身を刺すと、かういふのである。かういふやうな有様で、そのみならずまだ恐ろしい事は登る事も出来ぬ、降りる事も出来ぬ。進退維れ谷つたと云ふ其の窮境に陥つて居るに拘はらず、恐るべき事が出来た。それは「野火焼」とあつて大なる野火が起つて来て、見る／＼うちに

何も彼も有らゆる物を焼き立てゝ来たとある。

三 五慾制御の譬喩

さア諸君は何と思はるゝぞ、之は譬へである。時に賓頭盧尊者は國王に向て、さア國王、何と考へられる、如何にしても之を通れる事は出来ぬであらう。即ち此意味を以て、生死の恐るべきこと、無常迅速なる事を觀ぜらるべしと示された。更に是を換言すれば「廣野」と云ふは生死に譬へたので「狂象」と云ふのは無常變遷に譬へ、「丘井」は身體に譬へ、「樹根」は生命に譬へ、「四蛇」は四大(地水火風)に譬へ、即ち此身のことである、「三毒龍」は三惡道(地獄、畜生)に譬へ、「蜂」は我見に譬へ、「蜜」は五慾に譬へたのである。五慾と云ふのは、五感の上(生)に起る慾と云ふが普通で、目には目の慾、耳には耳の慾、鼻には鼻の慾、舌には舌の慾、身には身の慾で、即ち目は色を見、耳は聲を聞き、鼻は臭を嗅ぐ、舌は味ひ、身は觸るゝと云ふのであるが、又別の解釋もある。第一に人間には睡眠の慾がある、誰しも若い時は殊に眠

たいものであるが、それに打勝つて行く。それから次には飲食の慾、それから男女異性の慾、之は大いに慎まなければならぬ、次は名聲の慾と云うて、虚名を欲しがると、それから財産の慾と云うて、唯濫りに財を欲しがると、道に依つて財を得るは勿論當前で「君子は財を愛す、唯之を得るには道あり」と孔子も云うて居られる。更に前に述べた事柄に就いて孔子は「血氣未だ定まらざるや、之を戒むること色に在り、其の壯なるに及んでや、血氣方に剛なり、之を戒むること闘に在り、其の老に及んでや、血氣既に衰ふ、之を戒むること得に在り」と申された。

血氣壯なる青年は精神的にも向上する事が出来る。前途頗る有望である。それで夫れと同時に一方には種々の危険が伴うて居るに因つて修養が必要である。「血氣未だ定まらざるや、之を戒むること色に在り」と云ふは、色と云ふ字は廣い意味に種々使はれて居るが、茲では異性の慾と云うても宜しい。之は殆んど恚んな天才な人でも、聰明な人でも、又聰明ならざる凡人でも、動もすれば此慾の爲めに身を亡ぼし家を亡ぼし、延いては社會に害毒を流すも

のである。所謂罪惡の下には女ありと云ふが、女から云へば罪惡の下には男ありで、實に立派な人間が此の慾の爲めに失敗すると云ふ事は、其の實例は枚擧に遑あらずである。孔子は能く人間の弱點を御存知になつて御親切に此通り御戒めになつた。血氣の未だ定まらざる丁度男子で云ふと中學時代、女子で云ふと女學校時代が一番むづかしい時で、發達もするが墮落もする、身體の上にも大變化の生ずる時である。世の父兄は大いに警戒せねばならぬと思ふ。たとへ青島の天嶮は日本人の勇氣に依つて、存外陥落し易かつたか知れぬ。然れども所謂「山中の賊は平げ易く心中の賊は平げ難し」で吾々が色の一字に打勝つ事は却々至難である、若しも之に打勝つたなれば外のものに打勝つ事は容易に出来る。血氣の未だ定まらざる第一戒むること色に在り、之は充分自ら戒めねばならぬ事である。

四 私闘の誠め

次に「其の壯なるに及んでや、血氣方に剛なり、之を戒むること闘に在り」と云ふは、人

間も壯年に及び妻子眷族を養うて一家の主となると、色であるとか戀であるとかいふやうな事よりも、寧ろ今度は一種の權勢、競争的の心が熾になる。尤も善用すれば之があるが爲めに世界が發達して行くけれども、動もすれば私慾私情の爲めに闘ふ……私闘をやる……之は大いに戒むべき事で、國家若しくは社會……かういふ團體的生活をして居られる中には特に戒めなければならぬ、元來社會は異分子の寄合ひであるから、人々相反目して闘ふ心を有つて居つては、一日も平和を保つことが出来ぬ、丁度食物の如く、色々の異分子を寄せて味を付け、それで甘しく食べられるやうなもので、世の中は強い人、弱い人、ズツト優れた人、優れた人、錢の有る人、無い人、種々さう云ふ集りであるから、其處に和合と云ふ事の必要が起る、此點からお互に闘ふと云ふ事を戒めなければならぬ、闘も善い方と悪い方と二つあるが、之は話が外に互るから此處では長く申さぬ。

五 老人の教

それから其老ゆるに及んで血氣が追々と衰へて来る。誰でも老人になると總べて筋肉等の機能が萎縮して行き、随つて精神状態まで矢張り保守的となつて行く、善く言へば物を大切ににする、悪く云へばケチになる。一旦握り込んだものは放さないといふ、斯う云ふ慾が深くなり、殊に財産などに對しては、どんな老人でもケチになるは當り前で、之れは凡夫の悲しさである。そこで孔子は其老ゆるに及んで血氣が衰へて來た時に、戒むるは得にありと申されたので、殊に東洋人は老人になると、死慾と云つて取つたものは放さないと云ふ慾が多いのは困つたもので、其點になると西洋人は、能く働き能く取込み、而して一方に能く散すと云ふ勇氣を有つて居る。日本の金持などは握つたら出す事を知らぬものが多い。悪い言葉であるが、さうして其金錢に子を産ませ孫まで産ませ、只之を利有するのみを無上の樂みとする風がある、換言すれば、世の寶を持ち腐りにするのである。昔の司馬溫公の云ふやうに「金を積んで子孫に遺す、子孫能く守らず」そのやうにして財産を子孫に遺しても、世に云ふ「賣家と唐様で書く三代目」である。大抵貴族富豪の第三代目に至ると其の遺産を蕩盡

して仕舞ふのが多い。又「書を積んで子孫に遺す、子孫能く讀まず、如す陰徳を冥々の中に積んで、子孫長久の計をなさんには」と、眞に善き教訓である。

六 無常の殺鬼

要するに吾々が一度眞面目になつて考へると、無常の殺鬼は朝から晩まで吾々を呪うて居る、所謂生死の猛火は炎々として朝から晩まで、吾々の足下に燃え付きつゝある。此間に於て受け難き所の人身を受けて居りながら、徳を積まず善も作さず、茲に醉生夢死したら何うか、此の意味に於て吾々は片時も怠けて居られない、怠けて長生した所が何もならぬ。昔の人は人生を七十歳位で満足したが、今の人は大いに慾張つて、百歳又は百二十五歳まで生きると云ふやうな事を言うて居る。成程成熟期の五層倍としたら、百二十五歳迄は生きられもせう、しかし夫れだけ生きても、何一つ此世に爲すこと無くんば何うするか、近頃は更に進んで二百歳説を唱へて來た、それは理窟から云ふから唱へられる、昔は八百歳まで命を保つ

た彭祖と云ふ人があつた、歴史を繰ると随分長生した人がある、けれども何等世の爲めに爲すなくして、只徒らに長生したならば、それは寧ろ人間の不幸と言つて宜い。凡そ人として爲す事なくして、只場を塞いで居るのみならば、是れは一種の不徳と言つても宜い位である。少し激語を使ふかも知れぬが、柄は左様に確信して居る。之に反して若し爲す事あらば、廻りの如く三十歳になるやならずして死んでもよい。若し爲す事あらば假令短命でも聊か満足が出来よう、何れだけ長壽を保つても爲す事の無い人間は、悪い言葉か知れぬが此世に肥料を造るやうなものである。殊に長生さへすれば人間の幸福であり快樂であるかの様に誤解して居るけれども、それが迂濶な考へである。何となれば吾れ一人此世に取遣されたら何うか、吾も百二十五歳まで生き、人も百二十五歳まで生き、親子、夫婦、兄弟、諸共に打揃うて長生したならば、それは幸福でもあり快樂でもあらうが、さうは問屋が卸して呉れぬ。最愛の妻に先立たれ、掌中の子寶は何時か亡くなり、兄弟も亡び親友も去り、秋風一陣、滿目荒涼として、只我一人形影相弔し、遂に目は臙氣になり、耳は聞えず、朝夕の起臥すら人手に

掛らんければならぬと云ふ有様になつて長生した所で、世に對して何の貢獻なく、自分に何の慰むる事もないではないか、それで此の生死事大無常迅速と云ふ此の適切なる觀念を有つて、一日寸時と雖も決して空しく費さない、西洋の言葉に「時は金なり」と云ふ事があるが金所でない。昔東洋の聖人は方に時は璧であると言つた、かういふ觀念でドン／＼進んで往けば、決して苦が苦でない、逆境が逆境でない。斯う云ふ所の盛なる勇猛精進的精神で進んで往つたら、常に吾が物の主となつて働き、物は吾の命に従つて働く、かういふやうな自主的觀念が無いと、吾々は物の爲めに奴隸とならなければならぬ。自主的精神、獨立的精神を以て、さうして一切の境遇に臨み、萬事に對すると云ふ事になつて往つたならば、殆どモウ煩悶も苦痛も何もないであらう。一年中毎日一月一日の心持で暮し得る事が出来よう。然るに此處に心づかず暮したら、一年中毎日々々大晦日で、借金取に責め付けられる様な窮地に陥らねばならぬ。畢竟苦樂窮達は外より來るに非ずして内より生ずるものであることを知らねばならぬ。

七 心は巧畫師の如し

斯う云ふ様な譯で餘り樂がしたい、長生がしたいと云うても薩張り當にならぬ。たとひ一時は樂と感しても、肉體的快樂とか物質的慾望とかは限りあるもので頗る範圍が狭い、之に反して精神上の快樂と云ふことになると、其の範圍に限りが無い、現世及び後世、盡未來際を貫いて大安心が得られる。何故ならば、生死を一如と觀るからである。古人の所謂「生死中に物なければ即ち生死なし」これである、取りも直さず是れが禪の本領である。乃ち手を翻へせば佛、手を翻へせば魔となる、極樂も我より造り、地獄も皆我より作る。經に「心は巧畫師の如し、能く諸の世間を作る」とある。夫れ故に「又經に心(迷の心)を師とする勿れ、能く心の師となれ」と誓められてある。生死は苦しいもの、涅槃は楽しいもの、早く此樂みが得たいと思ふ。此偷心を生け捕へにしなければ、大安心大決定の境界には達せられぬ。兼好法師の歌にも、

茲もまた浮世なりけりよひながら

思ひしまゝの山里もがな

とある通りで、何處へ往つても不平は絶えぬ、毎日御馳走を食べて居れば、それは御馳走でない、毎日樂をして居れば、それは樂でない。所が自分に大安心と云ふものをシツカリ極めてそして自分の天より與へられた職分に向つて、どしどし自分の勇氣を鼓舞して行く、自分の向上心を何處までも進めて行く、斯う云ふことになつたら、實に其目を大愉快にして送る事が出来ようと思ふ。今涅槃の心を悟りたれば、生死の心を盡せ、如何なるか生死の心、汝が涅槃を求めようとする心、即ち生死の心なり、斯う云ふ解決である。古偈に「百尺竿頭不動人。雖三然得入一未爲眞。百尺竿頭進一步。十方世界是全身」とある、之でなければ自主獨立の大活動は出来ぬのである。

道は邇きにあり

一 智と情と意と

凡そ吾人が精神を修養するには多くの方法があるであらう。けれども之を大別すれば大概三となる、曰く情的修養、曰く智的修養、曰く意的修養、是である。この三者を完全に修養しなければ、其の何れを缺いても甚で薄弱なる根底の上に立つて居るものと云はねばならぬ。故に如何なる教にあつても、この智情意の三つを修養することを目的とせざるものはない。孔子の修養法は、明德とか、至誠とかを根本として居る。又孟子は「學問の道は他なし、其の放心を求むるにあり」と云ひ、或は「萬物吾に備はる、己にかへして誠あらば、樂これより大なるはなし」と謂つて居る。孰れも修養の要諦は自己の精神を反省し、自ら主人公となり得るにあるのである。

二 實行的の修養

されば古來の賢哲はそれ／＼修養に努められた事は史上に明白なる事實である。而していづれも學究的ではない、悉く實行的である。朱子や、程明道と云ふ支那の大儒も、皆靜坐をして自己の修養に努められた。陸象山は天地萬物は皆吾心の注脚であると云ひ、王陽明は「物を明らめて之を得ざれば之を心に求めよ」と云はれ、其主義を實行する方法として常に靜坐工夫を専らとせられたと云ふ事である。全くこの心を除いては、凡ての見聞覺知、いづれも何等の意義がないのである。物事を見聞し覺知せんとするには、是非心の修養を根本とせねばならぬ。又この心は一切誘惑の根源となるのである。そして一切の懷疑も、一切の疑問も亦これより起る事を考へねばならぬ。故に修養の眞意義はこの心即ち自己の主人公を知るにあるのである。

吾人は常にこの主人公を忘却して居ると、直ちに外界から見聞覺知と云ふ賊類の侵入を受

け、内界からは情慾意識と云ふ魔黨の迫害に攻めらるゝ事は免れぬ。かくては五十年の一生涯は自分の生涯とならずして、たゞ外から来たものゝ爲めに支配されると云ふ事になり、實に男子一生の恥とせねばならぬ。

三 瑞巖の彦禪師

瑞巖の彦禪師は毎日靜坐して自己の精神修養をした有名な先徳である。而して自ら呼んで主人公と云ひ、自ら答へて「諾、慍々著」と申した。智情意の三者はこの主人公によつて統一さるゝのである。されば一切の萬物は悉く自己の靈性を磨くの因縁とならぬものはな

らぬと教へるが、自家に歸つて見ると親が酒を飲んで居る。さうすると子供の心が動き出

すのも無理はないので、これが心の駒の狂ひ出す初めである。家庭に於ては父母や兄弟の一擧手一投足までが、皆子供の教育上に大關係のある事を思ふと、餘程注意してゆかねばならぬのである。一體家庭教育と云ふものは學校教育の如き黒板があるのでもなく教科書もない教育であつて、而も父兄の行爲が常に黒板となり、教科書となるのであるから、大に注意せねばならぬのである。

四 社會改善の方法

今の學校では兎角智育を主とする傾向があるから、勵もすると道德的教育の方に缺陷が生ずるのである。世の中で、彼が手腕家であると賞める。この賞められた人は多く悪い事にも腕のある人が少くない。特に其人が官吏であり、代議士であると云ふ場合、社會に響く惡影響は甚大なものである。學校では明治天皇の下されたる教育勅語を捧讀して、生徒に之を奉戴する事を教へるのであるが、さて生徒が學校を出て社會に立つやうになると、勅語の御主

意は全然忘れて了つて、醜しきに至つては不忠不孝の恐ろしき事迄やる様になるものがある。是等も即ち精神教育が不完全で、社會の道德心が發達せぬ結果である。

修養は前述の如く、必ずしも高尚幽玄なる哲理を研究せねばならぬと云ふことはない。智的發達には哲學も必要であらうが、人格の修養、意志の鍛鍊、克己、修行と云ふものには、深く之を修めて居なければならぬと云ふ事はない。古よりの大哲學者は必ずしも大人物と云ふ譯には參らぬ。人間の仕上には智よりも意の方が大切である、情的の修養も等閑にはならぬ。この智情意の三者を統一して人々個々の心を正うして行くと、自然に社會を改善し國家の福利を増進せしむる事が出来るのである。

五 人々脚下を照顧せよ

然らば心を正うして行く方法とは云へば、先づ自己の心を明むることである。自ら善く反省して實際に究明する時は、所謂道は通きにありて極く手近い簡易なものである。之を假へ

ば自己の持つて居る寶を失くしたやうなもので、何處彼處と探し廻つて居る内はサツパリの
がないやうであるが、さて能く靜に考へて見るとア、自分の袂の中にあつたと氣が付いたと
同様、別に不思議な事もなければ又むづかしい事もないのである。

昔ある僻田舎に夫婦のものがあつたが、その夫が何か用事のため生來初めて土地の都、日
本ならば東京のやうな都に上つた。して銀座通りの如き賑やかな所に出て見ると、見聞覺知
悉く新奇なものばかり、然るに或る鏡屋にやつて来て、不圖店先の鏡に寫つた自分の姿を
凝つと見て「やれ親父さんか懐かしい」と云つて、泣くやら欣ぶやら大騒ぎである。漸く番
頭に聞いて、一枚の鏡を需めて歸國したが、何より大切な品物であるからと思ひ、妻にも知
らせず密かに長持の中に納めて置いた。時々之を眺めては獨り親父に逢へる嬉しさに唯一の
樂みにして居つたのである。妻がいつしか此様子を怪しんで、夫の留守に長持を開けて見た。
ところが鏡に女の顔が寫つたので、是亦喫驚して、夫が都から情婦を連れ込んだものと思ひ
込み遂に一場の嫉氣喧嘩が初まつた。ところへ折よく平生懇意にする尼僧が來合せて、夫婦

の云ふ事を聞き、あまりの不思議さに長持の中を開いて見れば、今度は頭を奇麗に剃り落し
た尼の姿になつた。すると尼僧は早速夫婦の者に向つて「見なさい、先の情婦が發心して尼
になりました」というた話がある。

これは佛訓中にある譬喩で、一切萬物みな吾心の影である事を示されたものであるが、吾
吾が世に處するには、第一自己の心を正うする事、自己の心を究明すれば一切萬物に對して、
自ら自身が正しくなり、一家が正しくなり、延いて社會一般が根本より改善せられて來るの
である。道は遠きに求むるには及ばぬ、人々脚下を照顧すべきである。

宗教的修養

一 應病與藥

吾等の教主大聖釋尊は大醫王である、丁度醫者が私共を診察して其の病に應じて藥を與へ

るやうに、佛様は私共の心病に應じて法藥を御惠與下されるのである。昔から俗に四百四病と云ふが今日では何千と云ふ病名が殖えたのである、病氣も數多くある中で、貧ほど辛い病はないといふが、今は其の事は倍て措いて、肉體には肉體の病あり、精神には精神の病がある。丁度藤蔓を剪つた時に汁が出ると同じく、肉體と云ひ精神と云ひ共に病の容物である。一口に身位には四百四病と云ふが、心には八萬四千の煩惱と云ふ病があると佛様はお説きになつて居る。佛様は私共の心の中の病を一々御療治下さるのである。

八萬四千の心病も、其の根本は貪、瞋、痴の三毒に外ならぬので、此の貪とは貪ること、瞋は瞋ること、痴は愚痴である、此の三毒が根を成して八萬四千の心病が生ずるのであるが、これも一つの心に外ならぬのである。誰でも怨の無い者はないけれども、同じ怨と云ふ中にも私共の怨と佛様の怨とは違ふので、佛様は大怨、私共は我怨、小怨である、佛様の大怨は、私共お互の迷苦を餘さず漏らさず救ふといふ大誓願の怨である。かういふ怨ならば結構であるが、私共お互の怨は實に小さい衣食住の満足を得んが爲めの怨で、彼れでも足らん此れ

でも足らんといふ吾身の物慾なのである。我が目的の爲めの怨、即ち善道の爲めの怨ならば結構であるが、我利我利亡者の阿怨であるから甚だ困つたもの、しかし私共の心は善道にもなり易ければ、惡道にも染り易いもので、丁度白糸の如く赤くも染れば又黒くも染り、善道にも惡道にも染るのである。又白紙の如く筆の動き方によつて何とでも染るものであるが、動もすると悪い方に染まり易い。これが修養の第一歩で、善い方へ進むと云ふのが吾々の本性なのである。故に佛様は八萬四千通りもある煩惱妄想の流行病を一々御診察下されて、それ相應な藥を與へらるゝに因つて佛を大醫王と云ふ。應病與藥隨應變は佛の本懷なのである。

二 運命と自覺

それで納は今諸子に如何なる信仰を以て居らるか、まづ夫れを前に聞きたいものである。何人でも恐ろしいとか、寂しいとか云ふことがあるであらう。又佛とか神とか、運命が怎う

の因縁が斯うのと、何か據る所があるであらう。人間の力とか人間の業とか云ふものは程度のあるもので、如何に腕力を揮つたからとて、如何に智慧を絞つたからとて、高が人間位であつて、神様や佛様の力には到底及ばぬのである。偕て斯様に申して見ると、各自の面が違ふやうに又その氣性も多少異なるであらう、又各自が別々の家に育てられたからには、神道もあれば耶蘇教もあると云ふ風に、信奉する宗教も種々異なるであらうし。同じ佛教を信仰するにして、甲は禪家、乙は淨土宗、丙は日蓮宗と云ふやうに別々であらうが、兎に角、拜むとか信心をするとか云ふことは、誰しもすることと信じて居る。亞弗利加などの極く野蠻な土地に行つても、又臺灣の生蕃地に行つても皆宗教的精神と云ふものは、必ず具して居るのである。唯だ其れに高低の差があるのみで、誰でも人間は自分の到底及ばぬ力が何處かに潜んで居る。それが心理的起源を爲して、何等かの宗教が其間に生ずるのである。此の點から云へば先天的の力とか、運命とか云ふものを心の中に持つて居る。多くの人は不幸な時とか逆境に陥つた時には、所謂仆れた時に杖を拾ふが如く自覺するのである、自ら呼び醒すの

である。神と人、佛と衆生と云ふ風に、妙に力が共通して居る、されど私共は種々の病によつて眞に實の我を忘れて居る。本來具へて居る宗教心が隠れて居る故に、如何なる小供でも未開人種でも、何か事に觸れ感じた時に宗教的意識を惹起するのである。是れは佛様や神様が教へたのではなく先天的にチャンと具つて居るのであるから、祖先を祭らねばならぬ、親を大切にせねばならぬと頭に刻み込まれて居る。親を大切にし又その親を大切に先祖代々を大切にす、其の先祖は神様である。佛様から是れを云へば佛様である。左様すれば祖先なり神なり佛なりを信ずるのは當然である。吾々本來は不生不滅と云つて、素々生死に干らない永遠のものである。生れもせねば死にもせぬ、色香を常に變へない無始無終な生命である。更に之を言ひ換へると、阿彌陀と云ふことでも、阿彌陀と云ふことは無量壽と譯して、無限的生命と云ふことである、それで今、阿彌陀とは無量壽即ち不生不滅と云ふ眞理の異名に外ならないといふことが分る。

三六度滿行

吾々お互の命は昔時から「人生五十年七十古來稀なり」とあるが、今我々が此の不生不滅の眞理を直覺すれば、取りも直さず、人々が阿彌陀になる。己身の彌陀、唯心の淨土とは即ち此の謂である。空間的に阿彌陀を感受する如く、亦時間的に無量壽を獲得する。此處に人の心の光が無碍光如來と現はれるのである。時と所との上からは種々と名前が違ふ。私共の心は常に其の感謝の念が不斷相續して居るの故に、世の爲め人の爲めと云ふ清淨な心が湧いて來るのである。菩薩は六度を以て乗と爲すといふ、六度とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つを謂ふのであるが、第一の布施とは人に施すことで、これに財施と法施との二つがある、即ち物質の施と精神の施である。第二の持戒とは三聚淨戒、十重禁戒、四十八輕戒、二百五十戒、又は三千威儀戒、八萬細行など種々あるが、たとひ在家にあれば出家にあれば、必ず守るべき規律である。其の戒法を能く持つことを持沙の徳と云ふ。第三の忍辱と

は所謂忍耐のことで、何事にも打克つこと、即ち忍び難きを能く忍び、行ひ難きを能く行ずることである。第四の精進とは勇猛精進など申して、努力すること精進すること、俗に謂ふ魚肉を食へ無いと云ふ意味もあるが夫れ以上に骨を惜しませ能く働くことである。主人が見て居ようが居まいが、自分の行ふべき事を實行することである。第五の禪定とは坐禪のこと、氣を落ち付けて何事にも愉快せず、事に觸れ機に乗じて爲すべき事をキチンと行ふことである。第六の智慧とは般若とも云うて、世間出世間一切の智慧を云ふのである。特に出世間の智慧はこれを佛智見とか、摩訶般若の智慧とか云ふが、兎に角斯う云ふ工合に何事も皆根底のあることである。

四極樂淨土

先に言うた無碍光如來とは、唯だ見方に由つて違ふのであるが、識者以外の人には解し兼ねる故に、西方に阿彌陀如來が淨土を莊嚴して見ると信じさすので「智者も學者も往生せ

す、たゞ能く信するものこそ往生す」と蓮如上人のお文にも示されてある。實は阿彌陀様は西方ばかりで無く、東にもあれば北にも南にもある、東西南北いづれにもある。されば蓮如上人も或時には、

極樂は西や東に無けれども

來た道さがせみんな身にあり

と詠まれた。前にも申した無量壽如來は、全世界に光明を照らして見えるから光明遍照十方世界である。彌陀を念する者は皆極樂へ往生するから念佛衆生攝取不捨と申されてゐる。又「一心一向に佛たすけ給へと申さん衆生は、縦ひ罪業は深重なりと雖も彌陀如來は救ひましますべし、これ即ち第十八願の念佛往生の誓願の心なり」と示されてあるから、皆さんは西に向つても東に坐つても、我が胸の中の阿彌陀如來を忘れてはならぬ。此の心の光りある無碍光如來を他の爲めに忘れる様であつてはならぬ。主人が留守だから番頭が見て居ないから一寸と云ふ様な陰陽の行ひをすることに成る、故に暫らくも心の彌陀如來を取り逃してはな

らのである。

五 悟りと生活

斯様に説き來り、信じて疑ひが晴れて見れば、今迄は不平や不足の念が満ち充ちて居つたのが、此の吾々の心の光に照らされて、聊かも愚痴の念が生じなくなり、唯だ有難いと云ふ感謝の念から何事も喜んで働けるのである。此時に心機一轉して心の阿彌陀如來、心の釋迦牟尼如來を拜むに至るのである。これが即ち眞の信仰である。斯うして宗教心を養はねばならぬのである。大聖釋迦牟尼如來は、十二月八日明星の光を見て、豁然として大悟せられ、

「有情非情同時成道」

と獅子吼せられた。即ち今私が悟つたばかりで無く、大地も衆生も皆悟つて居たのである。迷つて暗きより暗きに入つて居るもので無いと叫ばれたのである。古人は桃の花を親て悟り或は東司にあつて悟つたとある。諸子がお茶を喫む時、お掃除をする時、此の有難いと云ふ

心の光が現はれて居れば、何事でも不足の念は無く、四六時中幸福に暮せるのである。又この力に因つて一度轉迷開悟しならば、唯だ驀直に眞面目に働いて行けるのである。又眞面目に働く所に祿其の中に在りて、自然と身に餘裕がついて來るのである。古人は「樂は苦の種、苦は樂の種」と申されたが、唯だ聞いたり見たりでは何にもならぬ、實際に自分に味はつて見なければならぬ。昨日までは小供であつたのが今日は早や娘さんであり、明日は早や子供を抱へて母となり、而して遂には冥途の旅路となるのである。斯様に月日は流れて水の如く矢よりも速き光陰であれば、一時でも早く先程から云ふ信心をせねばならぬのである。兎に角にも之を質せば釋迦も彌陀も一佛乗なので、種々と聞く相手によりて違ふのであるが、禪宗ではお釋迦様が御本尊である。此の信心の行者は一年経れば經るほど經驗を得、二年過ぐれば過ぐる程心が擴くなる。乃至二十年三十年には、立派なことは口に説けなくとも、立派な行ひの人となりて口以上の力を得ることが出来るのである。

六心の鏡

よく昔から、女人に就いて「色の白きは七難隠す」と申して、鼻が少しは低くとも口が少しは大きくとも、色が白ければ美人化する、是れと同じく容貌は少し醜くとも、心の美なるによりて美人と謂ふことが出来る。私が若い娘を見て、あゝ美しいと思ふ時もあるが、又あゝ厭だと思ふ時もある。同じお茶を出されるにもツンとして出したり、厭々出されるのと、心から深々に禮儀を重んじて出されるとは能く解る。たとへ深切を造つた者でも、肝要な心の深切でなければ何にもならぬものである。實に心の鏡は靈妙なものである。一點でも宗教心のあるもの信仰のある者ならば、悉く形の上に現はれて來るのである。私は宗教と申したからとて佛教ばかりで無い、耶穌教でもかまはぬ、兎に角人々が本来具へて居る佛心即ち誠心、この誠の心は天地神明にも通するのである。畏くも明治天皇におかせられては御製に、

さしのぼる朝日の如くさわやかに

持たまほしきは心なりけり

とある、旭の如き淨き光の心を以て成さば、何事でも成就するものである。心願が稱ふのである。此の人々の具へて居る心の光りを以て、世の中を照して行くのである。世の中には暗い方には此の光を昧まして居る人が澤山ある。暗い方のみならず明るい方にも却々あるものである。されば惡鬼の如き汚れた心は、如何なる文明國でも常に満たされて居る。況んや野蠻國には尙更のことである。併し乍ら衲が前程から申す處の心の光は如何なる人にも具はつて居るものであること丈は自覺せねばならぬのである。

昔時、或人が暗い座敷を燭火も無しで掃除をした。所が幾ら掃除したからとて燭火も無いことなれば、隅が怎うしても奇麗にならなかつたと云ふことである。此の時も燭火を以て掃く時は奇麗になる如く、もしや一家庭なり一部落に於て上の御製の如く、旭の如く輝ける清淨の心を以て照らしたならば、十人は十人百人は百人ながら光と光とが照し合つて、實に愉快な神聖な生活が出来るであらう。若し清淨無垢な玉であつたならば、隅から隅まで照すで

あらう。帝釋天の網羅堂は向ふの光が此方へ入り、此方の光が彼方に入る。經には「入我が入」と説いてあるが、實に麗しいではないか。此の心を持つた人々であれば、立派な家庭を造ることも出来れば、又釋迦や孔子やと云ふ様な偉い方を理想として修養することが出来るのである。古歌に、

雲晴れて後の光と思ふなよ

もとより空にありあけの月

と、寔に尤もである、若し此の心があれば、縦ひ下女であらうと下男であらうと、小僧であらうと番頭であらうと、位こそ低い立派な人である。

七 誠實の力

如何に才があるが頓智であらうが、此の誠の心佛の心が無ければ何にも成らないのである。若し外交官でもあれば、權謀術策と云ふこともあるが、此れとても誠心を缺いては

永久的の術策にはならぬのである。誠の心正直な人に成功がある。成功の秘訣は皆正直が根本である。宗教的精神が基礎である。濡れ手で粟を握み、棚から牡丹餅を受けるが如く思ふたからとて何の所詮も無い。此頃は株式で何萬儲けたと言つて居る人が、一夜の間に何萬といふ負債をして、今までは大盡風を吹かして居たのが急に身の置き場に窮したと云ふこともある。遅い様で早いのが牛であり、疾い様で遅いのが馬である。古人が、

遅くとも春は來にけり牛の年

と、斯う云ふ風にやれば順序よく知らず／＼の間に立身出世をするのである。若し自分一代で成就せなくとも子々孫々の代には堅固な基礎を造りあげる事が出来る。されば何事でも正直に行かねばならぬ。彼の森蘭丸は織田信長公の小姓を勤めて、一世の忠心を後世に傳へたが、未だ幼時の頃に主人信長公の厠に行きし間に側に侍りし蘭丸が小供ながらの意屈しの際に、預りし主人の名刀の鞘にある散らし菊の數を數へ置いた。信長公ある時大勢の小姓を集めて「此の刀の鐔の小菊の數は幾つありや、若し數の答を當てし者には此の刀を遣はさう」

と言はれた。すると多くの小姓共は「我れこそ彼の名刀を拜受せんもの」と思ひ／＼に答を述べた中に、獨り彼の蘭丸のみは黙して語らなかつたので、信長公は「これ蘭丸、汝のみ何故に答へぬか」と質問されたので、蘭丸は「私は先日御上様が厠に行かれし際、何心なく既に數へて承知して居ります。今申し上げれば知りしを知らざる顔にて申し上げることゝなるが故に、お答へせず居りましたと答へた。

信長公は蘭丸の正直なるに感じて、終に其の刀を蘭丸に下されたとある。後日蘭丸は重用ひられたが、果せる哉、信長公が本能寺に於て逆臣の爲めに弑せらるゝに及んで、主人の爲めに働き、最後まで主人の側にあつて自殺せられたが、實に美談と申すべきである。古語に「正直の頭に神宿る」と申されてあるが、實に正直にして初めて人の價値があるのである。今各自は主人となり、番頭となり、女中となつては居るが、此の正直と云ひ至誠心と云ひ信仰と云ひ一つの大きいなる力を持つて、世の中に處して行つたならば、事として成功せぬものはあるまい。どうか此の宗教的信仰を以て世の中に立ち、自らを益すると同時に他を益し、

協力一致、以つて實踐實行せられんことを切望して止まぬのである。

人生の意義

一 利益幸福以外

吾々人間は抑も何處から生れて来て、現在如何なる意味ある仕事をして居るか、そして壽命が盡きたらどうなるかと云ふ事を考へなければ、人生の意味は徹底しない。併し之は人生の一大問題であつて、到底筆舌を以て究明すべからざる事であるが、兎に角人間が此世へ生れたのはどう云ふ意味であらうか、多くの人は利益幸福を求めると云ふが、成程夫も一應尤もの事ではある。併し幸福を求め利益を追ふばかりで、それで人生の事足りると云ふ事は出来ぬ。勿論人間の生活上衣食住の三は最も必要なものである。換言すれば生活を段々高めて行かうと云ふのは人情である。けれども生活の爲めに働いて居る者は單に人間

ばかりではない。動物にも此の慾望がある、植物にも生存の慾望がある。人間が生れて来て、唯だ利益幸福を求めると云ふばかりでは凡ての生物と何の變つた事がない。夫を考へなければならぬのである。

二 人間の本分

吾人は食はんがために生れて来たのであらうか、働く爲めであらうか、斯る事を學問的に追究すれば中々の大問題である。けれども學問的ならずとも、お互に考へて置かねばならぬ事柄である。考がなければ人間は食はんがために生存すると云ふ人もあらう、衣る爲め樂をする爲めと云ふ人もあらう、けれども何故に食はねばならぬか、夫は分らぬ。食つてもある時期が當來すれば死んで了はねばならぬ。食はんが爲めに働いて、歩々死に近づくは人生の矛盾ではあるまいか。

食はんがために働くのではない、働くために食ふのである。これは同じ様ではあるが大

いに其の意味の異なる事を會得せねばならぬ。然らば何故に働くかと云ふに、此心の作用と云ひ、身體の組織と云ひ、何れも働くべく出来て居る。獨り人間のみならず、宇宙間の一切萬物悉く働きを持続して居る。併も萬物の靈長たる人間に於ては食ふ爲めに生れて來たのではなくして働く爲めに生れて來たと云ふ事が著しく顯はれて居る。されば吾々が精進不退の信念に住して活動するのは天職であると思はねばならぬ。

三 精進努力の信念

精進とは精しく進む、奮闘する事、努力する事である。抑も我々が生物界に優越な位置を占めて居るといふのは、此の努力といふ生命があるからで、若し是れが無かつたら我々の種族が夙の昔に絶えて了つて居る。これを人間社會の上で見ても、努力奮闘して絶えず働く人が成功する。常に堅實に働いて止まぬ人が優勝の位置を占める。是れが自然の理であつて、大は天地より小は生物の細胞に至るまで、皆此の法則を以て進んで居るものであつて、我々

が今眼を擧げて天體を仰げば、太陽を中心とせる幾多の遊星——我々の棲息してゐる地球も其の一つである——が、次から次へと軌道を傳うて、朝から晩まで、晩から朝まで、日夜不斷に廻轉してゐる。また我々が住んで居る此の地球は動かさること大地の如しなど言つて安閑としてゐるやうであるが、實は今言ふ通り太陽系の一遊星として絶えず廻轉してゐるのであつて、山とか川とか家とか樹とか、其外一切の生物無生物を身體の上に載せて重たいとも何とも云はずにクル／＼と廻轉してゐる。其の邊に轉がつて居る一塊の石コロを調べて見ても、我々の眼には只だ凝乎として居るやうに見えるが、併しこれでも安閑として轉がつて居るのでなく、絶えず地球の中心に向つて喰ひ入らうと努力してゐるのである。其外樹木を見ても、水を見ても、草花を見ても、雲を見ても、電を見ても、宇宙間にありとあらゆる物悉く物その物の本體として何物か、安閑と底止して居るものがあらう。底止して居るやうに見えるのは我々の眼の届かぬからで、精しく學問の眼で調べて見れば引力、電力、物體動、極微分子動と、あらゆる形の下に動いて居る。翻つて此の活動の天地の中に棲息して居る我

我はと見れば、我々の肉體を組成して居る細胞は絶えず動き絶えず新陳代謝して居る。我々の血管には血液が充滿して矢よりも早く循環して居る。肉體既に然るが如く、此の精神も亦前滅後生して絶えず動いて居るといふ事は少しく内省して見れば直ぐに分る。

四 生存の意義

斯様に天地の物悉く常に外界に向つて努力し、奮闘し、活動して居る以上、人も亦自然界の一員として、絶えず活動せねばならぬ。これが出来なくなれば既う其人は自然界、人間界から死滅したのであつて到底生存が出来ぬ。さればとて唯だ活動、努力と云うても、其者の活動が無暗な活動であり、努力が盲動であつては何の役にも立たぬ。これに自ら法則といふものが伴はねばならぬ。遊星が常に變らぬ軌道を廻れるが如く水が低きに流れるが如く、草木が幹を伸ばすと共に根を張るが如く、各々自然の法則に従つて精一杯活動する。これが即ち精進「精しく進む」で、人間はどこまでも此奮闘努力といふ精神が缺けてはならぬ。之

を人體に譬へて謂はゞ即ち體を支へる中心であり、腰であるから、若し努力するところの無き人は腰なき人の如くその人生は無意味と謂はねばならぬ。

五 伽跋陀の話

此間は或る書物を読んだところが、かういふ話が出てゐた。何かの参考にもならうから此處へ陳べよう。天竺の笠叉尸羅といふ國に伽跋陀といふ人があつて、それが元は大變金持であつたのであるが、内外の事情に由つて次第に零落れて裸一貫になつた。さうするところまでは種々の人が出て来て門前に車馬の市を爲すといふ有様であつたのが、俄かに門前雀糞を掛けるといふ有様で誰一人として訪うて呉れる人もない。そこで伽跋陀が大いに憤慨して、これはどうしても一奮發せねばならぬ。かういふ不幸に遭遇した時には、人を頼みとしてゐてはならぬ。どうしても自ら自己の運命を開拓せねばならぬと、遂に支那の方面へ出稼をして額に汗して致々と働いた結果、十年後には金銀財寶を山の如く儲け得た。そこで其の

寶を何十頭といふ駱駝の背に積み、同輩と語らうて隊商を組んで遙かに故郷へ歸つて來た。すると故郷の人達は、伽跋陀は何處かへ往つて多分既に死んで居るだらうと思つて居たのに、斯ういふ噂を聞いたものであるから、それからそれへと傳はつて、村中の人や親戚の者が、打揃うて出迎へに行つた。やがて伽跋陀の一隊は勢ひよく歸つて來た。そこで親族の者が、一隊の眞先にあつて一人の男を捉へて「伽跋陀殿はいづれに御坐るか」と聞いた。さうすると其男が「ア伽跋陀殿か、それはあの駱駝の背に乗つて居る」といふ。人々も何分長い間顔を合せないので悉く皆忘れて居る。其一行の通り過ぎるのを眺めて、あれか／＼と駱駝の脊を眺めても、荷物ばかりで伽跋陀は居らぬ。一體何處に居るのかと聞いて見ると「ナニ伽跋陀殿ならお前さん方が先刻話した人だ」といふ。おや／＼あれが伽跋陀か、何故變な事を云うたのであらうかと、一同の者が駈け着けて「お前さんが伽跋陀殿ではないか」といふと其男が「イヤそれは人違ひであらう。お前さん達が迎へに來て居る伽跋陀は生きた人間でなくて、あの駱駝の脊に積んである財産だらう」と云うたといふ話である。

物ある時には持て囃し、貧乏したら對手にせぬ。成功して歸れば歡迎するのが世の常である。伽跋陀はそれを誡めたのであらう。迎へに出た人達は定めし赤面した事であらう。伽跋陀はさぞ愉快な事であつたであらう。これは唯一場の話に過ぎぬが、斯う云ふやうな有様で精進即ち精しく進むといふ事は、藥鐵的に一時に熱くなつて、一時に冷めるのと反對に、恰も大象の水を渉るかの如く、眞摯に着實に努力するの謂である。さういふ様にして進み行けば一步は一步より近づいて、水の滴、微なりと雖も漸く大器に滿つるが如く、又雨滴の石を穿つが如く何事か成就せぬ者があらうぞ。

拔苦與樂

一 煩悶の心理

老衲の處に接心をさせて欲しいとか、參禪したいとかいうて來るものも大分ある。口には

煩悶があるからと明らかに發表して來ぬが、斯る殊勝な心を起すやうになつた源を尋ねると、大抵は皆胸の中に言ふに言はれぬ煩悶があつて、よく／＼苦しいからの事であらう。何とかして此の煩悶を解いて欲しいと思ふ精神が、參禪、接心の希望となるのである。煩悶にも色々あらうが、一言に概括して謂へば、自由を欲して得られないと云ふ事が、即ち煩悶の源になる。人は誰でも自由を欲するものである。これが人の心の自然であらうから、無理もない事である。シヨウベンハウエルなども、意志の發露を障碍せらるゝのが苦痛であるというて居るが、つまり自由を望んで得られないのが煩悶の苦みになるのである。

二 家庭に於ける煩悶

人に最も近い社會は家庭である。この最も近くして、小さい社會の家庭に於てすら、人は自由を得られぬものである。青年は先づ第一に家庭と稱せらるゝ小社會で、自分の欲する自由が得られず、親が自分の思ふ通りにして呉れぬ。兄弟が自分の思ふ如くにならぬといふ

で煩悶する、これは青年の家庭に於ける煩悶であるが、子女が自分の思ふやうにならぬといふので煩悶する親もあれば、また妻が私の意の如くならぬとて煩悶する夫もあり、弟が自分のまゝにならぬとて煩悶する兄もある。

小さな社會の家庭だからとて、何事も自分の思ひ通りには行かず、自分の欲する自由は到底得られるもので無い。況んや、世間といふ大きな社會に乗り出せば到底も自分の思ふ通りになるものではなく、不足不自由ばかりぢやから、煩悶するのも當然である。

三 努力上の煩悶

それでも獨身生活のうちには、同じ煩悶でも其の煩悶は痛切でないが、妻子があるやうにでもなれば、生活の壓迫は我が欲する自由を一層碍けられて、煩悶も一段と痛切なものになる。斯く煩悶する者に對して、努力しろ、然らば煩悶は自ら去るものだ、などと能く世間の人は無難作に言つてしまふが、煩悶するほどの人は他より叱りつけるまでもなく、業に己に

能ふだけの努力を致して居るのである。如何に努力しても苦しい、この苦みが切り抜かれぬといふので煩悶するのである。之に猶ほ一段の努力を強ひて見たところで、煩悶を切り抜け得られさうな筈はない。努力しても努力しても苦みを切り抜けられぬとなれば、たゞ徒らに煩悶を重ねるまでのことである。

四 内 賊 外 賊

王陽明の語に「見聞覚知は外賊なり、情慾意識は内賊なり、只能く主人公惶々不昧にして、獨り中堂に坐する時は、即ち賊化して家人となる」といふのがある。老衲は禪僧であるから、王陽明の言の如く、飽まで自主的の心により、心中の賊を化して家人と成し、煩悶より解脱せねばならぬものであると説きたいのだが、併しこれは誰に説いて聴かしても直ぐ解るといふ煩悶解決法では無い。

老衲も、普通一般の人々が煩悶して苦んで居ると聞けば、人力で如何ともする能はざる處

に達したら、その上は神を信じ佛を信じて之に任せよ。さすればよきやうになるものであると説いて聴かすのであるが、神と謂つても佛と謂つても、それは決して自分の外にあるものではない。皆な内に省みれば、自分の心の上にある。達磨大師の語に「直指人心見性成佛」といふのは此間の消息である。

五 神 佛 を 頼 る 心

或は天と謂ひ、或は神と謂ひ、或は佛といふも、皆一つであるが、實に大きいもので、宇宙に瀰漫して居るから、その全體を見ようとしても見られるものでない。併し、龍の爪や頭が雲間からチラリ／＼見える處の畫にあるやうに、天と謂ひ神と謂ひ佛といふものゝ小さな一部分だけは、内に省みさへすれば、心の中にチラリ／＼顯れて居るから、必ず之を認めることの出来るものである。このチラリ／＼見えるものは、良心と名づけられ、まだ良知とも良能とも名づけられてあるが、一たび之を認めたならば、暗夜に光を認めたものが其の有る

か無きかに見える燈の光を辿つて道を進んで行く様に、この良心の光を辿つて次へ次へと進んで行きさへすれば宜いのである。末には天或は神或は佛の全體を認め得られて坦々として長安に通ずる大道に出られる事になる。努力の及ばざる所は天に任せよ、神に任せよ、佛に任せよと云ふは、我心の中に潜む良心良知良能に任せよとの意である。

六 一道の光明

常識と云ふものが何であるかを詳細に論じようとするれば、心理學上の大問題にならうかも知れぬが、苟も二十歳位に成長した者の、其の年頃になるまでに養はれて来た意識は、或る特殊の病的心理状態にあらざる限り、總て之を常識と見て差支のないものである。此の常識のうちには、如何なる迷ひの多い者にも、此の良心の光が微かながら必ずある。良い家庭に育ち、適順の境遇に人となつたものは、此の光が殊に明瞭に顯はれて居る。故に一たび内に省みれば、之を認めるもの容易であるが、悪い家庭に育ち、逆境に人となつた者は、此光

が誠に微かなものである。故に内に省みても之を認めるに骨も折れるが、「疚しい」とか何とかいふ情感になつて、假令小さな星の如くにしろ、必ず心の中に光つてゐるものである。一旦微かでも一道の光を認めたら、一つの星を認めれば、他の星を順次に認め得られるやうに、天の全體を認め、神や佛の全體を認められることにもなる。萬事を之に任せて、世の中に處しさへすれば、不自由を苦痛とも感ぜずに済み、煩悶の跡方も無くなるものである。

七 良心と獸性との戦ひ

世の中の事は、この良心と良心を叩き潰さうとする獸性との戦ひである。キッドといふ人は、博愛と利己との争ひが社會の進化であるというたが、意味は同じことである。

戦ひは強いものが必ず勝つ、良心が強ければ良心が勝ち、獸性が強ければ獸性が勝つ、人には皆良心もあるが又獸性もある。或る意味から謂へば人は皆半獸である。されば良心に勝たうとする獸性も強ち捨つべきものではない。之を良心によつて善導しさへすれば、仕事を

するのは此の獸性である。王陽明が主人公愼々不昧にして獨り中堂に坐する時は、賊即ち化して家人となると謂つたのは、獸性も之を良心によつて善導すれば大きな仕事をするやうになるものだといふ意味である。

八 修養の必要

趙州と云ふ人の語に「汝等諸人は十二時中に使得せられ、我は十二時中を使ひ得たり」といふのである。大概の人が時間を使はずに時間に使はれて苦むやうに、良心が獸性を使はず獸性に良心が使はれるので、煩悶もしたり、悪事を行つたりするやうにも成るのである。良心で獸性を善導し、之を使つて行かうとするには、良心を強くせねばならぬ。その爲めには家庭を善くして子女を育てるのも大事であるが、又微かに心の中に認めた光を辿つて、大きな光を認め、良心を大きくすることも必要である。これが即ち修養といふものである。世の中の面白味は良心を大きくして之を強くし、獸性に勝ち之を使つて仕事をして行く處にある。

これが社會の進化といふものである。社會の進化は、他に力があつて之を運用して行くといふものでなく、皆な各自の胸三寸から起ることである。各自が微かになりとも認め得た良心の光にて、大きくすることを工夫しないで暮らせば、百年待つても世の中は昔と同じことであらう。

自己の立脚地

一 法を聽かんとする者

「法を聽く者は心を空うして當に渴する者の飲を欲するが如くすべし」とあるが、衲は元來辯舌を以て人に對すると云ふ事は、決して自分の本領でない。併し乍ら唯だ自分が年來信じ來つた事を、人に向つて講述が出来ぬと云ふ事はない筈であると固く信じて居る。言ふ所の事は誠に未熟であるけれども、信する事に至つては敢て人後に落ちぬと自ら許して居る。

故に衲は常に自分の腹に思ふが儘を申して居る積りである。道を述べる上に於ては決して何の斟酌も持つて居ない。例へば茲に何う云ふ貧窮な人があつても、又は何う云ふ富豪があつても、地位があつても學問があつても、それは眼中に措かずして、唯だ當人の心と我が心と、即ち双方の心とが親しく接觸したならば、其處に大いに味ふべきことが自然に出て來るのであらうと信するのである。

前に擧げし語は、別段に解釋する程のむづかしい語ではないが、矢張り我が經典の中にある語で「法を聽く者は心を空うして當に渴する者の飲を欲するが如くすべし」苟も道を聽かうと云ふ志を起した時には、先づ心を空うする、常にお互に使うて居る言葉の虚心平氣、自分の心を全く開け放して極く奇麗に掃除して何の蟠りも無いやうにして、さうして其の道をも求むる心の急にして切なる有様は恰も渴する者の飲を欲するが如くでなければならぬ。吾々が喉の渴かぬ時には餘り飲み物を欲しない、所謂美食飽人の喫に當らずで、腹の満ちて居る時は、どんな美味の御馳走でも餘り要求しないのである。けれども眞に渴いた時には其の

水を選ばぬ筈である。餓ゑたる人は食を撰ばぬと云ふくらゐ、急にして切なる心を以て道を求めよ。是は佛が或時弟子達に御話になつた語である。故に私が思ふに、現代我國の人々は皆立派な教育を受けても居らうし、又色々の素養もあらうけれども、道を求むる時には一切の物を忘れ、自分の身に着いてあるものを總て打忘れて、唯々求むる所は道であると、かういふ心持ちで、即ち平心坦懷にして宗教の門に入らねばならぬのである。

二 器に應じての説法

斯様な事を申すと、種々經典の聯想を喚び起すが、或時佛がさう云ふ場合に、倒器、覆器、穢器と云ふ事を云はれた。倒器とは字の通り倒れて居る器、穢器とは汚れたる器、覆器とは蓋をしてある器、則ち吾々を器物に喩へて言はれたので、一本の徳利でもさうである。若し是が倒れて居るのに中へ酒を注ぎ込まうとしても、それは出來ない。同時に穢れたる器、塵埃だらけの汚い器の中へは、矢張り清き水や、うまい酒を注ぐ事が出來ぬ、又覆器で丁度

釜のやうに、蓋がしてあつては中へ何物をも入れる事は出来ぬと、かういふ喩を以て弟子に諭された。我が學問であるとか、我が理窟であるとか、我が財産であるとか、地位であるとか名譽であるとか、又は我は斯ふ云ふ貧窮な者であるとか、我は斯う云ふ數にも入らぬ者であるとか云うて自分自ら我が心に蓋をして居る様な場合が多いさういふ器には大なる法の水を盛る事も出来ない。故にさう云ふ穢れたるものは悉つかり清めて、其の蓋を取り去り、倒れて居るものは之を起して、而して始めて法を求めなければならぬ。斯う云ふ事を言うて居るが、誠に私共に取つては有難い教訓であると思ふ。

尙又一言申して置きたいのは、私の説は矢張り佛教の經典、又佛教に於て自分が修し得たる所のものを述ぶるに外ならぬけれども、しかしながら諸子をして皆悉く佛教信者たらしめねばならぬと云ふ意味で御話をするのではない。佛教を初め儒教、儒教も一種の宗教と見て、儒教で無くてはならぬとか、其他耶蘇教でも、マホメット教でも皆さうである。

三 宗教心の發路

今迄歴史的に此の世界に出来上つて居る幾多の宗教があるが、其何等かの一つの宗教、其道の中へ入つて仕舞はねば人でないと、斯様な意味は柄は少しも持つて居らぬ。併しさうは言うたけれども、又柄は、何處迄も人間は宗教的精神と云ふものを持つて居らなければならぬと思ふ。斯う言ふと或は一寸意味が通ぜぬかも知れぬが、今世界に成立してある何れの宗教に依らずとも、自分自身、本來持ち得來つて居る其の宗教的精神、即ち偽らざる所の誠心、斯う云ふものゝ土臺の上には、我も人も誰も彼も是非とも立たねばならぬと信するのである。斯う云ふ意味の事は經文にも澤山あるが、又歐米の學者識者等もさういふ事を言うて居る。彼の獨逸のゲーテの語に「我宗教は何かたのお尋ねか、それは汝が名指し得べき宗教の何れにも非ず。さらば汝は又何の故に斯く我は無宗教なりやと問はゞ吾即ち答へて、唯我が宗教の爲めと言はん」と是れが原語で見ると餘程面白く書いてあるらしい。けれども、先づ意味

だけを言うて見ると斯うである。耶蘇教も信ぜぬ、佛敎も信ぜぬ、何にも信ぜぬと云ふならば、世に所謂誠に單純淺薄なる無宗教者かと云ふのに然うで無い。我は最も熱烈なる信仰を有つて居る信者である我は吾宗教を信する云ふのであつて、是は大いに味ふべき事であらうと思ふ。故に今衲が諸子にお話するのも、外から無理無體に強ひたり、又は之を注入したりすべき筈のもので無い。注入と云ふと耳觸りかも知れませぬが、或場合には已むを得ず御勸めも爲ねば成らぬけれども、極々の眞髓、總ての作り飾りを一切取り除いで仕舞うて云ふならば、元來當人自身が已に持ち來つて居るのである。銘々に立派な寶を有つて生れて居るのである。だから決して外から持つて來て何う斯うと、指一本も差すべき餘地は無いのである。「唯だ我は我が宗教の爲めに」とゲーテの申したのは誠に面白い。

四 傳大士と道儒佛

又昔唐土で、梁の武帝時代に現れた偉人の一人であるが、傳大士と云ふ人がある。之が又

大分面白い。傳大士と云ふ人は何時でも道冠儒履佛袈裟、道冠とは御存知の通り支那に行はれて居る道敎の冠りで、儒履は儒者の穿く履、佛袈裟とは佛敎僧侶の着けて居る袈裟である。形から云ふと頗る妙な風で、假裝行列にでも出掛ける人か、或は少し精神に異常でも有るのでは無いかと思ふかも知れぬ位であるが、其實決して然う云ふ譯では無い、極く眞面目で、而も立派な見識を以て、常に道冠と儒履と佛袈裟とを身に纏うて居る。人あり來つて、こなたは佛敎を信じて居る人かと尋ねると、別に長々しき説明もせず、只指を上げて被つて居る冠を指す。然らばお前は道敎を信するかと云ふと、直に又指を下げて穿いて居る儒履を指す。それならお前は儒敎信者であるかと云ふと、又直に佛袈裟を指す。然らば何の信者であるか、それとも何れでも無いかと云ふと、何れでも無いと同時に何れも皆信じて居る。契合一致して居る點から言ふならば、儒敎の道として居る所も、佛敎の道として居る所も、所謂萬法一に歸す、眞理と云ふものがさう幾つも有るべき筈はない、眞の道と云ふものは固より一つものである。斯う云ふ立場からして、其人の履歴から言ふと佛敎信者であるが、それに

も拘らず當に道冠儒履佛袈裟で居つた人である。是は佛教寺院に參詣すると經藏がある、其の經藏に立つて眞正面に祀つてあるのが、矢張り道冠儒履佛袈裟、ちよつと孔子様の像に似て居る、あれが傳大士其士である。さう云ふ工合にして世にも人にも道の何たる事を示されたと云ふ事であるが、此心持は大變柄は面白いと思ふ。

五 道とは何ぞや

世には道とは何であるかと云ふ事を究めずして、初めから名に依つて争うて居る事が多い。佛教信者は無暗に佛教でなくては人間が成佛は出来ぬと云ひ、耶蘇教信者は又耶蘇教でなくては本當の人間にはなれぬと云ふ。耶蘇教家は我を呼んで異端と云うて居り、此方からは又彼を指して偽善であると云うて居る、人間と云ふものは大きい顔をして居るが心は至つて狭いもの。故に我々は成る可く一つ穴の中へ首を突込んで仕舞はぬやうに、一方にばかり偏らぬ様にせねばならぬ。夫には先づ第一に我々が本來具有して居る所の心と云ふものに就て、

篤と研究して見る必要がある。そして其れからソロ／＼と歩を進めて行つたら宜からうと思ふ。昔から能く繪に畫いてあるが、三聖醋を嘗めるの圖と云ふのがある、三人の聖人、それは老子と孔子と釋迦とが、醋の甕の傍らへ立つて、さうして醋に指を染めて、三人が三人ながら妙な顔をして居る。あゝ云ふ事でも、心なく見れば何でも無ささうではあるが、矢張り一の意味が描いてある、三教歸一と云ふやうな趣きが其處にも現はれて居る。

六 如何が満足せん

偕て是から進んで宗教と云ふものに就て段々お話をしてみようと思ふが、假りに茲に斯う云ふ事をお互に考へて見たら如何であらう、我は衣食は足つて居る、即ち充分暖かに衣、飽くまで食ひ、而して安らかに住んで居る。所謂衣食住に就ては何不自由は一つも無いと斯う假定して、さて人間は衣食住にさへ不自由が無ければそれで大安心を致して居る事が出来るか何うか、是は人に尋ねるよりも寧ろ自分自身に考へたら其方が一番早い、どんなもので

あらうぞ。我は衣食住に事足りて居るが、又何ぞ外の足りぬものがありはせまいか、又はそれで宜しいであらうか、どんなものであらかと、斯う云ふ工合に自分自身が自分自身の内容に向つて、次第々々に奥へ〜と尋ねて行くと、自分を標準にして済まないか、何うも人間は唯衣食住に不足は無いから、夫れで人間の能事終れりと云ふ事は何うしても出来悪いであらうと思ふ。況や多少の教育あり、多少の學問あり、經驗ある所の人ならば、それだけに安んじて、所謂醉生夢死、夢みたいに生れて来て夢が醒めた如く死んで仕舞つては、萬物の靈長などと威張つて居る人生の意義は何處にあるか、どうも有るとは思はれない心持がする。

人間は妙なもので、平生は唯うか〜として、目前の利益とか、幸福とか快樂とか、さう云ふものを御互に追ひ廻して居る、併し乍ら其の利益なり幸福なり快樂なりが、果して永久不變のもので有るか何うか、何時迄も其利益なり、快樂なり幸福なりが續くであらうと思つて見ると、今謂ふ物質的の利益幸福、肉體的の快樂幸福等は享けて居るが、それと同時に一面には必ず之に伴ふ所の苦痛が附いて廻つて居る、煩悶と云ふものが必ず伴うて居る、人間

は妙なもので、皆慾と云ふものを持つて居る、若し之を極言するならば、人間は慾の容れ物である。慾の容れ物と云ふ事は、決して悪い意味ばかりでも無い。寧ろ人間は慾が無くてはいけないと云ふ事を、或る場合には佛も言うて居る。其時の慾と云ふ意味は今の心理學者の使ふ言葉で申すと意志の力と云ふ程の意味、意力即ちウキルである、此力が確かで無くてはならぬ。一つ得たならば更に進んで最う一つ得よう、夫れをも得たらば又モウ一つ之を得ようと、一步は一步より進み進んで止まざる其意志的の力を今は慾と云ふのであるが、兎も角も人間は慾の容れ物と云つて差支ない、其の慾の爲めに進みもする、苦みもする、煩悶も起るのである。

七 智的欲求

慾の種類は種々雑多で數限り無いが、大別すれば人間には知識慾と云ふやうなものが先づ最初に起る。それから名利慾、更に煎じ詰めると生存慾と云ふ様なものが出て来る、之を細

かに言へば限りない。知識慾と云ふものは物を知りたいと云ふ慾望で、是は各々方が誠に愛らしい小さい御子達を育て、能くお分りの事であらうと思ふ。子供が少し物心が付いて、赤い物でも是は火であるから直きに觸れては手を焼くといふ程の智慧が出て来た時代、其時代の子供を見て居ると、茶碗を見ると是は何ぞと聞く、又銀瓶を見ると是は何ぞと問ふ。何でも彼でも見る物聞く物毎に一々疑問を發する。それが人間の慾の一番初り、それは土瓶それは銀瓶と云ふと、銀瓶は何うするもの土瓶は何うするもの、其の湯呑は何うするものと、此の何々と云ふことが即ち知識を進めて行く初めである。さういふ工合にして一つが分ると又二つを尋ねる。二つが分ると更に三つ四つと、段々と知識を増進して行くのである。知識慾と云ふものが、人間の中では最も早く出て来るものである。

八 精神上の立脚地

借て幼稚なる時代から少年、青年、壯年と段々齡が進むに従つて、知識慾の範圍も段々廣

まつて来て、大分世の中の事が分つて来る。殊に近來は學校へ行くやうになると、自分が本來有つて居る所の知能と云ふものを、一々其の教授によつて開かれて行くのであるから、次第次第に自分の知識學問の範圍が擴がつて行くが、それと同時に一面には分らぬ事の範圍も亦擴がつて行く。妙なもので人は何も物知らぬ時には、何でも分つたやうな顔をして居る。私共汽車に乗つて旅行をして見ると、恰も農繁の際の如き、御百姓が汗水流して働いて、さて一休みと畦に腰掛けて煙草の一ふくも吸つて居る所を眺めると、如何にも大聖人にも異らぬやうな顔付をして居る。まるで天も地も皆我が懐へ入つたやうな有様で、何一つ知らぬ事は無いやうに見える。けれどもそれが次第々々に理窟を學び、學問を教へられて居ると段々と知識が進んで行く。それと同時に分らぬ事の領分も亦次第々々に擴がつて行く。何も知らぬ時は何も彼も分つたやうな顔をして居るが、少し知り出すと少し知らぬ事が出来る。多く分り出すと多く分らぬ事が出て来る。それ故に學問萬能で押し通し、學問だけで精神的立場を確乎不拔に極めようと思ふ事は却々難かしい。人間が三十年なり五十年なり、或は七十八

十、縱令百まで生きて見ても、宇宙の洪大なる事に比べて見ると實に些細なもので、此の短時間の知識學問で、自分の精神の根本的立場を極めると云ふ事は却々むづかしい。不可能では無いかも知れぬが、決して容易の業はない。

九 利慾と生存慾

兎も角さう云ふので、吾々は慾望を有つて居る。先づ第一が知識慾、其の知識慾が、又利慾となると、自分の名を弘めたい自分の利益を求めたい、利の爲め名の爲めには手段を擇ばぬと云ふやうな人もある。自分が利益さへ得るならば、自分の名譽さへ博するならば、其の爲めには手段を擇ばぬ、どんな事でもする、人が困らうが、少々不義理にならうが、少々は人間の道に外れようが、一向それには頓着ないと云ふ遣り方もある。是は併し餘程下品な遣り方、又利己的な遣り方、あまり手本にする事の出来ぬ遣り方である。其の遣り方は種々あるが、結局人間は名利慾の容れ物と云つて宜しい、知識慾の容れ物と云うても宜しいが、か

ういふ類の慾も詰りは生存慾に歸して仕舞ふ。初めに言うた如く知識學問の慾と云ふ事も何處に歸するかと云へば利益を得たい、名譽を得たいと云ふ事に歸するであらう。是は事實を言うので理窟からでは無い。其の利益を得、名譽を博すと云ふ事も、もう一つ煎じ詰めると生存したい、一日でも永く此の世に長らへたい。即ち生長らへたいと云ふ事に歸するのである。

一〇 永劫の伴侶

それが證據に、今お前の命を取るぞと云ふ時に於ては、人間は何も入らなくなる。今首を刎ねらるゝと云ふ時に成つたら、名譽も要らぬ、利益も要らぬ、地位も要らぬ、學問も要らぬ、財産も要らぬ、生きて居ればこそ種々の慾が起る、色々な物の入用がある、最早命が無いと云ふ時に至つては、總ての慾は皆無くなつて仕舞ふのである。此に至ると人間は餘程正直な處がある。死といふ一字の前に立つては亦裸々になる。平生は色々飾りをつけて居る物

種々に自分を装うて居る物、其物を皆剝取られて仕舞ふ。丸裸になつて仕舞ふやうなもの、之を死の權威とでも云つて置かうか、死の權威と云ふものは實に強い力を持つて居る。佛様の語に「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者也」と仰せられてある。憐し可愛い妻子でも、又許多の財産寶物でも、王位でも——王位とは其一國の王の位であるから、位としては人身の享け得る極み——此位の極たる王位と雖も、命終らんとするに臨む時は隨はざるものなりと書いてある。自分が死んでから妻子の手を取つて行かうと云つても、それは出來得られない事、又此財産を持つて行かうと云つてもそれは出來得られない。此位階肩書を持つて行かうと云つても夫れも出來得られない。臨命終の時には此等のものは何れも皆我に供をして呉れるものは一つも無い、而して眞に伴侶として隨つて行くものは「唯有戒、與施、與不放逸、今世後世爲伴侶」と申されてある。戒とは戒法戒律の事、施は慈善的の事、不放逸とは放逸せざる事、即ち善き行ひを示ふ、今世も後世も何時までも伴侶となる。最も親しい所の我が友達となり、影の形に隨ふが如く附纏うて行く所のものである。

一一 煩問は何れより起るか

先づさつと斯う云ふ様な有様であるが、妙なもので、人間の知識慾があつても知識が得られない、又は名利慾があつても名利が得られない、生存したいと云ふ慾望があつてもそれが得られない、得られないと極つて居るのに人間は安閑として安心して居る事が出来るかと云ふと、決して能う安心しない。得たい物が得られない、欲しいものが手に入らないと云ふ事になると、其處に何が次に起つて来るかと云ふと、種々の疑ひ、種々の苦悶、種々の煩悶と云ふものが自然に生じて来るのである、是はホンに見易い所を僅かに擧げたのである。けれども名利慾や知識慾を抑へて居る人は未だ餘程樂で、俗に謂ふ自分の樂な人である。それから以下を眺めて御覽なさい。柄は學校などへ行つても然う思ふ。父兄が心配して學校へ送つて呉れて、學校で嬉々として物學びをして居る子供を見ると、如何にも幸福なものと思ふ。中には學校へ遣りたくても遣る事の出來ぬ者が數多ある。裏長屋などの事情などは御存知な

い人が多いだらうけれども、衾共は上も下も無い、すつと上へ行つても同じ事、下に行つても同じ様に見て居るが、裏長屋、所謂貧民窟、さう云ふ處に入つて行くと、一つの釜を向ふ三軒兩隣相寄つて使つて居る。番號を附けたりして、今日はあの家で一番早く此の釜を使ふ、次は其の隣りで使ふといふやうに、順番に一つ釜を三軒でも四軒でも使つて、さうしてお粥を炊いたり、飯を炊いたりして居るやうな有様。夫れから今着て居る其羽織一枚、これも晩には質屋の門を潜つて行く、又明日はそれを出して着て行く。さう云ふやうな生活をして、辛うじて其日々々の煙を揚げて行く人が澤山ある。それが皆達者で、其日一日を送り得れば宜いけれども、偶々老人があつて足腰が立たない、最愛の妻は病床に臥すといふ有様で、重い病に罹つて居る。子供は腹が空つて乳を求めて呱呱として啼いて居る。さう云ふ境遇に居る者も却々大變なもの、寧ろ樂に暮して居る人は世界に於て極く少數で、苦みに苦んで暮して居る人が大多數を占めて居る。斯う云ふ事が將來社會問題として、學者に依つても識者に依つても又は宗教家に依つても、深く研究されねばならぬ事と思ふ。此儘にして置いたな

らば何處かで其の不平が起つて来る、其の不平が積つて何處かで爆發する。所謂危険思想なるものも、矢張り斯う云ふ處から追々に現はれて来るのである。お互に充分修養して處世の大本を考へ、自己の立脚地を定めねばならぬのである。

新らしき女

一 衝動は主義に非ず

近來は、少しばかりの教育を受けたとか、或は少しばかりの西洋の書籍を読んだとか申す相當の年輩に達した人達が、何かの事情で不意と一時、心に浮んだ妄執を立派な主義でもあるかの如くに心得違ひをして、毫も恥ぢ臆する色もなく堂々と新聞雜誌に書き立てたり、又、之れを實地に行つて自分が餘程豪い者になつたつもりで、敢て畏るゝ處もなく「これが私の主義である」などと、威張り散らして得々の色を示す傾向のある事は、實に歎かましい沙

汰と申すべき事である。斯うした思想や行爲と云ふものは、未だ自心に確固たる根底が出来ない人に多く見られるので、何かの事情で、不意と一時、心に浮んだ妄執とでも見るべきもので決して主義と稱せらるべきものではない。單に一時の氣隨氣儘に外ならぬ。我儘根情である。之れを心理學者は本能の發作或は衝動と名づけて居る。動物中にあつても最も劣等なりとせらるゝアミーバが、周囲の不快に應じて其の擬足を伸べたり縮めたりするのは本能の發作である。快感を伴ふ刺戟に接しさえすれば、其の有害なると否なとを考慮するの遑なく、直ちに之に向つて行動するのは是れ衝動的行爲である。近來は氣隨氣儘な婦人が平然として、婦徳を無みし人倫を破壊し、その社會組織に及ぼす影響如何の如きを毫も念頭に置かず、たゞ刹那の愉快を味ひ得さへすれば、それで宜しいと謂つた様な調子でやる行動は、恰もアミーバが、本能の發作によつて擬足を伸縮したり、幼兒が單に一時の快感を得んが爲めの一念から、衝動的行動を取るのと、何の選ぶ處が無い。之を主義などと吹聴し、世間も亦之を主義であるかの如く見做すのは、危險此上もなき事であると思ふ。

社會に稍頭角を顯はし、文筆を弄んだり言論を恣にしたりするを得る先輩の女に、斯る氣隨氣儘な女が多く、本能の發作或は衝動をば立派な主義であるかの如く、堂々と三百理窟を並べて論じ立てたり辯じ立てたりするので、若い智慮分別の到らぬ女達が、之に惑はされて迷ふのも、誠に無理の無い事である。主義とは決して斯の如く輕薄な浮いたものでは無い。

二 美女其の顔を燬く

甲斐の武田晴信入道信玄の曾孫に當るものに總女と申す娘があつた。徳川第二代の將軍秀忠が、その娘の和姫を後水尾天皇の女御に奉つた時に、御付の女官となり、宮中に奉仕したものである。和姫が女御より皇后に冊立せられて崩御になつてから、總女は禁裏より御暇を賜はつて江戸に歸り、武田壽庵と申す人に嫁して其妻となり、二人の子まで擧げ、家庭は至つて和氣霽々たるものであつたが、一朝感ずる處あり禪に心を寄せて出家の一念を思ひたち、最愛の良人と二人の子とに別れを告げ、決然家を出でて參禪の師に就かうとしたのである。

總女は先づ芝白金瑞聖寺の第二世となつた鐵牛和尚を訪ねて佛弟子たらんと請うて見たが、和尚は、總女の婢姪たる容姿を見たので之を許さず、「爾こそは正法を攪亂せんとする妖魔の化身であるぞよ」と喝しつけ、弟子達に命じて寺門の外に摘み出ださして了つた。よつて總女は、更に駒込の白鷗禪師の許に走せ鐵牛和尚に頼んだと同じやうに、衷心よりの志望を述べて見たが、禪師も亦總女の年齒容色二つながら尙ほ太だ壯んなるを見て、斷然得度を跳ねつけられたのであつた。

總女は茲に於て全く取りつく島を失つて仕舞ひ、途方に暮れて悄悄途中を歩いて來ると、不圖眼に入つたものが或家の縁頭にあつた赤熱な火を盛つた火熨斗である。總女は之を見るや、何氣なき態にて「一寸御貸し下され」と挨拶するや否や、直に其の火熨斗を取り上げ、之を我が美しい顔に押し當て、大きな火痕を拵へて、今までとは打つて變つた醜い顔にして仕舞つた。

それから直ぐ又白鷗禪師の許に引つ返へし、是非とも佛弟子にして下さるやうにと更めて

懇願に及ぶと、今度は禪師も總女の一念に感じ入り、緑の黒髪を剃り落させて大休了然尼の法名を與へ、總女を佛弟子に致したとの事である。其時、了然尼の賦した詩に此様なのがあ

る、
昔遊ニ宮裡ニ燒ニ蘭麝。 今入ニ禪林ニ燎ニ面皮。

四序流行亦如此、 不知誰是箇中移。

主義とは、斯くの如くにして初めて漸く出来るもので、快感を追うて走る氣隨氣儘の行動は、之を主義ある行爲だなどと謂ひ得べきものでは無いのである。單純なる本能の發作、衝動の結果たるに過ぎぬのである。

三 菩提心を發せよ

印度の邦は熱帶地であるから、彼の邦の女は日本の女などのやうに衣服や帯に金銭をかけ